

一 此書中△印ノナルモノハ總テ參看公布ニ係ルナリ又左傍双柱ハ衙門ノ名ナリ

二 一餘ハ皆ナ刑法ノ凡例ト敢テ異ナルコトナケレハ彼ノ凡例ニ就テ之ヲ見ルヘシ然レモ偶々亦  
 刑法ニ適用シテ治罪法ニ適用セサルモノアレハ此點讀者ノ活眼ヲ以テ宜シク見分ケアラ  
 ントナセフナリ

一 參看規則中監獄則并ニ各裁判所ノ位置及區畫表ハ最モ必要ナルニ付キ附錄ニ之ヲ掲載シ  
 以テ讀者ノ便益ハ供ス但シ監獄則ハ註釋ヲ施サス

一 見出ニ治ノ字ヲ書スルハ即チ治罪法ノ略印ニシテ監ノ字ヲ書スルハ即チ監獄則ノ略印又  
 表ノ字ヲ書スルハ即チ各裁判所ノ位置及區畫表ノ略印ナリ

治罪法註釋目錄

第一編 總則	自第一條 至第三十條	一〇〇丁
第二編 刑事裁判所ノ構成及ヒ權限	自第三十一條 至第九十一條	四〇丁
第三章 普通則	自第三十二條 至第四十八條	全六丁
第二章 違警罪裁判所	自第四十九條 至第五十三條	五四丁
第三章 輕罪裁判所	自第五十四條 至第六十二條	五九丁
第四章 控訴裁判所	自第六十三條 至第六十九條	六五丁
第五章 重罪裁判所	自第七十條 至第七十六條	六八丁
第六章 大審院	自第七十七條 至第八十二條	七六丁
第七章 高等法院	自第八十三條 至第九十一條	七三丁

二

第五編 犯罪、捜査、起訴及豫審

第一章 捜査

第一節 捜査官の報告

第二節 現行犯

第二章 起訴

第一節 檢察官の起訴

第二節 民事原告人の起訴

第三章 豫審

第一節 命令状

第五編 第五節 密室監獄

自第九十一條  
至第九十二條

七八丁

自第九十二條  
至第九十三條

七八丁

自第九十三條  
至第九十四條

全八丁

自第九十四條  
至第九十五條

八七丁

自第九十五條  
至第九十六條

九三丁

自第九十六條  
至第九十七條

九四丁

自第九十七條  
至第九十八條

九六丁

自第九十八條  
至第九十九條

九八丁

自第九十九條  
至第一百條

一〇〇丁

自第一百條  
至第一百零一條

一一五丁

第三節 證據

自第四百四十六條  
至第四百四十八條

一一七丁

第四節 被告人ノ訊問及對質

自第四百四十九條  
至第四百五十七條

一一九丁

第五節 檢證及物件差押

自第四百五十八條  
至第四百六十九條

一二五丁

第六節 證人訊問

自第四百七十條  
至第四百九十一條

一三四丁

第七節 鑑定

自第四百九十二條  
至第五百零一條

一四八丁

第八節 現行犯ノ豫審

自第五百零二條  
至第五百零九條

一五二丁

第九節 保釋

自第五百一十條  
至第五百十九條

一五八丁

第十節 豫審終結

自第五百二十條  
至第五百三十三條

一六三丁

第四章 豫審上訴

自第五百三十四條  
至第五百六十一條

一七〇丁

第四編 公判

自第五百六十二條  
至第五百九十九條

一八三丁

四

第一章 通則

第二章 違警罪公判

第三章 輕罪公判

第四章 重罪公判

第五編 大審院ノ職務

第一章 上告

第二章 再審ノ訴

第三章 裁判管轄ヲ定ムルノ訴

第四章 公判又ハ嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴

第六編 裁判執行復權及ヒ特赦

自第二百六十二條  
至第二百六十七條

全 丁

自第二百二十一條  
至第二百四十六條

二〇九丁

自第二百四十七條  
至第二百七十一條

二一八丁

自第二百七十二條  
至第四百九條

二三八丁

自第四百十條  
至第四百五十八條

二四四丁

自第四百十條  
至第四百三十八條

全 丁

自第四百三十九條  
至第四百四十七條

二六三丁

自第四百四十八條  
至第四百五十一條

二七三丁

自第四百五十一條  
至第四百五十八條

二七五丁

自第四百五十九條  
至第四百八十八條

二七九丁

第一章 裁判執行

第二章 復權

第三章 特赦

自第四百五十九條  
至第四百六十九條

二七九丁

自第四百七十條  
至第四百七十六條

二九一丁

自第四百七十七條  
至第四百八十八條

二九五丁

五

治罪法註釋目錄 終

第一章 總論	至第四百六十六條	二五五下
第二章 治罪法ノ適用	至第四百六十六條	二五五下
第三章 治罪法ノ執行	至第四百六十六條	二五五下
第四章 治罪法ノ救済	至第四百六十六條	二五五下
第五章 治罪法ノ附則	至第四百六十六條	二五五下

治罪法註釋

一名 獨案内

杉山哲理 校閱  
西村英 註釋

刑法ト治罪法トハ猶ホ車ノ兩輪鳥ノ双翼ノコトク決シテ其一ヲ偏廢ス可ラサルモノナリ  
 故ニ若シ其一ヲ欠カハ到底其用ヲ爲サ、ルナリ否ナ管ニ其用ヲ爲サ、ルノミナラス之レ  
 カ爲メ却テ不測ノ禍害ヲ惹起スルノ恐レナキ能ハス去レハ既ニ刑法アラハ則チ治罪法ナ  
 カル可ラサルモノトス是レ刑法ト治罪法トハ同時ニ發布セラレ又同時ニ實施セラレタル  
 所以ナリ抑モ治罪法ナルモノハ刑法ヲ活用シ其制裁ヲ顯著ナラシムル爲メ重罪輕罪違齏  
 罪ノ犯ヲ搜索シ公訴ヲ起スヨリ以テ其罪ヲ糾治シ裁判官渡テ執行スルニ至ルマテ凡テ刑  
 事ノ訴訟手續ニ關ススル一切ノ條則ヲ記載シタルモノナリ故ニ一ニ又刑事訴訟法ト云フ  
 ナリ

◎第一編 總則(凡三十條)

治罪法ハ刑法ト其編纂ノ體ヲ異ニシ總則ノ外更ニ通則ナルモノヲ設ケテリ而シテ其總  
治

則下ハ此治罪法全體ニ關スル原則ヲ掲ケタルモノニシテ通則トハ唯々其編ノ一部ヲ統  
活スルニ止マルモノナリ

第一條 公訴ハ犯罪ヲ証明シ刑ヲ適用スルヲ目的トスル者ニシテ法律ニ定メタル區別ニ  
從ヒ檢察官之ヲ行フ

訴ニニアリ曰ク公訴曰ク私訴即チ是ナリ而シテ其目的トスル所互ニ相異ナルヲ以テ之ヲ  
一條中ニ併記セスシテ之ヲ二條ニ分配ス即チ本條ハ其公訴ノ何物タルヲ解義シタルモノ  
ニシテ其私訴ノ解義ハ之ヲ次條ニ規定セリ  
抑モ公訴ナルモノハ犯罪ノ事蹟ヲ明證シ果シテ某ノ犯罪アルコトヲ證明シタル以上ハ何等  
ノ刑カ之ニ適スルカ其適スル所ノ刑ヲ用ヒンコトヲ目的トスル者ニシテ法律ニ定メタル區  
別即チ此治罪後チノ各章ニ規定シタル區別ニ從ヒ檢察官之ヲ行フモノトス  
固ト罪ニニアリ曰ク公益ニ關スル罪曰ク私益ニ關スル罪即チ是ナリ然レモ其私益ニ關ス  
ル罪必スシモ私益ヲ害スルノミコシテ止マラス必ス多少公益ヲ害スルモノニシテ其直接  
ニ公益ニ關スル罪ト爲シ其間接ニ公益ヲ害スルモノヲ以テ私益ニ關スル罪ト爲スノ差ア

ルニ過キサルナリ故ニ苟モ法律ニ定メタル罪ヲ犯ス者アルコト於テハ檢察官ハ社會ノ名代  
人トナリ以テ之レガ公訴ヲ起スモノトス去レト幼者ヲ零取誘拐スル罪又ハ猥褻姦淫ノ罪  
或ハ誣告及ヒ誹毀ノ罪等ノ如キ被害者又ハ其親屬ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論スルモノニ至テ  
ハ其告訴スルヲ待テ公訴起リ告訴願下ケテ爲シタルキハ公訴消滅シテ復々再ヒ公訴ヲ起  
ズコトヲ得サルモノトス

法律ニ定メタル區別トハ後チノ條々ヲ讀ムニ至テ自ラ知ルヲ得可キ所ナレモ其要領ヲ概  
示セハ檢察官職務ノ區別ヲ云フモノニシテ即チ檢察官ハ其附屬ナル裁判ノ等級ニ應ジ各  
自管轄權限アリテ其範圍内ニアラサレハ以テ公訴ヲ行フヲ得サルモノトス例ヘハ輕罪ハ  
始審裁判所々轄ノ地ノ檢察官之ヲ行ヒ違警罪ハ違警罪裁判所々在ノ地ノ警部之ヲ行フノ類  
ナリ

檢察官トハ檢事長、檢事、檢事補及ヒ違警罪裁判所ニ於テハ刑事原告ノ職務ヲ行フ警部チ  
總稱スルナリ

論者或ハ曰ク元來公訴ヲ爲スノ權ハ社會ノ共有スル所ノモノニシテ且ツ又檢察官ナル者  
治〇第一條

四

ハ即チ政府ノ人ニシテ云ハ、一ツ穴ノ狐ナリ去レハ檢察官ニ公訴ヲ爲スノ權ヲ全任セハ  
或ハ爲メニ民權自由ヲ傷害スルノ恐レナキ能ハス故ニ檢察官ヲ置テ公訴ヲ爲サシメノ  
リ寧ロ一般人民ヲシテ公訴ヲ行フノ自由ヲ與フルニ若カスト是レ一理ナキニ非ラサレ  
深ク之ヲ考フレハ畢竟其一ヲ知テ未々其二ヲ知ラサルノ論ナリ何トナレハ若シ夫レ公訴  
ヲ爲スノ權ヲシテ一般人民ニ與ヘテ檢察官ヲ置カサルニ於テハ爲メニ有罪者ヲシテ空  
ク無罪放免ノ僥倖ヲ得セシムルコアル可ク又無罪者ヲシテ有罪被刑ノ不幸ニ陷ラシムル  
コアル可クレハナリ然ラハ何ヲ以テ此ノ如キ事アリト云フヤ人民ノ多キ或ハ怠惰ナル者  
アリ或ハ畏懼心ヲ抱ク者アリ或ハ私情ヲ狹シ私利ヲ計ル者アリ是ヲ以テ有罪者ヲシテ空  
ク無罪放免ノ僥倖ヲ得セシムルコアリ又或ハ怨恨輕浮ノ情ヨリ濫リニ訴訟ヲ起ス者亦  
少ナシトセズ是ヲ以テ無罪者ヲシテ有罪被刑ノ不幸ニ陷ラシムルコアリ夫レ怠惰ナル者  
ハ己レニ害ヲ蒙ルコアルモ之ヲ默許シテ之レカ訴ヲ起サス又畏懼心ヲ抱ク者ハ己レニ  
害ヲ加ヘシ者暴戾兇惡ナルヲ以テ之ヲ訴フルニ於テハ或ハ再ヒ害ヲ加ヘラレノコト恐レ  
テ之レカ訴ヲ起サス又其犯罪人ト私情アルカ爲メ若クハ金錢ヲ受ケテ猥リニ私和シ留

之レカ訴ヲ起サハルノミナラズ却テ其犯罪ヲ蔭蔽スル等ノ弊ヲ生スルカ爲メ終ニ有罪者  
ヲシテ空ク無罪放免ノ僥倖ヲ得セシム可キコト亦明ナリ又一方ニ於テハ一己ノ私怨ノ爲  
メ無實ノ訴ヲ起シ無辜ノ良民ヲシテ徒ラニ囹圄ノ苦痛ヲ受ケムル等ノ弊害アルヲ免レサ  
ルナリ故ニ公訴ヲ爲スノ權ヲ一般人民ノ自由ニ任セテ檢察官ノ設ケナキ時ハ所謂弱肉強  
食ノ世界トナリ貴顯紳士ノ爲メ卑賤者ハ凌辱セラレ又富人ハ貧人ヲ壓シ若シ顯官豪族ニ  
犯罪アルモ或ハ恐レ又ハ諂諛シ其犯罪者ヨリ賄賂ヲ受ケテ之ヲ庇蔭スル等實ニ厭忌ス可  
キ弊害續々トシテ醸出ス可キナリ故ニ我カ立法者ハ檢察官ヲ設ケテ此等ノ弊害ヲ除キ且  
ツ衆ヲ保護シ社會ヲ安寧ナラシメタリ是レ實ニ良法ト謂フ可キナリ

第二條 私訴ハ犯罪ニ因リ生シタル損害ノ賠償贓物ノ返還ヲ目的トスル者ニシテ民法ニ從  
ヒ被害者ニ屬ス

五

本條ハ私訴即チ刑事ヨリ起ル民事ノ訴ノ性質如何ノ解義ヲ示シタルモノナリ凡ソ一個ノ  
犯罪アレハ大概二個ノ訴訟ヲ生ス曰ク公訴曰ク私訴即チ是レナリ而シテ其公訴ノ意義如  
何ハ第一條ニ於テ既ニ之ヲ説明セリ私訴トハ犯罪ニ因リ私益上ニ損害ヲ被ムリタル者其

治〇第一條

損害ヲ償復スル爲メ若クハ贓物ノ返還ヲ要求スル爲メ行フ所ノ民事ノ訴ヲ爲フナリ是レ  
 被害者ノ一身ニ關スルモノナルヲ以テ若シ其私益ヲ害セサルノ犯罪ナルハ固ヨリ以テ  
 私訴ノ起ル可キモノニ非ラサルナリ玆ニ一ノ疑問アリ何ソヤ身體又ハ榮譽上ノ損害ハ何  
 ヲ以テ賠償ス可キヤ曰ク猶ホ金錢ヲ以テ之ヲ賠償セサルヲ得ス何トナレハ此等ノ損害ト  
 雖モ概テ變シテ金錢ノ損失ト爲レハナリ然レモ其價額ヲ評定スルニ至テハ頗フル困難ナ  
 ルヲ以テ裁判官ニ於テ宜シク交互ノ辨論ヲ聽キ事實ヲ審査シテ其過不及ノ失ナカル可キ  
 價額ヲ定ム可キナリ

前條ニハ公訴ハ檢察官之ヲ行フト記シ本條ニハ私訴ハ被害者ニ屬スト記シタリ是レ何ニ  
 因テ然カク別記シタルカ曰ク公訴ハ其訴權固ト社會ノ共有スル所ナルヲ以テ假令被害者  
 之ヲ拋棄セントスルモ裁判所ハ尙ホ相當ノ刑ヲ科スルモノトス然ルニ私訴ハ之レニ反シ  
 テ被害者特有ノ權利ナルヲ以テ之ヲ訴ヘントスルモ亦之ヲ訴ヘサラントスルモ固ヨリ以  
 テ其被害者ノ自由權内ニ存スルモノニシテ決シテ他ヨリ之ヲ左右スルノ權ナキモノトス  
 故ニ之ヲ行フト屬ストノ差違アリ

抑モ犯罪ニ因リ被ムリタル損害ニ付キ要償ノ權ヲ有スル者ノ類別ハ治罪法ノ定ム可キ所  
 ノモノニ非ラス即チ民法ノ原則ニ於テ何人ト雖モ他人ニ損害ヲ加ヘタル者ハ之ヲ償フ可  
 シ又他人ノ物件ヲ以テ自己ヲ富マズ勿レト云フニ讓レルモノナリ故ニ本條民法ニ從ヒ云  
 々ト記シタルナリ

第三條 公訴ハ被害者ノ告訴ヲ待テ起ル者ニ非ス又告訴私訴ノ棄權ニ因テ消滅スル者ニ非  
 ス但法律ニ於テ特ニ定メタル場合ハ此限ニ在ラス

公訴ハ元來不羈獨立ナル性質ヲ有スルモノニシテ固ト必ス其起ルノ原由アリテ起リ又其  
 滅スルノ所以アリテ後チ滅スルモノナルヲ以テ告訴私訴ノ有無ニ因テ或ハ起リ或ハ滅ス  
 ルトナシ故ニ其起ルノ原由アル時ハ被害者ヨリ告訴ナント雖モ公訴ヲ起シ又告訴私訴ノ  
 權利ヲ拋棄スルト雖モ未ダ公訴ノ滅スル所以ノナキ時ハ公訴ヲ廢棄セサルモノトス但シ  
 幼者ヲ略取誘拐スル罪又ハ猥褻姦淫ノ罪或ハ誣告及ヒ誹毀ノ罪等ノ如キ被害者又ハ其親  
 屬ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論スルモノニ至テハ公訴ハ始終告訴私訴ニ從テ起滅スルモノナリ  
 去レハ此ノ如キモノニ至テハ被害者之レカ告訴ヲ爲スニ於テハ則チ檢察官公訴ヲ爲ス可

シト雖也被害者ニ於テ告訴ヲ爲サズル時ハ如何ニ其害大ナリト雖也檢察官之レカ公訴ヲ爲スコトヲ得サルモノトス又被害者ノ告訴スルニ於テ從テ檢察官之レカ公訴ヲ爲スト雖也若シ被害者ニ於テ其告訴ノ願下ヲ爲ス時ハ公訴獨リ依然引キ續キテ之レカ訴ヲ爲ス能ハス必スヤ被害者ノ告訴願下ヲ爲スト同時ニ公訴消滅スルモノトス既ニ公訴消滅スルヤ復タ再ヒ公訴ヲ起スコトヲ得サルモノトスルヲ其法トスルナリ

第四條 私訴ハ其金額ノ多寡ニ拘ハラヌ公訴ニ附帶シテ刑事裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得但法律ニ於テ其裁判所ニ私訴ヲ爲スコトヲ許サル場合ハ此限ニ在ラス  
又私訴ハ別ニ民事裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得

私訴即チ損害ノ賠償贓物ノ返還ヲ要ムルノ訴ハ半ハ刑事ニ屬シテ半ハ民事ニ屬スルモノナリ之ヲ要スルニ本ト刑事ニ始マリ民事ニ終ルモノナリ故ニ私訴ヲ爲スハ刑事裁判所ナリ又ハ民事裁判所ナリ孰レニテモ人民ノ自由ニ任セタリ唯タ刑事裁判所ニ訴フルハ必ス公訴ニ附帶シテ之ヲ爲スコトヲ得サルニ是レ私訴ハ固ト民事ニ屬スルモノナレハ公訴ニ附帶セカレハ以テ之ヲ爲スコトヲ得サルニ因ルナリ畢竟私訴ヲ刑事裁判所ニ爲スコトヲ許シタ

ルハ實利主義ヨリ出テタルモノナリ何ソヤ私訴ヲ刑事裁判所ニ爲スルハ之レニ因テ三個ノ便益アリ即チ其一ハ刑事裁判所ニ於テ犯罪ノ取調ヲ爲スコト付キ併セテ私訴ノ證據ヲ得ルノ益アリ其二ハ被害者ニ於テ賠償ヲ要メシカ爲メ被告事件ヲ證明シ公訴ヲ補翼スルノ利アリ其三ハ被告人ニ於テ一ノ刑事ニ付テノ辨護ヲ以テ民刑二個ノ辨護ヲ兼スルノ便アリ故ニ私訴ヲ刑事裁判所ニ爲スルハ之ニ因テ以テ訴訟ノ結局迅速ニシ且ツ大ニ裁判入費ヲ減スルノ利益アリ是レ固ト民事ニ屬スルハ私訴ヲ刑事裁判所ニ於テ管理スル所以ナリ本條第一項「私訴ハ其金額ノ多寡ニ拘ハラヌ云々」ト記シタルハ是レ其特例ヲ定メタルモノナリ若シ夫レ此金額ノ多寡ヲ制限スル時ハ或ハ私訴ハ公訴ニ附帶シテ之ヲ爲スコトヲ得可キモノアルモ亦或ハ之ヲ爲スコトヲ得サルモノ少ナシトセス然ラハ本條第一項ハ終ニ自家撞着ノ法タルニ陥ルノ恐レアリ故ニ此特例ヲ設ケタルナリ

「但法律ニ於テ其裁判所ニ私訴ヲ爲スコトヲ許サル場合」トハ今日ニ在テハ未タ其制ナシト雖也將來設置ノ日ヲ慮テ立法者ハ豫メ之ヲ設ケタルナリ例ハ行政裁判所ハ行政上ノ事件ヲ裁判シ陸海軍裁判所ハ軍律ヲ犯シタル者ヲ裁判スト雖也民事上損害賠償ノ訴ニ至  
治○第四條



テハ之ヲ裁判セサル如キ人類是レナリ  
 違警罪ニ付テハ警察署ヘハ私訴ヲ爲スヲ得ス」又公訴ニ附帯シテ爲シタル私訴ハ刑事  
 裁判所ニ於テハ義務者ニ對シ賠償ス可キ義務ノ高ヲ申渡ス可キ若シ資力不足ナル時ハ其  
 資力限リニシテ之ヲ止メ決シテ身代限ノ處分ニ及ハサルモノトス若シ否ラスシテ現今ノ  
 民事ノ規則ニ從ヒ直チニ刑事裁判所ニ於テ身代限リノ處分ヲ爲ス可キモノトセハ是ニ對  
 シ追訴之レアル可シ追訴之レアルハ刑事裁判所ニ之ヲ受ケサル可ラサルコ至ル可シ若  
 シ之ヲ受ケルモノトセハ此追訴ニ付キ其原被ノ間ニ異議之レアル場合ニ於テハ刑事裁判  
 所ニ於テ民事ノ裁判ヲ爲サ、ル可ラサルノ不都合ニ至ル可シ故ニ刑事裁判所ニ對シテ爲  
 シタル私訴ハ其資力限リニテ之ヲ止メ決シテ身代限ノ處分ニ及ハサルモノトス」又民事  
 裁判所ニ私訴ヲ爲スハ訴訟用紙紙ヲ用フ可キモ刑事裁判所ニ之ヲ爲スハ訴訟用紙紙  
 ヲ用フルニ及ハサルモノトス以上三件何レモ皆ナ其筋ノ伺指令内訓等ニ於テ知ル所ナリ  
 第五條 公訴私訴ノ裁判ハ管轄裁判所ニ於テ現ニ施行スル法律ニ定メタル訴訟手續ニ從ヒ  
 之ヲ爲ス可シ

裁判所ニハ各々所管ノ權限アリ即チ犯罪ノ種類性質場所及ヒ被告人ノ身位ニ付キ各々其  
 管轄ヲ異ニスルハ第三十八條第四十條第八十二條等ニ於テ規定スル所ナリ又訴訟手續ニ  
 ハ其履行セサル可ラサルノ要件アリ故ニ管轄裁判言渡ト雖モ若シ現行ノ訴訟手續ニ從ハ  
 サルハ則チ其效ナク又現行ノ訴訟手續ニ從フト雖モ若シ裁判所ノ管轄ヲ違フキハ其裁  
 判言渡ノ效ナシ然レハ一ノ訴訟ヲ起サント欲スル者ハ其公訴タルト私訴タルト論ナク  
 必ス現ニ施行スル法律ニ定メタル訴訟手續ニ從ヒ以テ其管轄ノ裁判所ニ訴ヘサル可ラサ  
 ルナリ

第六條 刑事裁判所又ハ民事裁判所ニ於テ公訴私訴並ニ起ル時ハ公訴ノ裁判ニ先テ私訴ノ  
 裁判ヲ爲ス可カラス若シ賠償返還ノ言渡アリタル後刑ノ言渡アリタル時ハ其ニ其效ナカル  
 可シ  
 凡ソ三個ノ者アランコ孰レチ先キニ孰レチ後ニスルモ敢テ其利害ヲ異ニセサルハ以テ  
 其孰レチ先キニスルモ可ナレモ若シ其先後ノ如何ニ由リ其利害ヲ異ニスルアコハ之レカ  
 先後順序ヲ定ムルヲ以テ必要ノコトスルナリ今夫レ私訴ハ公訴ニ附帯スルキハ刑事裁判  
 治〇第五條〇第六條

所ニ之ヲ訴フルヲ得ル者ナレハ若シ私訴ヲ刑事裁判所ニ訴フル時ハ則チ其刑事裁判所  
 ニ於テ公訴私訟並起ルノ場合トナリ若シ又之ヲ民事裁判所ニ訴フル時ハ即チ其刑事裁判  
 所ト民事裁判所ニ於テ公訴私訟並起ルノ場合トナルナリ既ニ公訴並起ルニ於テハ其先後  
 如何ニ因リ大ニ其利害ヲ異ニスルナリ何トナレハ先キンスレハ人ヲ制シ後ルレハ人ニ制  
 セラルハノ理ニシテ其先キナル者ハ主トナリ以テ後チナル者ヲ左右スルノ力アルハ是レ  
 自然ノ勢ナリ故ニ公訴私訟並起ルニ於テハ孰レチ先キトシ孰レチ後チトシテ可ナランカ  
 必スヤ之レガ先後チ定メサル可ラサルモノトス夫レ公訴ナル者ハ固ト私訴ノ有無ニ拘ハ  
 ラス之レガ訴ヲ爲スヲ得ル者ニシテ獨立ノ性質ヲ備ヘタル者ナリ然ルニ私訴ナル者ハ  
 之レニ反シテ刑事裁判所ニ訴ラルルニ其公訴ニ附帶セサルヨリハ決シテ其訴ヲ爲スヲチ  
 得サルモノトス故ニ私訴ハ固ト獨立ノ性質ナク附從ノ者ナリ去レハ公訴ハ其本ニシテ私  
 訴ニ其末ナルノ目子輩未タ先キニシテ其本チ後チニスルノ可ナルヲ聞カザルナリ且ツ夫  
 レ熟字ノ點ヨリ見ルモ公<sup>○</sup>私<sup>○</sup>ト云ヒテ私<sup>○</sup>公<sup>○</sup>ト云ハス是レ其公訴ヲ先キニシテ私訴ヲ後チニ  
 セサル可テサル所以ナリ故ニ本條ニ於テ公訴私訟並起ル時ハ公訴ノ裁判ニ先テ私訴ヲ爲

ス可ラザルモノト規定ス若シ賠償返還ノ言渡アリタル後刑ノ言渡アリタル時ハ公訴私訟  
 ノ言渡ハ其ニ其效ナキモノトス

第七條 民事裁判所ニ私訴ヲ爲シタル時ハ檢察官ノ起訴アルニ非サレハ願下ヲ爲シ更ニ刑  
 事裁判所ニ其訴ヲ爲スヲ得ス

刑事裁判所ニ私訴ヲ爲シタル時ハ被告人ノ承諾ヲ得テ願下ヲ爲シ更ニ民事裁判所ニ其訴ヲ  
 爲スヲ得

私訴ニ刑事裁判所ニ爲スハ必ス公訴ニ附帶セサルヨリハ之ヲ爲スヲ得サルノ制ナリ故  
 ニ私訴ニ刑事裁判所ニナスノ場合ニ於テハ公訴アリテ而シテ後チニ私訴アリ公訴ナクレ  
 ハ即チ私訴ヲナスヲ得ズ然レモ私訴ニ民事裁判所ニナスハ其公訴ノ有無ニ拘ハラズ之  
 チ爲スヲ得ルモノナレハ若シ私訴ニ民事裁判所ニナス時ハ或ハ公訴ノ後チニ在ルノ場  
 合モアレハ又或ハ其公訴ニ先テ私訴ヲナスノ場合モアル可シ故ニ公訴即チ檢察官ノ起訴  
 アリタルノ後チニ私訴ニ民事裁判所ニ爲シタルニ於テハ原告人ハ直チニ願下ヲナシ更ニ  
 刑事裁判所ニ其訴ヲ爲スヲ得レモ若シ檢察官ノ起訴アレサルニ先テ私訴ニ民事裁判所

治○第七條

一 爲シタルニ於テハ其檢察官ノ起訴アルマテハ願下ナシ更ニ刑事裁判所ニ其訴ヲナス  
 一 得サルモノトテ固ト私訴ヲ刑事裁判所ニナスコトヲ得ルモノハ公訴アルニ付キ便利ヲ  
 以テ之ヲ許シタルモノナレバ若シ公訴ナキ時ハ決シテ之ヲ刑事裁判所ニ訴フルコトヲ得ス  
 何シヤ元來私訴ハ民事ニ屬スルモノナレバ公訴ナキ時ハ毫モ刑事ノ性質ヲ有セス故ニ第  
 四條ヲ以テ「私訴ハ其金額ノ多寡ニ拘ハラヌ公訴ニ附帶シテ刑事裁判所ニ之ヲナスコト  
 得」ト規定シ其反意ニ私訴ハ公訴ニ附帶セサルコトハ決シテ之ヲ刑事裁判所ニナスコト  
 得サルノ旨ヲ默示セリ去レバ民事裁判所ニ私訴ヲ爲シタル時ハ檢察官ノ起訴アルニ非サ  
 レハ願下ナシ更ニ刑事裁判所ニ其訴ヲナスコトヲ得サルヤ固ヨリ第四條ニ於テ既ニ知ル  
 所ナリ第二項ハ敢テ註釋ヲ要セスシテ其意既ニ判然タリ故ニ之レカ贅釋ヲ施サズ  
 第八條 被告人免訴又ハ無罪ノ旨渡テ受ケタリト雖モ民法ニ從ヒ被害者ヨリ賠償返還ヲ要  
 スルノ妨礙トナルコトナカレ可シ  
 民事ノ爲メニ刑事ヲ左右スルコト能ハサルハ前數條ニ於テ既ニ之ヲ制定ス然レハ刑事ノ爲  
 メニ民事ヲ左右スル能ハサルコトモ亦之ヲ規定セサル可ラス今本條ハ刑事ノ爲メ民事ノ妨

礙ト爲ルコトナキヲ示シタルモノナリ  
 免訴トハ第二百二十四條ニ列示セル犯罪ノ證據充分セラサル時被告事件罪トナラサル時  
 公訴ノ期滿免除ト爲リタル時確定裁判ヲ經タル時大赦アリタル時法律ニ於テ其罪ヲ全免  
 スル時等ノ場合ヲ云フナリ無罪トハ本案ノ審理ヲ盡シタル後被告人犯罪ノ証憑ナク若ク  
 ハ法律ニ於テ其責ナキ場合ニテ第三百五十五條第三百五十八條第四百條ニ規定スルモノ  
 即チ是レナリ今夫レ被告人ハ其免訴又ハ無罪ノ旨渡テ受ケタリト雖モ元來民法ノ原則ト  
 スル所ハ何事ニ因ラス人ノ損害ヲ加ヘタル者ハ之ヲ償フ可シ又錯誤ニ因テ他人ノ物ヲ得  
 タル者ハ必ス之ヲ返還ス可シト云フニ在リテ其原因ヲ問ハスシテ其結果ヲ論スルモノナ  
 レハ之レカ爲メ決シテ賠償返還ヲ要ムルノ妨礙トナルコトナキモノナリ乞フ其一例ヲ示サ  
 シニ茲ニ人アリ他人ノ所有物ヲ竊取シタリトノ訴ヲ受ケタルニ其之ヲ占有シタルハ水難  
 火災等ノ際過誤ニ因テ之ヲ占有シタルコトヲ証明スルニ於テ其人罪ナキヲ得タリト雖モ其  
 物件ハ必ス之ヲ返還セサル可ラス若シ之ヲ賣却シ若クハ消費シタルキハ其代價ヲ償ハサ  
 ルヲ得ルカ如キ是レナリ刑法第四十六ニ曰ク「犯人刑ニ處セザレ又ハ放免セラレト

治○第八條

雖曰被害者ノ請求ニ對シ贓物ノ還給損害ノ賠償ヲ免ガレ、トテ得ス。ト是レ本條ノ設ケ  
ル所以ナリ。

第九條 公訴ヲ爲スル權ハ左ノ條件ニ因テ消滅ス

- 一 被告人ノ死去
- 二 告訴ヲ待テ受理ス可キ事件ニ付テハ被害者ノ棄權又ハ私和
- 三 確定裁判
- 四 犯罪ノ後頒布シタル法律ニ因リ其刑ノ廢止
- 五 大赦
- 六 期滿免除

社會ノ事物夥多ナリト雖曰獨リ日本畫ノ幽靈ヲ除キ餘ハ皆ナ始メアル者必ス終リアル者  
アル者必ス尾アリ夫レ公訴ノ起ル時アレハ則チ亦從テ其消滅スルノ期ナガル可ラス今本  
條ハ其公訴ノ消滅スル理由ヲ列示セルモノナリ故ニ本條ニ列記スル六個ノ場合ニ於テハ  
公訴ヲ起スコトヲ得サルモノトス否ナ之ヲ起スコトヲ得可シト雖曰此ノ場合ニ於テ公訴起リ

タル時ハ訴訟管係人及ヒ起訴人ハ其裁判言渡ニ至ル迄何時ニテモ其公訴ノ棄却アラソ  
ク請求シ又裁判所ニ於テ其職權ヲ以テ之ヲ棄却スルヲ得可シ否ナ之ヲ棄却セサル可  
サルモノトス若シ又既ニ本案ノ裁判アリタル時ハ此理由アルヲ以テ其裁判ヲ破毀スル  
得可シ否ナ之ヲ破毀セサル可ラサルモノトス  
第一被告人ノ死去トハ其被告人死去スル時ハ其罪ノ問フ可キ者ナシ古ヘ野蠻蒙昧ノ時ニ  
在テハ被告人死去スル時ハ則チ其後嗣子近親ニ及ボセシコアリシカ抑モ刑罰ハ其犯罪ヲ  
ナセルモノニ限ルヲ以テ法律ノ原則トスルカ故ニ文明國ニ於テハ終ニ其非法廢滅ニ歸セ  
リ又其文明國ニ於テモ近來マテハ被告人死去スル時ハ其屍體ト名譽トニ就キ訴訟ヲ行フ  
コアリシカ是レ亦非理ノ最モ甚クシキ者ナリ何トナレハ活人ニ在テハ自ラ辨護シ若クハ  
他人ニ辨護ヲ依頼マテ之レカ辯護ヲ爲サシムルヲ得ルヲ以テ或ハ其罪アリテ刑罰ヲ被  
ル可キコアルモ亦或ハ全ク無罪ニシテ其辨護ノ爲メ無罪タルヲ証明スルコアルハ屢々聞  
見スル所ノ事實ナリ然ルニ死人ニ於テハ誰カ之ヲ辨護セン好シヤ之ヲ辨護スル者アルモ  
其本人ノ能ク情實ヲ知ルニ若カス故ニ其本人ノ辯護ニシテナカラシムハ固ト無罪タル可  
治○第九條

雖被害者ノ請求ニ對シ贓物ノ還給損害ノ賠償ヲ免カレ、トモ得ス。ト是レ本條ノ設ケ  
ル所以ナリ。

第九條 公訴ヲ爲スル權ハ左ノ條件ニ因テ消滅ス。

- 一 被告人ノ死去
- 二 告訴ヲ待テ受理ス可キ事件ニ付テハ被害者ノ棄權又ハ私和
- 三 確定裁判
- 四 犯罪ノ後頒布シタル法律ニ因リ其刑ノ廢止
- 五 大赦
- 六 期滿免除

社會ノ事物夥多ナリト雖モ獨リ日本畫ノ幽靈ヲ除キ餘ハ皆ナ始メアル者必ス終リアル首  
アル者必ス尾アリ夫レ公訴ノ起ル時アレハ則テ亦從テ其消滅スルノ期ナカル可ラズ今本  
條ハ其公訴ノ消滅スル理由ヲ列示セルモノナリ故ニ本條ニ列記スル六個ノ場合ニ於テ  
公訴ヲ起スコトヲ得サルモノトス否ナ之ヲ起スコトヲ得可シト雖モ此ノ場合ニ於テ公訴起リ

タル時ハ訴訟管係人及ヒ起訴人ハ其裁判官渡ニ至ル迄何時ニテモ其公訴ノ棄却アラソ  
ク請求シ又裁判所ニ於テハ其職權ヲ以テ之ヲ棄却スルヲ得可シ否ナ之ヲ棄却セサル可  
サルモ又トス若シ又既ニ本案ノ裁判アリタル時ハ此理由アルヲ以テ其裁判ヲ破毀スルヲ  
得可シ否ナ之ヲ破毀セサル可ラサルモノトス  
第一被告人ノ死去トハ其被告人死去スル時ハ其罪ノ問フ可キ者ナシ古ヘ野蠻蒙昧ノ時ニ  
在テハ被告人死去スル時ハ則テ其後嗣子近親ニ及ボセシコアリシカ抑モ刑罰ハ其犯罪ヲ  
ナセルモノニ限ルヲ以テ法律ノ原則トスルカ故ニ文明國ニ於テハ終ニ其非法廢滅ニ歸セ  
リ又其文明國ニ於テモ近來マテハ被告人死去スル時ハ其屍體ト名譽トニ就キ訴訟ヲ行フ  
コアリシカ是レ亦非理ノ最モ甚クシキ者ナリ何トナレハ活人ニ在テハ自ラ辨護シ若クハ  
他人ニ辨護ヲ依頼シテ之レカ辯護ヲ爲シムルヲ得ルヲ以テ或ハ其罪アリテ刑罰ヲ被ル  
ル可キコアルモ亦或ハ全ク無罪ニシテ其辨護ノ爲メ無罪タルヲ証明スルコアルハ屢々聞  
見スル所ノ事實ナリ然ルニ死人ニ於テハ誰カ之ヲ辨護セン好シヤ之ヲ辨護スル者アルモ  
其本人ノ能ク情實ヲ知ルコト若カス故ニ其本人ノ辯護ニシテナカラシコト固ト無罪タル可  
治○第九條

考者亦誤テ有罪ト判決スルノコトキ保シ難シ否ナ其此ノ如キ弊アル可キコト蓋シ免ル  
 事ノ通患ヲ嗚呼信留ヲ發シ以テ辨護スルコト能ハサル者ヲ刑スルハ猶ホ手足縛ル  
 者ヲ毆打スルヤ如シ今本條第一コ於テ被告人死去シタル時ハ公訴ヲ爲スノ權消滅スル  
 事ト一定ト抑モ法律ハ其規定シタル範圍ノ上ニ出ツルヲ禁ズル共ニ其規定シタル範圍  
 ノ下ニ降ルモ亦之ヲ許サズ故コ被告人死去スル時ハ以テ其死人コ對スル公訴ノ權ハ消滅  
 事ト雖モ他ノ共犯人ノ尙ホ生存スルコト公訴權ハ決シテ消滅セサルモノト去テハ有夫姦  
 事ト犯シタル者ノ内既ニ姦婦ノ死去シタル時ハ其婦コ對スル公訴ノ權ハ消滅ス可キモ現  
 存スル姦夫コ對スル公訴ノ權ハ未ダ消滅セサルモノトス人或ハ曰ク姦夫ヲ刑ニ處スル  
 時ハ辨護スルコト能ハサル婦ノ名譽ヲ汚スコト甚クシキヲ以テ姦夫コ對スル公訴權モ亦消滅  
 事ト其レ然リ豈ニ其レ然ラシヤ死婦ノ名譽ヲ汚スノ故ヲ以テ證據明白ナル姦夫ヲ不問  
 置クハ是カ非カ予輩ハ其非ナルコト斷言セサルヲ得サルナリ故ニ明治十五年三月四日  
 根始審裁判所判事請訓ニ於テ同年四月一日ヲ以テ姦婦死去スルモ公訴權ハ消滅セサル  
 ノ旨ヲ内訓アリ

第二被害人ノ棄權私和トハ其告訴ヲ要スル事件ニ就テ被害人ヨリ其告訴ヲ願下ケ若クハ  
 私和スル時ハ公訴ヲ起スコト得ズ或ハ既ニ公訴ヲ起シタルモノナレハ則チ之ヲ繼續スル  
 コトヲ得サルモノトス然レト若シ其告訴ヲ要セサルノ事件ニ於テハ假令被害人ノ私和スル  
 コトアルモ之レガ爲メ決シテ公訴權ノ消滅セサルモノトス而シテ其所謂棄權トハ告訴ヲ要  
 ス可キ事件ニ付キ被害者自ニ其告訴ス可キノ權ヲ棄テ、之レガ告訴ヲ爲サ、ルチ云ヒ其  
 所謂私和トハ被害者ナルモノ彼ノ犯罪人ト私ニ和スルチ云フナリ

第三確定裁判ト雖モ神ナラズ法官ノ判決シタルモノナレハ誤謬ナリトハ斷言スルコト能ハ  
 カレモ其裁判ノ當否ヲ論争シテ底止スル所ナキ時ハ所謂盜賊ニモ三分ノ理アルノ譬ヘ  
 テ到底終局ヲ結フノ期アル可ラス况ンヤ餘リ永ク論争スルコト於テハ之レガ爲メ折角眞理  
 ニ就キタル者モ終ニ其眞理ノ境ヲ踰テ誤謬ノ域ニ出ルハ實際往々之レアル所ニ彼ノ討  
 論會ナトニ於テハ屢々目撃スル所ノ事實ナルコト於テチヤ故ニ確定裁判ヲ經タルノ後ハ既  
 ニ公訴ヲ爲スノ權消滅スル者トス然レモ共犯罪ノ如キ一人既ニ確定裁判ヲ經タリト雖當  
 初其共犯人アリシコトヲ知ラス其確定裁判ヲ經タル後ニ於テ他ニ共犯人アルコトヲ發覺シ

治

タル時ハ則チ共犯人ニ就テハ未タ裁判アラサルニ因リ公訴ノ權ハ依然存在スル者トス何  
 トナレハ刑罰ハ其本人ノ一身ニ止リ敢テ他人ニ及スヲ許サ、ルト共ニ亦一人刑ヲ免レ  
 若クハ其刑輕キニ就キトテ之カ爲メ他人ヲ必シモ其例ニ倣フ可シトノ一定ナル道理  
 ナケレハナリ然レト茲ニ變例アリ以テ一被告人ヲ無罪ト決スルニ於テハ從テ自ラ又他ノ  
 被告人ノ無罪タルヲ併セテ證スルヲアリ何ヤ犯姦ノ被告人タル者ハ二人共ニ其罪ヲ犯  
 スニ非サレハ以テ其罪ヲ犯スヲ得サル者トス故ニ一人既ニ無罪タルヲ證スルニ於テ  
 ハ他ノ一人ハ其無罪タルヲ亦問ハスノ既ニ判然タリ又盜罪ノ正犯ニ對スル公訴ニ付キ其  
 無罪タルノ裁判アリタル時ハ從犯ト思量セシ者ニ對シ公訴ヲ起ス可ラサル者トス何トナ  
 レハ盜罪ニ於テ正犯ナケレハ則チ固ヨリ以テ從犯ノアル可キ道理ナケレハナリ是レ猶ホ  
 君ナケレハ臣ナク師ナケレハ弟ナク父ナケレハ子ナキカコトシ  
 第四抑モ法律ナル者ハ上ハ其法律ヲ頒布シタル時ヨリ以前ニ及ホスヲ得ス又下ハ其之  
 ヲ廢止シタル時ヨリ以後ニ至ルヲ得ス故ニ法律ノ關スル所ハ其頒布シタル時ヨリ其之  
 ヲ廢止シタル時マテノ時日内ニ在テ働クモノニシテ其餘ハ一步タリトモ出ツルヲ得サ  
 ルモノトシ舊法ニ於テ某ノ所爲ニ付キ刑ヲ定メタリト雖モ其所爲敢テ社會ニ危害ヲ被ル  
 可キノ恐レナキハ新法ヲ以テ其刑ヲ廢止スルヲアリ然レハ其所爲ニ就キ公訴ヲ爲スノ  
 權ハ茲ニ消滅スルモノナリトス

第五大赦是レハ敢テ贅釋ヲ要セズ但シ特赦ハ本條公訴權消滅ノ限リニアラス  
 第六期滿免除若シ公訴ヲ爲スノ權アル時ハ以テ期滿免除ニ非ラス故ニ期滿免除ニハ固ヨ  
 リ公訴ヲ爲スノ權ナキヲ亦敢テ贅釋ヲ施スニ及ハサル所ナリ

第十條 私訴ヲ爲スノ權ハ左ノ條件ニ因テ消滅ス

一 被害者ノ棄權又ハ私和

二 確定裁判

三 期滿免除

彼ノ公訴權消滅ノ原因ハ凡ソ六個アリ然ルニ今此ノ私訴權消滅ノ原因ハ僅ニ其半ハ止  
 マルハ何ソヤ刑法上ニ於テハ其人ヲ主トシテ其財產ヲ客トスレモ民法ニ於テハ全ク右ニ  
 一轉シテ其財產ヲ主トシ其人ヲ客トス故ニ公訴ハ其人死去スルキハ則チ其權消滅スルモ

治〇第十條

私訴ハ其人死スルモ決シテ其權消滅セズシテ其相續人ニ及ブモノトス蓋シ義務者 家ニアル財産ハ都テ其義務ノ抵當タルナリ又國君ト雖モ私ノ財産ヲ損害シタル者ヲ大赦スルノ理ナケレハ本條ニハ大赦ノ項ヲ編入セズ其餘ハ敢テ註釋ヲ用ヒスシテ之ヲ知ル可シ

第十一條 公訴期滿免除ノ期限左ノ如シ

一 違警罪ハ六月

二 輕罪ハ三年

三 重罪ハ十年

期滿免ニ三種アリ曰ク刑ノ期滿免除曰ク民事ノ期滿免除即チ是レナリ而シテ刑法第五十八條ニ掲クル所ノモノハ刑ノ期滿免除ニシテ本條ハ即チ公訴ノ期滿免除ナリ民事ノ期滿免除ハ未ダ制定セラレサレモ民法ノ發布將ニ近キニ在ラントノ說ナレハ其制定モ亦遠カラサル可シ

明治十四年十二月廿二日付福島裁判所米澤支廳檢事ノ伺ニ曰ク「治罪法第十一條ニ公訴期滿免除ノ期限規定有之候處重罪ヲ犯シタル者宥恕輕減酌量輕減ニ因リ輕罪ノ刑トナリ

タルキハ右重輕ノ内何レノ期限ニ依リ可然哉」トアリニ明治十五年二月十六日指令ニ曰ク「重罪ヲ犯シタル者特別輕減ヲ除クノ外法律上ノ宥恕自首其他ノ輕減ニ因リ輕罪トナルヘキモ刑名宣告セサル間ハ尙ホ重罪ノ期滿免除ノ期限ニ依ル可シ」トアリ  
公訴ノ期滿免除ハ之ヲ刑ノ期滿免除ニ比スルキハ其期大ニ短シ是レ何ニ因テ然ルカ刑ノ期滿免除ハ既ニ有罪タルコトノ決定シタル後チニ於テ其刑ノ執行ヲ通レタル者ニ係レハ其期限ノ長カル可キハ固ヨリ其理ナリト雖モ公訴ノ期滿免除ハ唯ダ嫌疑ノ屬スルマテニシテ未ダ有罪無罪ノ孰レナルヲ知ル可ラス且ツ之ヲ刑名宣告ヲ受ケタル者ニ比スレハ社會ニ於テ其人ヲ危險ナリトスルノ念慮モ亦輕重ナキ能ハス是レ公訴期滿免除ノ刑ノ期滿免除ニ其期短キ所以ナリ

第十二條 私訴期滿免除ノ期限ハ被害者無能力ナル時又ハ民事裁判所ニ其訴ヲ爲シタル時ト雖モ公訴期滿免除ノ期限ト同一ナリトス

公訴ニ付キ既ニ刑ノ言渡アリタル時ハ民法ニ定メタル期滿免除ノ例ニ從フ

△參看 明治十四年十二月二十八日第七十三號布告

治○第十一條○第十二條



四二

治罪法ニ於テ無能力者法律ニ定メタル代人及ヒ民事擔當人ト稱スル者ハ左ノ通

無能力者

一 未丁年者

二 妻タル者

三 白痴瘋癲人

四 治産ノ禁ヲ受ケタル者

法律ニ定メタル代人

一 未丁年者ノ父若クハ母又ハ親族後見人

二 夫タル者

三 白痴瘋癲人ノ保管者

四 治産ノ禁ヲ受ケタル者ノ財産管理人

民事擔當人

一 未丁年者ノ父若クハ母又ハ同居ノ親屬ニテ監督ヲ爲ス者

二 夫タル者

三 白痴瘋癲人ノ保管者

四 雇主但雇人其雇主ノ命シタル事件ヲ行フ時

通常民事ノ期滿免除ノ期限ハ刑事ノ期滿免除ヨリ長クシテ歐洲諸邦ニ於テハ大概之ヲ三

十年ト定メタリ然レモ犯罪ヨリ生シタル民事即チ私訴期滿免除ハ其期限短クシテ常ニ公

訴ト同一ニス是レ公訴私訴共ニ固ト同一ノ理由ニ因テ生シタルモノナルヲ以テ時日ノ經

久ニ因リ犯罪ノ證據湮滅スレハ即チ民事證據モ亦從テ湮滅スルト視做コ因レハナリ

通常民事ノ期滿免除ノ期限ハ無能力者ニ對シテハ後見人ノ有無ニ拘ハラス其期限ノ經過

ヲ中止ス然レモ犯罪ヨリ生シタル民事ノ期滿免除ニ於テ中止セサル者ハ右ニ説ク所ノ理

由アルヲ以テナリ

第二項期滿免除ノ經過セサル前公訴ニ付刑ノ言渡アリタル時ハ犯罪ノ證據具備シ其義務

アレモ亦疑フ可ラサルヲ以テ通常民事ノ期滿免除ニ從フナリ但シ民事ノ期滿免除ハ追テ

民法制定ノ上規定セラレ可シ

五二

治

第十三條 公訴私訴期滿免除ノ期限ハ犯罪ノ日ヨリ起算ス但シ繼續犯罪ニ付テハ其最終ノ日ヨリ起算ス

通常ノ期限計算ノ法ハ初日ヲ算入セス又最後ノ日及ヒ常例若シハ臨時ノ休暇ニ當ル時ハ都テ之ヲ期限ニ算入セス然ルニ期滿免除ノ期限計算法ハ其公訴私訴ノ別ナク共ニ其犯罪ノ日ヨリ起算シテ一日モ除去スルノ日ナシ而シテ其所謂繼續犯罪トハ國事犯偽造貨幣及ヒ擅ニ人ヲ監禁スル罪ノ如キ類ヲ云フナリ

第十四條 期滿免除ハ刑事裁判所ニ於テ檢察官若シハ民事原告人ヨリ起訴ノ手續ヲ爲シ又豫審若クハ公判ノ手續アリタルニ因リ經過ヲ中斷ス其未ダ發覺セサル正犯從犯及ヒ民事擔當人ニ付テモ亦同シ

期滿免除ノ期限ノ經過ヲ中斷シタル時ハ起訴豫審又ハ公判ノ手續未止メタル日ヨリ更ニ其期限ヲ起訴ス但前條ノ日數ヲ通算シテ第十一條ニ定メタル期限ノ二倍ヲ超過ス可カラズ立法者ハ偏愛偏憎ヲ嫌フ故ニ一方ノ權利ヲ慮レハ則チ亦從テ一方ノ不利ヲ防クノ法ヲ設クルヲ常トス今本條ハ即チ原被告兩造ノ便益ヲ慮リテ等シク其法ヲ規定シタルモノナリ

第一項ハ期滿免除ニ因テ犯罪ヲ不問ニ附スルコトアルキハ社會ノ危害ヲ受ク可キノ恐レアルヲ以テ公訴私訴ノ手續ヲ爲シ其期限ノ經過ヲ中斷スルコトヲ定メタリ是レ社會ノ權利ヲ容易ニ失ハサラシメンカ爲メナリ又起訴豫審若クハ公判ノ手續アリタル時ハ未ダ發覺セサル共犯人ニ就テモ亦各々期滿免除ノ期限ノ中斷ヲ行フ所以ハ其者ニ對シ直接ニ審判ヲ行ヒタルニ非ラスト雖モ其關係アル事件ニ就キ取調ヲ爲シタルヲ以テナリ而シテ其所謂中斷トハ檢察官若クハ民事原告人ヨリ起訴又ハ豫審公判ノ手續アリタルニ因リ既ニ經過シタル時日ヲ除去シ復タ更ニ其期限ヲ起算スルヲ云フナリ

第二項ハ被告人ノ爲メ其不利ニ失セサランコトヲ慮リタルモノナリ第一項ノ如ク期滿免除ヲ中斷スルコト再三再四ニ至レハ期滿免除ノ法ヲ設ケテ終ニ期滿免除ノ實ナキニ至リ有名無實ノ法ヲ作ルハ立法者ノ精神ニ非ラサルヲ以テ既ニ其名ヲ設クレハ則チ其實アレナイヲ慮ラサル可ラサルモノトス故ニ檢察官及ヒ民事原告人ハ起訴ノ手續ヲ爲シ又豫審若クハ公判ノ手續アリタルニ因リ期滿免除期限ノ經過ヲ中斷スルコトヲ得ルト雖モ其前後ノ日數ヲ通算シテ第十一條ニ定メタル期限ノ二倍即チ違警罪ハ一年輕罪ハ六年重罪ハ二十年

治○第十三條○第十四條

ヨリ超過ス可ラサルモノトス

八二  
第十五條 起訴豫審又ハ公判ノ手續其規則ニ背キタルニ因リ無効ニ屬スル時ハ期滿免除ノ期限ノ經過ヲ中斷スルノ效ナカル可シ但裁判官ノ管轄違ナルニ因リ其手續ノ無効ニ屬スル時ハ此限ニ在ラス

本條ハ敢テ註釋ヲ要セス唯タ讀者ノ熟讀如何ニ在ルノミ

第十六條 被告人免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタル場合ニ於テ其訴訟ノ原由告訴人告發人ノ惡意若クハ重キ過失ニ出テタル時ハ是等ノ者ニ對シ損害ノ償ヲ要ルヲ得

被告人刑ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ告訴人告發人又ハ民事原告人ヨリ惡意若クハ重キ過失ニ因リ其犯罪ニ付キ過實ノ申立ヲ爲シタル時亦同シ

民事原告人豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ上訴ヲ爲シ敗訴シタル時ハ被告人其上訴ニ因リ生シタル損害ノ償ヲ要ムルヲ得

要償ノ訴ハ本案ノ裁判言渡アルマテ何時ニテモ其裁判所ニ之ヲ爲スヲ得  
凡ソ何人ト雖モ犯罪アルヲ知リタル時ハ告發ヲ爲シ又犯罪ニ因リ損害ヲ被ムリタル時

ハ告訴ヲ爲スハ孰レモ法律ノ許ス所ナレモ若シ之ヲ許シタル儘ニシテ其範圍ヲ設ケサル

ニ於テハ之レカ爲メ被告人ハ無實ノ罪ヲ受ケ或ハ過實ノ賠償ヲ爲サシメラルトアリ是レ豈ニ法律ノ精神ナランヤ故ニ其弊害ヲ防禦セシカ爲メ本條ヲ設ケタルナリ

第一項ハ被告人免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタル場合ニ於テ損害ノ償ヲ要ムルヲ規定シタルモノナリ而シテ惡意ハ唯タ惡意トアルヲ以テ其大小輕重ヲ問ハス苟モ惡意ヲ以テ告

訴告發ヲ爲シタル者ニ對シハ必ス損害ノ償ヲ要ムルヲ得レモ過失ニ出テタル者ハ明文重キ過失トアルヲ以テ若シ輕キ過失ナル時ハ此者ニ對シテハ損害ノ償ヲ要ムルヲ得サ

ルモノトス是レ固ト過失ニシテ豫メ謀リシ事ニ非ラサレハ其重キヲ問フテ其輕キヲ論セサルハ至極善良ノ法ト云フ可シ去レト其輕重ノ區界ハ之ヲ分別スルニ甚ク困難ナキ能ハ

ス其輕重ノ分別ハ之ヲ法官ノ意見ニ任ス可キ耶何レニシロ其區界ノ分別ハ甚ク困難ナルトト察スルナリ以下惡意若クハ重キ過失トアルモノ皆ナ同シ凡ソ法律ニ於テ輕重ノ文字

アレハ必ス其輕重區界ヲ示ステ以テ常トスレモ今本條ニハ唯タ漠ト重キ過失トノミアリテ其何レノ點ヨリ重キ過失トシ何レノ點ヨリ輕キ過失ノ範圍ニ屬スルカチ明示セサルハ

治

予輩ノ未ク其精神ヲ得サル所ナリ故ニ予輩ハ讀者ニ對シ其説明ヲ與ヘサルヲ謝スルナリ  
第二項ハ被告人多少罪アリテ刑ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ告訴發人ノ申立惡意若クハ重  
キ過失ニ因リ其犯罪ノ實ニ過キタル時ハ前項ト同シク其被告人ハ是等ノ者ニ對シテ損害  
ノ償ヲ要ムルコトヲ得ルモノトス

第三項ハ民事原告人執拗ニシテ其言渡ヲ不服ナリトシテ上訴ヲ爲シ敗訴シタル場合ニ云  
フナリ此場合ニ於テモ亦被告人ハ其損害ノ償ヲ要ムルコトヲ得ルモノトス而シテ本項ニ於  
テ唯ク民事原告人ヲ掲ケテ告發人ヲ掲ケサルモノハ被告人ノ利益アル裁判ニ對シテ其訴  
ヲ爲スノ權ハ敢テ告發人ニ屬セサレハナリ

第四項ハ右三項要償ノ訴ハ本案ノ裁判言渡アルマテハ何時タリトモ其刑事裁判所ニ之ヲ  
爲スコトヲ得ルモノトス但シ公訴裁判既ニ言渡ニナリシ以上ハ全ク刑事ニ附帶スル性質ヲ  
失フテ以テ刑事裁判所ニ對シテ之レカ訴ヲ爲スコトヲ得ス何トナレハ事茲ニ至レハ其要償  
ノ訴ハ單純ナル民事ニ屬スルヲ以テナリ故ニ其本案ノ裁判既ニ言渡ニナリタル後チハ其  
要償ノ訴ハ之ヲ民事裁判所ニ爲ス可キモノトス

第十七條 被告人無罪ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ裁判官檢察官書記又ハ司法警察官ニ對シ要  
償ノ訴ヲ爲スコトヲ得ズ但是等ノ官吏被告人ニ對シ故意ヲ以テ損害ヲ加ヘ又ハ刑法ニ定メ  
ル罪ヲ犯シタル場合ハ此限ニ在ラス

其職務ニ在ル官吏ノ過失マテモ民事要償ノ訴ヲ受クコトセハ或ハ其輕忽ニ失スルヲ制ス  
可シト雖モ一方ニハ其無罪ニ訴ヘラレシコトヲ恐ル、ヨリ檢察官ハ公訴ヲ起スニ遲疑シ終  
ニ有罪ヲシテ法網ヲ脱セシムルノ弊ヲ生スルコト至ラントス又其他ノ職務官吏ニ於テモ種  
々ノ弊害ヲ生ス可シ故ニ其職務ニ在ル官吏ノ過失ニ因テ被告人無罪ノ言渡ヲ受ケタリト  
雖モ被告人ハ之レニ對シ要償ノ訴ヲ爲スコトヲ得サルモノトス但シ是等ノ官吏ト雖モ被告  
人ニ對シ故意ヲ以テ損害ヲ加ヘタルカ又ハ刑法第二編第九章第二節ニ定メタル罪ヲ犯シ  
タル場合ニ於テハ其被告人ハ之レカ要償ノ訴ヲ爲スコトヲ得ルモノトス

第十八條 此法律ニ於テ期日ヲ計算スルニ時ヲ以テスル者ハ即時ヨリ起算シ日ヲ以テスル  
者ハ初日ヲ算入セス若シ最終ノ日休暇ニ當ル時ハ期限ニ算入ス可カラス但期滿免除ノ期限  
ハ此限ニ在ラス

治〇第十七條〇第十八條

三二

一日ト稱スルハ二十四時ヲ以テシ一月ト稱スルハ三十日ヲ以テシ一年ト稱スルハ曆ニ從フ  
 此法律即テ治罪法ニ於テ期限ヲ計算スルニ時ヲ以テスル者ハ即時ヨリ起算スルハ敢テ注  
 釋ヲ要セス日ヲ以テスル者ハ初日ヲ算入セズ是レ其初日タル多クハ既ニ其幾分ヲ經過シ  
 タルヲ以テ其不足ナル時ヲ以テ之レヲ一日ニ算入セシヨリ寧ロ之ヲ算入セサルノ可ナル  
 ニ若カストノ意ニ出テタルモセノナリ而シテ其明文初日ヲ算入セスト單記シテ終日ノ文字  
 未記セサレハ其最終ノ日ハ期限ニ算入スルナリ故ニ裁判官渡ノ日ヨリ三日内ニ上訴ヲ爲  
 ス可シト定メタルモ其言渡ノ日ヲ算入セズモ其言渡ノ翌日ヨリ第三日ニ至テ期限經  
 盡ナルナリ但シ期限内ニ在テハ出廳前退廳後及ヒ夜間ト雖モ事件ヲ受授セサルコト得サ  
 ルモノトス是レ明治十四年二月二十八日付松江裁判所檢事ノ伺ヲ以テ翌明治十五年三月  
 十五日ノ指令ニ於テ知ル所ナリ若シ最終ノ日休暇ニ當ル時ハ之ヲ期限ニ算入セズシテ一  
 日ノ猶豫ヲ與フルハ是レ法律ノ恩典ナリ去レ、本條ノ明文最終ノ日休暇ニ當ル時ハ云々  
 トアルヲ以テ若シ休暇ノ日初日ニ當ルカ又ハ中日ニ當ル時ハ決シテ一日ノ猶豫ヲ與ヘサ  
 ルモノトス故ニ場合ニ由リ或ハ初日中日ノ兩日休暇ニ當リ其活用スルノ日ハ僅カニ最終

三三

ノ日一日ナルモ尙ホ且ツ其猶豫ヲ與ヘサルモノトス是レ何ニ由テ斯ク最終ノ日ニ寛ニシ  
 テ初日及ヒ中日ニ嚴ナルカ抑モ其故アリ何ソヤ初日及ヒ中日ハ假令休暇ニシテ公務ヲ行  
 フコト得サルモ其私事ハ必ス充分ニ之ヲ計畫スルコト得ケレハ好シヤ初日及ヒ中日續  
 テ休暇ニ會スルモ其間ノ時日ヲ以テ充分ニ之レカ計畫ヲ爲シ以テ其最終ノ日ニ至テ之レ  
 カ上訴ヲ爲スコト得可シ故ニ敢テ上訴ノ妨害トハ爲ラサルナリ然ルニ之レニ反シテ若シ  
 最終ノ日休暇ニシテ其期限ニ算入ス可ラストスルモハ之レカ爲メ其公務ヲ行フコト能ハ  
 サルハ固ヨリ其私事ヲモ亦併セテ之ヲ計畫スルコト能ハサルノ不幸ニ陷ラントスルナリ  
 否ナ之レカ計畫ハ自由ニ之ヲ爲ス可シト雖モ何レノ日カ其上訴ヲ爲サシ到底其日ナキチ  
 如何セシ故ニ最終ノ日ヲ期限ニ算入セサルコトスルモハ公務私事ヲ併セテ行フコト得サ  
 ラシメ三日ノ上訴期限ハ變減シテ二日ノ實トナラントス是レ本條最終ノ日ニ恩典ヲ與ヘ  
 テ餘ノ日ニ其恩典ヲ與ヘサル所以ナリ然レモ最終ノ日土曜日ニ當リ半日ノ休暇ニ會スル  
 モ餘ノ半日ヲ以テ其職務ヲ行フコト得ルヲ以テ之ヲ其期限ニ算入スルナリ但シ期滿免除  
 ノ期限ハ本條ノ限リニアラサル者トス

治

三

第二項一日ト稱シ一月ト稱シ又一年ト稱スルハ刑法ト同一ナレハ敢テ之カ復解テ施サズ  
第十九條 此法律ニ定メタル期限ハ陸路八里毎ニ一日ノ猶豫ヲ加フ八里ニ滿サル者ト雖  
モ三里以上ナル時亦同シ

島地又ハ外國トノ路程ノ猶豫ハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ定ム

△參看 明治十五年二月一日第七號布告

治罪法第十九條第二項海上路程ノ猶豫ハ陸路四里ノ割合ヲ以テ一日ヲ加フルモノト定ム

三里以下ナルモノハ一日ノ猶豫ヲモ與ヘス即日出頭致ス可キモノトス餘ハ敢テ註釋ヲ要

第二十條 此法律ニ於テ訴訟ヲ爲スニ付キ定メタル期限ヲ經過シタル時ハ特別ノ場合ヲ除

ク外其權ヲ失フ可シ

本條ニ云フ訴訟ノ文字ハ其包括スル所甚ク廣シ即チ通常ノ訴訟及ヒ故障控訴上告其他再

審ニ訴等ヲ總稱スルナリ但シ特別ノ場合トハ第二百五十八條第三百十二條ニ定ムル所ノ

場合ヲ云フナリ故ニ其特別ノ場合ヲ知ラント欲セハ該二條ニ就テ見ル可シ

第二十一條 訴訟關係人ハ裁判所所在ノ地ニ住セサル時ハ其他ニ假住所ヲ定メ書記局ニ届

置ク可シ否ラサル時ハ書類ノ送達ナシト雖モ異議ヲ申立ルヲ得ズ

訴訟關係人トハ總テ其訴訟事件ニ付キ利害ノ關係ヲ有スル者即チ民事原告人被告人及ヒ

民事擔當人等ヲ稱スルナリ

第二十二條 此法律ニ於テ訴訟關係人ニ書類ヲ送達スルニ付キ別ニ規則アラサル時ハ書記

ハ其送書ヲ作り書記局所属ノ使丁ヲシテ之ヲ送達セシム

若シ書類ノ送達ヲ受シ可キ者裁判所ノ管轄地外ニ在ル時ハ其地ノ裁判所ノ書記ニ送達ノ事

ヲ囑託ス可シ

本條ハ敢テ註釋ヲ要セス但シ使丁規則ハ明治十四年十二月五日司法省丁第二十六號達ニ

就テ見ル可シ

第二十三條 送達書ハ二通ヲ作り其一通ヲ本人ニ渡ス可シ本人ニ渡スヲ得サル時ハ其住

所ニ於テ同居ノ親屬又ハ雇人ニ渡ス可シ

送達人ハ之ヲ受取リタル者ヲシテ其二通ニ署名捺印セシム若シ署名捺印スルヲ能ハサルハ

治○第十九條ヨリ○第二十三條マテ

五三

ハ其旨ヲ附記ス可シ

### 六三

同居ノ親屬又ハ雇人ニ書類ヲ渡スヲ得ス若クハ是等ノ者之ヲ受取ルヲ肯セサル時ハ其地ノ戸長ニ渡置キ戸長ハ其書類ニ認印シ速ニ本人ニ送達スルノ處分ヲ爲ス可シ

送達人ハ書類ヲ受取リタル者ノ氏名場所及ヒ日時ヲ其二通ニ記載ス可シ

本條ノ規則ニ背キタル時ハ書類送達ノ効ナカル可シ

送達人ハ其一通ヲ書記局ニ還納シ書記局ニ於テハ送達ノ証トシテ之ヲ保存ス可シ

本條ハ頗ル錯雜解シ難キカ如シト雖モ能ク之ヲ熟讀スルニ於テハ敢テ解釋ヲ施ス可キ所ニ非ラズ然レモ第一項ニ就テハ少シク註釋ヲ要スル者アルナリ何ソヤ書類ヲ本人ニ交附スルハ其場所ノ何レナルヲ問ハサルナリ何トナレハ其明文唯々漠ト本人ニ渡ス可シトアルヲ以テ固ヨリ其場所ノ何レナルヲ論セサレハナリ然ルニ若シ本人ニ渡スヲ得サル時ニ於テ之ヲ同居ノ親屬又ハ雇人ニ渡スノ場合ニ於テハ其明文其住所ニ於テ云々トアルヲ以テ必ス其住所ニ限ルナリ又其明文同居ノ親屬トアルヲ以テ假令一等親ノ親屬ト雖モ別居ナル者ニハ之ヲ渡スヲ得サルモノトス否ナ之ヲ渡スハ自由ナリト雖モ之レニ渡サ

ハ以テ無効ニ歸スルノ恐レアルナリ故ニ送達書ハ能ク注意シテ之ヲ渡ス可シ

第二十四條 休暇ノ日及ヒ日出前日没後ハ書類ノ送達ヲ爲ス可カラズ此規則ニ背キタル時

ハ其送達ノ効ナカル可シ但本人承諾シテ其送達ヲ受ケタル時ハ此限ニ在ラズ

本條ハ敢テ註釋ヲ要セス

第二十五條 官吏ノ作ル可キ書類ハ其所屬官署ノ印ヲ用ヒ年月日及ヒ場所ヲ記載シテ署名捺印シ毎葉ニ契印ス可シ若シ官署ノ印ヲ用フルニ能ハサル場合ニ於テハ其事由ヲ記載ス可シ此規則ニ背キタル時ハ其書類ノ効ナカル可シ

官吏ニ非サル者ノ作ル可キ書類ニハ本人自ラ署名捺印ス可シ若シ署名捺印スルニ能ハサル時ハ官吏ノ面前ニ於テ作りタル場合ヲ除クノ外立會人代署シ其事由ヲ記載ス可シ

本條ハ錯雜解シ難キカ如シト雖モ能ク之ヲ熟讀スルニ於テハ敢テ註釋ヲ要セス但シ毎葉ニ契印ス可シトハ前後ノ紙ニ割印ヲ爲スモノヲ云フナリ是レ後日ノ増加削除ノ變更ヲ防クカ爲メナリ

### 七三

第二十六條 官吏其他何人ニ限ラス訴訟ニ關スル書類ノ正本又ハ謄本ヲ作ルニ付キ文字ヲ

治○第二十四條○第二十五條○第二十六條

八三

改竄ス可カラス若シ插入削除及ヒ欄外ノ記入アル時ハ之ニ認印ス可シ文字ヲ削除スル時ハ之ヲ讀ミ得可キ爲メ字體ヲ存シ其數ヲ記載ス可シ此規則ニ背キタル時ハ其變更増減ノ効ナカシ

本條ハ書類偽造ノ弊ヲ避ケンカ爲メ設ケタルモノナリ故ニ此規則ニ背キタル時ハ其變更増減ノ効ナキモノトス去レト其効ナキハ唯ク其變更増減シタル點ノミ効ナキモノニシテ其本文ハ固ヨリ其効ヲ存スルモノトス是レ其變更増減ノ効ナカシトシトノ明文ヲ熟讀嚙味シテ知リ得タル所ナリ

第二十七條 此法律ニ於テ定メタル豫審又ハ公判ニ付テノ規則ハ頒布以前ニ係ル犯罪ニモ亦之ヲ適用ス

頒布以前ニ爲シタル訴訟手續當時ノ法律ニ背カサル時ハ其効アリトス  
背水ノ備ヘニハ常ニ兵法ノ危險ナリトスル所ナレトモ韓信ハ之ヲ用ヒテ其戰爭ノ勝利ヲ得タリ故ニ一定ノ法理ニヨリ拘泥スルハ眞ノ法律家ト爲スニ足ラス夫レ法律ハ既往ニ溯ラサルヲ以テ原則トスレトモ此法律即チ治罪法ニ於テ定メタル豫審又ハ公判ニ付テノ規則ハ

頒布以前ニ係ル犯罪ニモ亦之ヲ適用スルヲ以テ却テ實利トスルナリ是レ猶ホ韓信ノ背水ノ備ヘノコトキモノナリ

第二十八條 此法律ハ將來頒布ス可キ別段ノ法律ニ於テ豫審又ハ公判ノ手續ヲ定メタル犯罪ニモ亦之ヲ適用ス但シ其法律ニ抵触スル規則ハ此限ニ在ラス

從前頒布シタル別段ノ法律ニ於テ豫審又ハ公判ノ手續ヲ定メタル犯罪ニ付テハ前項ノ例ニ在ラス

此法律即チ治罪法ハ刑事訴訟法ニ關スル普通ノ法典ナルニ依リ將來ニ創定スル所ノ特別法ハ此新法典ト對照シテ作ル可キヲ以テ其特別法ニ於テ相抵觸セサル條件ハ都テ此法典ヲ適用シタルモノト視做スヲ得ルト雖モ從前頒布シタル特別法ニ就テハ此限ニアラサルモノトス

第二十九條 此法律ハ陸海軍ニ關スル法律ヲ以テ處分ス可キ者ニ適用スルヲ得ス

刑法既ニ第四條ヲ以テ「此刑法ハ陸海軍ニ關スル法律ヲ以テ論ス可キ者ニ適用スルヲ得ス」ト規定ス然ラハ則チ此治罪法ハ刑事ノ訴訟法ニシテ刑法ト車ノ兩輪鳥ノ双翼ノ如

治○第二十七條ヨリ○第二十九條マテ

九三



少其相離ル可ラサル性質アルモノナレハ從テ亦陸海軍ニ關スル法律ヲ以テ處分ス可キ者ニ適用スルヲ得サルモノトス是レ固ヨリ當然ノコトナリ然レハ違警罪ハ重輕罪ト俱發シタル場合ヲ除クノ外警察署又ハ分署ニ於テ處分ス可キモノトス是レ明治十四年十一月九日付福岡縣ノ伺ニ依リ翌明治十五年二月二十八日ノ指令ヲ以テ知ル所ナリ

第三十條 此法律ニ於テ親屬ト稱スルハ刑法第百十四條第百十五條ノ例ニ從フ

本條ハ敢テ贅釋ヲ施スヲ要セス唯タ讀者ニ於テ刑法ヲ參看スルノ勞ヲ取ハ則チ可ナリ

◎第二編 刑事裁判所ノ構成及ヒ權限(凡七章六十一條)

刑事裁判所ノ構成トハ即チ刑事裁判所ノ設ケ方ヲ云フナリ例ヘハ裁判所ノ等級ハ若干ニ分チ其管轄ハ幾許ニ區畫シ何レノ場所ニ之ヲ設ケ又其裁判所ニ依リ法官ノ員數

ハ如何ニ之ヲ定ム可キヤ等ノ事ヲ規定スルノ類ナリ而シテ權限トハ即チ始審終審或ハ重罪輕罪違警罪ノ種類ニ就テ之レカ管轄ヲ定メテ其爲スヲ得可キ所ノモノト其

爲スヲ得可ラサル所ノモノトノ各自職務ノ區域ヲ定ムルモノナリ

◎第一章 通則(凡十八條)

此通則トハ第二編全體ノ各條ニ通シテ用テ可キ所ノ規則ナリ

第三十一條 通常刑事ノ裁判權ハ民事ノ裁判權ト同一ノ裁判所ニ屬ス

立法、行政、司法ノ三權ハ各々獨立ニシテ鼎足ヲ爲スヲ以テ國是トスルハ二百年以前佛人

孟的斯鳩氏ノ論スル所ニシテ爾來實際ニ於テ其果シテ然ルヲ證スル所ナリ然ルニ野蠻及

ヒ半開ノ邦國ニ在テハ動モスレハ立法司法ノ二權ハ行政權ニ附隨シ之レカ奴隸タルノ悲

情ニ陥ルヲ免レサルナリ是レ何ニ由テ然ルカ立法權ハ今論旨ヲ異ニスルヲ以テ姑ク之ヲ

措キ行政權ノ爲メニ司法權ノ壓抑セラル、所以ノモノハ司法權ノ内刑事ノ裁判權ト民事

ノ裁判權ト分離シタルニ職由セズンハアラサルナリ夫レ合テ強トナリ離レテ弱トナルハ

是レ社會ノ事物ノ通則ナリ故ニ此ノ如キ弊ヲカラシメテ欲セハ則チ民事ノ裁判權ヲ合一

セサル可ラサルナリ坡並會拿德氏曰ク宇内各國ノ現狀ヲ通觀スルニ刑事ノ裁判權民事ノ

裁判權ニ分離スルモノ尠カラス佛國ニ於テ其分離ヲ廢シタルハ一千八百八年第一帝政ノ

時ニ在リ爾來同一ノ裁判所ニ民事二個ノ裁判ヲ併セテ擔任セリ云々夫レ此改革タルヤ大

ニ國民ノ權力アルヲ忌憚セシ拿破崙第一世ノ手ニ成レリト雖モ甚タ自由寛大ナル處置ヲ

治○第三十條○第三十一條

ルヲ以テ人之ヲ賞賛シテ拿破崙ノ賜ナリトセリ蓋シ刑事ノ裁判權分離孤立スルルハ則チ  
法官少數ヨシテ稍々尊嚴ヲ缺クヲ以テ中央政權ノ餘勢ニ抵抗スルノ力ニ乏シカラサルヲ  
得ス是レ拿破崙帝ノ殊ニ憂ヒタル所ナリ夫レ卑賤微弱ノ者罪ヲ犯シタルルキ之ヲ刑ニ處セ  
ンカ爲メ厭制ヲ施スノ恐レナシト雖モ強豪勢力アル者罪ヲ犯スニアルルハ或ハ其刑罰ヲ  
免レシメンカ爲メ壓制ヲ行フノ弊ナキヲ保シ難シ然ルニ之ヲ罪スルルハ翻テ政府ノ威嚴  
ヲ傷ルヲ以テ之レカ爲メニ訴ヘザルノ例モ亦少ガラストス若シ夫レ法官多數ナルルハ斯  
ノ如キ卑屈ニ陷ルノ弊ナシト是レ本條ノ因テ以テ起ル所ナリ

第三十二條 裁判所ノ位置及ヒ管轄ノ區劃ハ司法卿ノ奏請ニ因リ上裁ヲ以テ之ヲ定ム  
裁判所ノ位地及ヒ管轄ノ區劃ハ將來ノ經驗ニ因リ時ニ從テ變更ナキ能ハサルヲ以テ豫メ  
之ヲ一定シ難キモノアリ故ニ地勢ノ便否事務ノ繁閑ヲ裁酌シテ之ヲ定ムルハ政府ノ措置  
ニ委任シ又其實際ノ景況ニ付テ奏請スルハ司法卿當然ノ職務ナリトス

第三十三條 裁判所ニハ檢察官一名又ハ數名ヲ置ク  
本條モ亦前條ト同シク檢察官ヲ置ク可キ員數ニ就テハ其裁判所管轄地ノ大小ト事務ノ繁

閑トニ應シテ之ヲ定ム可キモノナルコト因リ豫メ之ヲ一定シ難キモノアルヲ以テ一名又ハ  
數名ヲ置クト記シ一定ノ規則ヲ設ケサルナリ

第三十四條 刑事ニ付キ檢察官ノ職務左ノ如シ

- 一 犯罪ヲ捜査ス
- 二 犯罪ニ付キ取調ノ處分及ヒ法律ノ適用ヲ裁判所ニ請求ス
- 三 裁判所ノ命令及ヒ言渡ノ執行ヲ指揮ス
- 四 裁判所ニ於テ公益ヲ保護ス

本條ハ後ヲノ條々ヲ讀ムニ從テ自ラ之ヲ知ルコト得ルモノナレハ敢テ贅釋ヲ施サス

第三十五條 檢察官一名ハ公廷ニ立會フ可シ

檢察官ハ訴訟手續ニ關スル事件ニ付キ意見ヲ陳述セサル可ラサルモノナルヲ以テ必ス一  
名ハ公廷ニ立會フ可キモノトス故ニ若シ檢察官ノ立會フコトナクシテ爲シタル裁判ハ無効  
ニ屬スルモノトス

第三十六條 裁判所ニハ書記一名又ハ數名ヲ置ク

治〇第三十二條ヨリ〇第三十六條マテ

四四

本條ニ記載スル書記ハ其裁判所ノ大小及ヒ其事務ノ繁閑ニ應シテ其員數ノ必要ヲ異ニスルヲ以テ一名又ハ數名ヲ置クト記シ以テ其必要ノ員數ヲ定ムルヲ其裁判所ノ權内ニ委任セリ

第三十七條 書記ハ豫審及ヒ公判ニ立會ヒ調書公判始末書其他訴訟ニ關スル一切ノ書類ヲ作ル可シ

又裁判官渡書其他一切ノ書類ヲ保存スヘシ

書記ハ訴訟ニ關スル辨論陳述及ヒ執行シタル事件ヲ記録スルノ職ニシテ其記録シタル書類ハ公正ノ證據トナルコトアリ故ニ書記ノ立會ヒナケレハ豫審及ヒ公判ノ處分ヲ行フコトヲ得サルモノトス否ナ之ヲ行フコトヲ得ヘシト雖モ書記ノ立會ヒナクシテ行ヒタルモノハ其効チキモノトス

第三十八條 犯罪ノ種類ニ因リ裁判管轄ヲ定ムルコト左ノ如シ

- 一 違警罪ハ違警罪裁判所
- 二 輕罪ハ輕罪裁判所

三 重罪ハ重罪裁判所

重罪及ヒ輕罪又ハ輕罪及ヒ違警罪ニ付キ同時ニ同一ノ被告人ニ對シ訴アリタル時ハ附帶ノ犯罪ニ非スト雖モ上等ノ裁判所併セテ之ヲ管轄ス

罪惡ハ疾病ノ如ク法律ハ藥石ノ如シトハ社會ノ通論ナリ既ニ罪惡ニシテ疾病ナリ法律ニシテ藥石ナリトセハ疾病ノ種類ニ因リ醫師ノ職ヲ異ニス即チ腹内ノ疾病ニハ内科アリ腹外ノ疾病ニハ外科アリ又眼病ニハ眼科アリ齒疾ニハ齒科アリ以テ其職ヲ專門ニス故ニ犯罪モ亦從テ其種類ニ因リ裁判管轄ヲ異ニセサル可ラサルモノトス即チ違警罪ハ違警罪裁判所ニ於テ之ヲ管轄シ輕罪ハ輕罪裁判所ニ於テ之ヲ管轄シ重罪ハ重罪裁判所ニ於テ之ヲ管轄スルモノトス

然レモ一人ニシテ同時ニ重罪ト輕罪トヲ併犯シ又ハ輕罪ト違警罪トヲ併犯シ或ハ重罪ト違警罪トヲ併犯シ若クハ重罪輕罪違警罪ノ三罪ヲ併犯シテ此等ノ犯罪附帶ノ犯罪ニ非ラサルコトアリ此時ニ當リ同時ニ同一ノ被告人ニ對シ訴アリタル時ハ之ヲ其管轄ノ裁判所ニ順次ニ廻ハスハ頗ル繁雜ニシテ大ニ其手數ト費用トヲ要スルコトナレハ之ヲ其何レカノ

五四

治○第二十七條

六四

裁判所ニ一任スルヲ以テ最モ必要便利ノトスルナリ去レハ斯カル場合ニ於テハ之ヲ其  
何レノ裁判所ニ一任ス可キヤ夫レ大ハ能ク小ヲ兼スルモ小ハ決シテ大ヲ容ルノ量ナキ  
ノ謬理ニシテ上等ノ裁判所ハ以テ下等ノ裁判所ノ管轄スル所ノモノヲ裁判スルノ權ヲ有  
スレト下等ノ裁判所ハ以テ上等ノ裁判所ノ管轄スル所ノモノヲ裁判スルノ權ナシ故ニ之  
ヲ其上等ノ裁判所ニ一任セテ管轄セシムルモノトス而シテ本條ニ所謂上等ノ裁判所トハ  
當時ノ控訴裁判所ノ謂ヒニ非ラズ唯ダ違警罪裁判所ニ對シテ輕罪裁判所ト上等ノ裁判所  
ト爲シ又輕罪裁判所ニ對シテ重罪裁判所ト上等ノ裁判所ト爲セタルノニ畢竟比較ノ上等  
ニシテ固有ノ上等ニハ非ラサルナリ故ニ本條ニモ上等ノ裁判所ト記シテ上等裁判所ト記  
サス其中間ニノ字ヲ入レタルハ其比較ノ上等ナルコトヲ表スル爲メナリ乞フ讀者控訴裁判  
所ト誤認スルコト勿レ

第三十九條 左ノ場合ニ於テハ附帶ノ犯罪ナリトス

- 一 同一ノ場所ニ於テ同時ニ一人又ハ數人ニテ數罪ヲ犯シタル時
- 二 數人通謀シテ日時又場所ヲ異ニシ數罪ヲ犯シタル時

三 自己又ハ他人ノ犯罪ヲ容易ニスル爲メ又ハ其罪ヲ免ル、他ノ罪ヲ犯シタル時

假令數十百罪ヲ犯スモ其各個ノ犯罪氣脈ヲ通セサルニ於テハ其犯罪ハ何レモ皆テ獨立ノ  
犯罪ニシテ附帶ノ犯罪ニ非ラス然ルニ假令日時又ハ場所ヲ異ニシテ二罪ヲ犯ストモ其犯  
罪ハ互ニ氣脈ヲ通シ相關係スルモノナラズニハ即チ其犯罪ハ附帶ノ犯罪ナリ今本條第一  
ヨリ第三マテニ記載スル所ノ犯罪ハ附帶ナリトス是レ何ノ益スル所アリテ今茲ニ漠ト附  
帶ノ犯罪ハ云々ナリト指定シタルガ抑故アリ何ツヤ附帶ノ犯罪ナル時ハ之ヲ同一ノ裁判  
所ニテ併セテ裁判スルヲ以テ最モ必要便利ノトトス何トナレハ犯人ノ情狀ニ於テ大ニ得  
ル所アル可ク因テ其裁判所ニ於テ刑ノ輕重ヲ折衷斟酌スルニ付キ宜シキヲ得可キヲ以テ  
ナリ即チ刑ヲ擬スルニ當リ加減ノ情狀ヲ斟酌スルニ付テ明晰ナルヲ得可キナリ其レ然リ  
故ニ附帶ノ犯罪ハ同一ノ裁判所ニ於テ併セテ之ヲ裁判ス可シト云フモ豫メ其附帶ノ犯罪  
如何ヲ指定シ置カサレハ以テ感ヒナキ能ハス否ナ其感ヒアル可キト必ス免レサル處ナリ  
是レ本條ヲ茲ニ設ケルノ必要アル所以ナリ

七四

第四十條 同等ノ裁判所ニ於テハ犯罪ノ地ノ裁判所ヲ以テ豫審及公判ノ管轄ナリトス  
治○第三十八條○第三十九條○第四十條

犯罪ノ地分明ナラサル時ハ被告人逮捕ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

八四 △參看 明治十四年九月第四十六號布告

治罪法第四十條ニ犯罪ノ地ヲ以テ裁判管轄ト規定有之候處當分ノ内犯罪ノ地分明ナル被告  
人ト雖用管轄裁判所ヨリ囑託スル時ハ其被告人逮捕ノ地ノ裁判所之ヲ管轄ス可シ

犯罪ノ種類ニ因リ裁判管轄ニ三個アルコトハ第三十八條ニ於テ既ニ之ヲ見タリ而シテ其條  
下ニ於テ予輩ハ疾病藥石及ヒ醫士ノ醫ヲ以テ之ヲ説明シタリキ今本條ハ犯罪ノ地ノ裁判  
所ヲ以テ其管轄トスルコトノ變例ヲ設ケタルモノナリ故ニ予輩ハ本條ニ於テモ亦疾病藥石  
及ヒ醫士ノ醫ヲ以テ説明セシトス玆ハ腹内ノ疾病ニ罹ル者アテニコ我家ニ在テ之レニ罹  
ルシナレハ則チ其近邊ノ内科醫ヲ診察セシヒ以テ其藥石ヲ服スルモ遠國ニ行キテ其疾病  
ニ罹リシコアラハ即チ其地ノ内科醫ヲ診察テ受ケ以テ其藥石ヲ服スルコトナラン是レ本條  
ノ設ケアル所以ナリ

第四十一條 數箇ノ裁判所ノ管轄地内ニ於テ同時ニ又ハ繼續シテ一個ノ罪ヲ犯シタル時ハ  
其中ヨリ被告人逮捕ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

數罪俱發ノ場合ニ於テモ亦同シ

數箇ノ裁判所ノ所轄地内ニ於テ同時ニ一個ノ罪ヲ犯ストハ例ヘハ所轄境ノ中央ニ於テ犯  
シタル罪ノ如キ是レナリ又兇徒聚衆ノ罪ノ如キハ大概同時ニ數箇所ニ於テ之ヲ犯スモノ  
ナリ又禁止ノ物品ヲ販賣スル罪及ヒ私ニ醫業ヲ爲ス罪ノ如キハ孰レモ數箇ノ裁判所ノ管  
轄地内ニ於テ繼續又ハ連續シテ一罪ヲ犯スモノナリトス總テ此等ノ犯罪ハ其被告人ヲ逮  
捕シタル地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ト定ム

第二項數罪俱發ノ場合ニ於テ數箇ノ裁判所ノ管轄ニ屬スル時ハ亦前項ト同ク被告人逮  
捕ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

第四十二條 犯罪ノ地ニ非サル裁判所ノ管轄地内ニ於テ被告人ヲ逮捕シタル時ハ最近ノ管  
轄裁判所ニ送致ス可シ

令狀ヲ以テ被告人ヲ逮捕シタル時ハ其令狀ヲ發シタル裁判所ニ送致ス可シ

九四

管轄裁判所數箇アル場合ニ於テ孰レモ其管轄地内ニ於テ被告人ヲ捕獲スルコト能ハヌ却テ  
他ノ裁判所ノ管轄地内ニ於テ之ヲ捕獲シタル所轄裁判所中最近ノモノヲ以テ所轄ト

治○第四十一條○第四十二條

○五

定々是レ法律ニ於テ尙モ事ヲ專横ニ處スルヲ欲セサルニ由ル故ナリ例ヘハ東京神奈川兩  
地ニ於テ數個ノ盜罪ヲ犯シタル者神戸ニ於テ捕獲ニ就キタル者ハ之ヲ神奈川ニ送附ス可  
ク又箱館ニ於テ捕獲シタル者ハ之ヲ東京ニ護送ス可キナリ  
然レモ若シ前ニ合狀ヲ發シタル裁判所アル時ハ其裁判所ノ遠近ニ拘ハラヌ其裁判所ニ被  
告人ヲ送致ス可シ是レ其合狀ヲ發シタル裁判所ニ於テハ既ニ其事件ニ付キ幾分カ着手シ  
タルノ因アルヲ以テナリ

第四十三條 數箇ノ裁判所ノ管轄ナル場合ニ於テ被告人ヲ逮捕スルコト能ハス若クハ法律上  
逮捕スルコトヲ許サ、ル時ハ其中ニテ最初豫審又ハ公判ニ着手シタル裁判所ヲ以テ其管轄ナ  
リトス

數箇ノ裁判所ノ管轄ナル場合ニ於テ被告人ヲ逮捕スルコト能ハストハ敢テ註釋ヲ要スル所  
ニ非ラズ若クハ法律上逮捕スルコトヲ許サ、ル時トハ犯罪ノ種類違警罪又ハ罰金ノ刑ニ該  
ル可キ輕罪ノ如キ是ナリ

第四十四條 從犯ハ正犯ヲ管轄スル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

數箇ノ裁判所ノ管轄ニ屬スル正犯數名アル時ハ其中ニテ最初豫審又ハ公判ニ着手シタル裁  
判所ヲ以テ其管轄ナリトス高等法院及ヒ陸海軍裁判所ノ管轄ニ付法律ニ於テ特ニ定メタル  
場合ハ本條ノ例ニ在ラス

從犯ナルモノハ正犯ヲ幫助シテ犯罪ヲ容易ナラシメタルモノナレハ其刑罰ハ正犯ヨリ順  
據シ來ラサルヲ得ヌ既ニ正犯ノ刑罰ニ順據シテ以テ之レカ刑罰ヲ科ス可シトセハ即チ正  
犯ヲ管轄スル裁判所ヲ以テ其管轄トセサルヨリハ其適當ノ刑罰ヲ科スルニ困難ナキ能ハ  
サル可シ否ナ其困難アル可キニ必然ノ勢ナリ是レ從犯ハ正犯ヲ管轄スル裁判所ヲ以テ其  
管轄ナリトスル所以ナリ第二項ハ敢テ註釋ヲ要セス第三項ハ正犯從犯ノ中特別ノ身分ヲ  
有スル者アル者ハ從犯ヲシテ正犯ニ引キ付ケルコト能ハス例ヘハ正犯ハ軍事ニシテ軍事裁  
判所ノ管轄ニ屬スル時從犯タル常人ヲ軍事裁判所ニ於テ管轄セヌシテ通常裁判所ニ於テ  
裁判ス又從犯タル者高貴顯官タルニ因リ高等法院ノ管轄ヲ受ク可キ時モ亦此例ニ依ル其  
正犯ニ附從スルノ故ヲ以テ特別ナル裁判管轄ヲ受ク可キノ權ヲ奪ハサルモノトス

一五  
第四十五條 外國ニ在テ犯シタル罪日本ノ法律ニ依リ處斷ス可キ者ニシテ内地ニ於テ被告  
治○第四十三條○第四十四條○第四十五條

人ヲ逮捕シタル時ハ逮捕ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス又外國ヨリ送致シタル時ハ送致ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

缺席裁判ヲ爲ス可キ場合ニ於テハ被告人最終住所ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス其住所分明ナラサル時ハ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲ス可シ

本條ハ少シク錯雜セルカ如シト雖モ能ク之ヲ熟讀スルニ於テハ敢テ註釋ヲ待テ始メテ知ル處ニ非ラサルナリ

第四十六條 商船内ノ犯罪ニ付テノ管轄及ヒ訴訟手續ハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ定ム

△參看 明治十四年十二月第六十五號布告

商船内犯罪取扱規則

第一條 何人タリトモ商船内ニ於テ重罪輕罪アルヲ認知シ又ハ重罪輕罪ニ因リ損害ヲ受ケタル者ハ船長ニ告訴告發ヲ爲スヲ得

第二條 船長告訴告發ヲ受ケタル時又ハ重罪輕罪ノ現行犯アルヲ知リタル時ハ其事件ニ付キ假ニ訊問檢證ノ處分ヲ爲シ且證據及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ集取シ調査ヲ作ル可シ

シ但調査作ル能ハサル時ハ第三條ニ記載シタル官吏ニ其申立ヲ爲ス可シ

前項ノ場合ニ於テハ立會人二名以上アルヲ要ス

第三條 船長ハ證據及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ取纏メ被告人ト共ニ該船碇泊又ハ着港ノ地ノ檢事又ハ司法警察官ニ引渡ス可シ若シ外國ノ港埠ニ着シタル時ハ其地駐劄ノ領事ニ之ヲ引渡ス可シ

本條ハ即チ治罪法第四十六號ノ意義ハ商船犯罪取扱規則ヲ以テ既ニ判然タレハ予輩ハ敢テ贅釋ヲ施サス

第四十七條 豫審ヲ爲シタル裁判官ハ其公判ニ干預ス可カラズ前ニ豫審又ハ公判ヲ爲シタル裁判官ハ哀訴及ヒ缺席裁判ニ對スル故障ヲ除クノ外其上訴ノ裁判ニ干預ス可カラズ此規則ニ背キタル時ハ其言渡ノ効ナカル可シ

凡ソ人タル者ハ當初ノ意見ヲ執拗シテ容易ニ之ヲ變更スルヲナキハ情ノ必ス免レサル所ナリ故ニ豫審ヲ爲シタル裁判官ハ其公判ニ干預スルヲ禁シ又前ニ豫審又ハ公判ヲ爲シタル裁判官ハ上訴ノ裁判ニ干預スルヲ得サルモノトス若シ夫レ豫審ヲ爲シタル裁判官

治○第四十六條○第四十七條

四五

ヲシテ其公判ニ干預セシメ若クハ豫審又ハ公判ヲ爲シタル裁判官ヲシテ上訴ノ裁判ニ干預セシメハ始終同一ノ裁判ヲ爲シテ其豫審公判及ヒ上訴ノ裁判ノ區別ナキニ至ル可キナリ故ニ前ニ裁判シタル法官ハ後ニ裁判スルモノニ干預ス可ラサルモノトス然レモ哀訴及ヒ闕席裁判ニ對スル故障ノ如キハ敢テ右等ノ憂ヒナシ既ニ其憂ナシトセハ依然ノ裁判官ヲ以テ引キ續キ之ヲ爲スナリ以テ最モ便益ナルコトスルナリ是レ本條ニ於テ此ニツノ場合ヲ許ス所以ナリ

第四十八條 裁判所ハ訴ヲ受ケタル事件ニ付キ自ラ其管轄ナリヤ否ヤヲ判決スルノ權アリ其判決ニ付テハ本案ノ事件ナル可キ場合ト雖モ通常ノ規則ニ從ヒ檢察官其他訴訟關係人ヨリ上訴スルコトヲ得

本條ハ敢テ註釋ヲ要セス

第二章 違警罪裁判所(凡五條)

本章以下ニ於テハ各法廳ノ章程ヲ説ケリ

第四十九條 治安裁判所ハ違警罪裁判所トシテ其管轄地内ニ於テ犯シタル違警罪ヲ裁判ス

△參看 明治十四年九月二十日第四十八號布告

刑法治罪法中違警罪裁判ノ儀ハ當分三府五港ノ市區ヲ除クノ外府縣警察署又ハ警察分署ニテ裁判可致候條此旨布告候事

△明治十四年十月六日第五十四號布告

刑法治罪法實施ノ儀布告候ニ付テハ當分ノ内輕罪ニシテ檢察官ニ於テ豫審ヲ要セスト見込ムモノニ限リ始審裁判所所在ノ地ヲ除クノ外治安裁判所ニ於テ輕罪裁判所ヲ開キ其裁判ヲ爲スコトヲ得可シ此旨布告候事但シ本文ノ場合ニ於テ認廷内治罪ノ手續ハ便宜可取計且其手續上ニ付テハ上訴ヲ許サス

元來治安裁判所ナルモノハ民事ヲ裁判スルノ法衙ナリ然ルニ今本條ニ於テ犯シタル違警罪即チ刑事ヲ裁判スルハ抑故アリ何ソヤ是レ第三十一條ニ規定シタル民刑ノ裁判權ヲ併合スル所以ノ原則ニ基キタルモノナリ夫レ治安裁判所ハ固ト民事最下等ノ裁判所ニシテ請求ノ金額及ヒ價額百圓未滿ノ訴訟ニ付治審ノ裁判ヲ爲スモノナレハ亦從テ最輕ノ刑事即チ違警罪ヲ裁判スルモノトス而シテ治安裁判所判事ハ其管轄地内ニ於テ犯シタル違警

五五

治○第四十八條○第四十九條



罪ニ非ラサレハ之ヲ裁判スルコトヲ得ス是レ違警罪ハ固ト法律上逮捕スルコトヲ許サハルコト  
因ルナリ故ニ本條ニ於テハ第四十條第二項ノ如キ犯人逮捕ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナ  
リトスルコトヲ得ス

第五十條 違警罪裁判所判事ノ職務ハ治安裁判所判事之ヲ行フ

判事差支アル時ハ判事補其職務ヲ行フ

治安裁判所ハ違警罪裁判所トシテ其管轄地内ニ於テ犯シタル違警罪ヲ裁判スルコトハ前條

ヲ以テ既ニ之ヲ規定ス然ラハ違警罪裁判所判事ノ職務ハ治安裁判所判事之ヲ行フヤ固ニ

リ當然ノ事ナリ若シ判事差支アル時ハ判事補其職務ヲ行フモ亦當然ノ事ナリトス

第五十一條 違警罪裁判所檢察官ノ職務ハ其裁判所々在ノ地ノ警部之ヲ行フ

△參看 明治十四年十月十日司法省甲第五號布達

新法實施ノ後ハ司法警察事務上時宜ニ依リ巡查ヲシテ警部ノ代理ヲ爲サシムル儀モ可有之  
候條此旨布達候事

本條ノ警部ハ註釋家或ハ行政警察ヲ主務トスル所ノ警部ナリト云ヒ或ハ司法警察并ニ行

政警察ノ警部ナリト云フテ其說區々ニシテ更ニ一定ノ說ナシ是レ最モノ事也何トナレハ  
本條唯々漠然ト「警部之ヲ行フ」トノミアリテ其行政警察ヲ主務トスル警部ナリヤ將タ其  
行政警察ト司法警察トヲ問ハス孰レニテモ警部ニテサヘアレハ即チ可ナルヲ明示セサル  
ヲ以テ其註釋家ノ意見ニテ其解釋ヲ異ニスルモ亦宜ナリト謂フ可シ而シテ本條ノ文面ニ  
據テ之ヲ見レハ唯々漠然ト警部トノミアルハ其行政警察ト司法警察トヲ問ハサルカ如シ  
何トナレハ若シ其孰レカ一方ノ警部ニ限ルモノトセハ即チ之ヲ其文中ニ明記セサル可ラ  
サルコト之ヲ明記セサルハ其行政警察ト司法警察トヲ問ハス等シク其警部ハ之ヲ行フノ權  
アルモノ察セラルレムナリ然レモ法律ノ精神ヨリ之ヲ考フレハ即チ行政警察ヲ主務トス  
ル警部之ヲ行フモノト信スルナリ何ヲ以テ之ヲ信スルヤ曰ク明治十四年十二月第八十號  
布告ヲ以テ違警罪ノ儀ハ治安裁判所ニ於テ裁判ス可キ處當分ノ内府縣警察署及ヒ其分署  
ニ於テ裁判セシム可キモノト定メラレタリ就テハ司法警察ヲ主務トスル警部之ヲ裁判ス  
ルモノト信ス既ニ司法警察ヲ主務トスル警部ニシテ之ヲ裁判スルモノトセハ則チ此司法  
警察ノ警部ナル者檢察官ノ職務ヲ行フニ於テハ一人ヲ以テ或ハ檢察官トナリ或ハ法官ト  
治○第五十條○第五十一條

ナリ一身二務ニ檢察官ノ請求スル所ハ法官タル同一警部ニ必ス其請求ニ從テ以テ之ヲ  
裁判ス可キコ固ヨリ人情ノ免レサル所ナリ去レハ檢察官ノ職務ヲ行ハシムルモ將タ何カ  
益カ之レアラザン畢竟無益ノ徒務タルニ過キサルナリ是ニ於テ予輩ハ本條唯ダ漠然警部ト  
アルモ其行政警察ヲ主務トスル警部ナル可シト解スルナリ知ラス司法警察ノ警部モ亦檢  
察官ノ職務ヲ行フコト得ルヤ否ヤ予輩ハ姑ク其行政警察ヲ主務トスル警部ニ限ルモノト  
解スルナリ否ナ斯ク解サレハ以テ其不都合アルヲ免レサルナリ

第五十二條 違警罪裁判所檢察官ハ毎月未決既決ノ事件表ヲ作り輕罪裁判所檢事ニ差出ス

事件表ニハ違警罪裁判所判事認印ニ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

本條ハ敢テ註釋ヲ要セズ

第五十三條 違警罪裁判所書記ノ職務ハ治安裁判所書記之ヲ行フ

違警罪裁判所判事ノ職務ハ治安裁判所判事之ヲ行フコトハ第五十條ノ既ニ規定スル所ナリ

然ラハ則テ違警罪裁判所書記ノ職務ハ治安裁判所書記之ヲ行フモ亦固ヨリ當然ノ事ナリ

第三章 輕罪裁判所(凡九條)

本章ハ敢テ註釋ヲ要セズ

第五十四條 始審裁判所ハ輕罪裁判所トシテ其管轄地内ニ於テ犯シタル輕罪ヲ裁判ス又重  
罪及ヒ輕罪ノ豫審ヲ行フ

又其管轄地内ノ違警罪裁判所ノ始審ノ裁判ニ對スル控訴ヲ裁判ス

本條ハ敢テ註釋ヲ要セサレモ第三項ノ場合ニ於テ始審裁判所ハ其管轄地内ノ違警罪裁判

所ノ始審ノ裁判ニ對スル控訴ヲ裁判スト雖モ若シ輕罪及ヒ違警罪ニ付同時ニ同一ノ被告

人ニ對シ訴アリタル時ハ附帶ノ犯罪ニ非スト雖モ上等ノ裁判所即チ其輕罪裁判所併セテ

之ヲ管轄裁判スルモノトス此場合ニ於テハ輕罪裁判所ハ違警罪ヲ裁判スルナリ然レハ此

場合ニ於テハ控訴ヲ許サレモノトス

第五十五條 輕罪裁判所判事ノ職務ハ裁判所長ヨリ始審裁判所判事一名又ハ數名ニ順次滿  
一年間之ヲ命ス

治○第五十二條ヨリ○第五十五條マテ

又滿一年間更ニ其職務ヲ繼續セシムルコトヲ得

〇六

本條ハ敢テ詳解ヲ要セス但シ第二項ニ於テ「又滿一年間更ニ其職務ヲ繼續セシムルコトヲ得」トアルヲ以テ其才能刑事ニ適當スル者ハ更ニ一年間其職務ヲ行ハシムルコトアル可シト雖モ其二年以上ヲ經過セシムルコトヲ得ス是レ刑事ノ職務ヲシテ始終同一ノ裁判官ニ專任セシムル時ハ自然苛酷ニ流カルハノ恐れアルヲ以テナリ

第五十六條 豫審判事ノ職務ハ司法卿ヨリ始審裁判所判事一名又ハ數名ニ滿一年間之ヲ命ス又滿一年以上其職務ヲ繼續スヘキコトヲ命スルヲ得

本條ノ第二項ハ「又滿一年以上其職務ヲ繼續ス可キコトヲ命スルヲ得」トアルヲ以テ其才能ノ如何ニ由リ或ハ數年間其豫審判事ノ職務ヲ命セテ行ハシムルコトアルモノトス

第五十七條 判事差支アル時ハ其他ノ判事又ハ判事補其職務ヲ行フ判事補ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒ意見ヲ述フルコトヲ得

其他ノ判事トハ民事局詰ノ判事ヲ指スナリ而シテ判事補ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒ意見ヲ述フルコトヲ得ト雖モ其意見ハ唯ダ主任判事ノ參考ノ爲メ取捨ニ任スルモノナレハ其決

議ニハ參與スルコト能ハサルモノナリ

第五十八條 輕罪裁判所檢察官ハ職務ハ始審裁判所檢事又ハ其指名シタル檢事補之ヲ行フ輕罪裁判所判事ノ職務ハ始審裁判所判事之ヲ行フコトハ既ニ第五十五條ノ規定スル所ナリ

去レハ輕罪裁判所檢察官ノ職務モ亦始審裁判所檢事之レヲ行フヤ固ヨリ當然ノ職務ナリトス

第五十九條 輕罪裁判所書記ノ職務ハ始審裁判所書記之ヲ行フ本條モ亦前條ト同一主義ニ出テタルモノナレハ敢テ贅釋ヲ施サス

第六十條 東京警視本署長及ヒ府縣長官ハ各其管轄地内ニ於テ司法警察官トシテ犯罪ヲ捜査スルコト付キ檢事ト同一ノ權ヲ有ス但東京府長官ハ此限ニ在ラス

左ニ記載シタル官吏ハ檢事ノ補佐トシテ其指揮ヲ受ケ第三編ニ定メタル規則ニ從ヒ司法警察官トシテ犯罪ヲ捜査ス可シ

一六

- 一 警視警部
- 二 區長郡長

治〇第五十六條ヨリ〇第六十條マテ

三 治安判事

二六 四 警部ノ在ラサル地ノ戸長

本條ニ就テハ數多ノ伺指令アレハ予輩ハ其中最モ必要ナル伺指令ヲ記シテ以テ之レカ註釋ニ換ヘントス但シ伺指令ノ文章ニ拘泥セス其主意ヲ取テ以テ之ヲ我カ註釋文ノ體裁ニ綴ル可キナリ

府縣長官ハ各其管轄地内ニ於テ司法警察官トシテ犯罪ヲ捜査スルハ國事又ハ靜謐ニ關スル等重大ノ事件ニ對シ捜査ヲ爲スノ特別法ヲ行フコ限リ決シテ通常一般ノ事ニ對シタル者ニハ之ヲ行フノ權ナキモノトス且ツ檢事ト同一ノ權ヲ有スト雖モ其部屬タル警部又ハ郡區戸長ヲ指揮スルコ止マリテ治安判事ヲ指揮スルコ得サルモノトス

第一項ニハ管轄地内ニ於テアリテ第二項ニハ管轄地内ノ文字ナシト雖モ警部以下戸長ニ至ル迄其行政ニ付テノ管轄即チ警部ハ其在勤警察署内區長郡長ハ區内郡内戸長ハ町村内ノミニテ檢事ノ指揮ヲ受ケ司法警察ノ職務ヲ行フモノトスルナリ

區長郡長戸長等司法警察ノ職務ヲ執行スルコ係ル費額ハ各其役場費ヲ以テ支辨ス可キモノトス

ノトス

警部ノ在ラサル地ノ戸長トハ警部又ハ警部代理ノ巡查在勤スル警察署又ハ分署所在地外ノ町村戸長ト云フ義ニテ警部又ハ警部代理ノ巡查ノ居住スル町村ト雖モ其職務ヲ行フ警察署又ハ分署アリサル時ニ限リ其管轄地ノ戸長ハ司法警察ノ職務ヲ行フ可キモノトス

警部在ラサル地ノ戸長トハ例ヘハ甲乙丙ノ三町村聯合シテ戸長一人ヲ置ク所アリ而シテ甲地ニハ警察署アリト雖モ乙丙ニハ警察署在ラズ此ノ如キ場所ニテ戸長役場モ亦甲地ニアルキハ該戸長ハ司法警察官ト爲スコ得スシテ其甲村ハ固ヨリ乙丙ノ兩村モ亦警部ト以テ司法警察官ト爲スモノトス若シ乙村ニ戸長役場アリキハ其乙村ハ戸長ヲ以テ司法警察官ノ職務ヲ行ヒ餘ノ甲乙ノ二村ハ警部ノ管轄ニ屬スルモノトス

三六

區長郡長ハ其職務ヲ書記ニ代理セシムル場合ニ於テハ其司法警察事務ヲ代理セシムルコト得レド書記ヲシテ臨時警察事務ノミヲ代理セシムルコト得サルモノトス又何レノ場合ニ於テモ戸長ハ筆生ヲシテ司法警察事務ヲ代理セシムルコト得ス

治

司法警察官タル郡區長現行犯ノ場所ニ臨檢シ假ニ處分ヲ爲スニ當リ警部モ亦來合セシキ

市郡區長等ヨリ其取捕リシ處分ヲ警部ニ讓リ處分ヲ終ヘシム可シ

四六三

第六十一條 司法警察官檢察官又ハ裁判官ハ他ノ司法警察官檢察官又ハ裁判所ヨリ犯罪取調ハ爲メ其管轄地内ニ於テ証憑其他事實參考ト爲ル可キノ囑託ヲ受ケルコトアルヘシ

司法警察官檢察官又ハ裁判官ハ都テ其管轄地内ニ非ラサレハ以テ其職務ヲ行フコト得ス故ニ若シ他ノ管轄地内ニ於テ犯罪取調ノ爲メ必要ナル證據徵憑等ヲ集取セサル可ラサル時ハ其地内ニ於テ職務ヲ行フ所ノ同職ノ官吏ニ囑託シテ其集取ヲ乞フ可シ故ニ又囑託ヲ受ケタル官吏ハ其職權内ニ在テ爲ス可キ事件ナル時ハ必ス其囑託ニ應セサル可ラサルモ

本條ノ管轄地内トハ即チ警部ハ其在勤警察署部内區長郡長ハ其區郡内治安判事ハ其裁判所管轄内區長ハ其町村内ニ限リ其他ノ場所ニ於テハ一切職務ヲ行フコト得サルモノトス然レモ警視並ニ府縣本廳即チ警察本署ノ警部ニ於テハ特ニ受持區ナキヲ以テ其長官管轄地即チ該府縣全管内ヲ以テ管轄地ト見做ス可キモノトス是レ滋賀縣ノ例ニ於テ指令アリシ所ナリ

第六十二條 檢事ハ二月毎ニ豫審及ヒ公判ノ未決既決ノ事件表ヲ作り控訴裁判所檢事長ニ差出ス可シ

又違警罪裁判所檢察官ヨリ差出シタル事件表ヲ同時ニ檢事長ニ差出シ且意見アルハ之ヲ附記ス可シ

事件表ニハ裁判所長認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

事件表ニハ裁判所長認印ストハ即チ違警罪裁判所長ハ其違警罪裁判ニ關スル事件表ニ認印シ以テ之ヲ輕罪裁判所ニ差出ス時ハ又其輕罪裁判所長ハ之レニ加ヘテ認印シ其輕罪裁判ニ關スル事件表ニハ其所長之レニ認印シ以テ之ヲ控訴裁判所ニ差出スナリ然レハ其控訴裁判所長モ亦一々認印スルモノトス故ニ違警罪ノ事件表ニハ都テ三個ノ認印アルモノニシテ輕罪ノ事件表ニハ二個ノ認印アリテ控訴裁判所ノ事件表ニハ一個ノ認印アルモノトス是レ神戸裁判所岡山支廳檢事ノ請訓ニ依テ内訓アリシ所ノモノヲ以テ註釋文ニ綴リ

五六

第四章 控訴裁判所(凡七條)

治〇第六十一條〇第六十二條

○控訴裁判所及民事刑事事ヲ始審ノ裁判官渡ニ對スル控訴ヲ裁判スル所ニシテ以前上  
等裁判所ト云ヒシモノ即チ是レナリ

第六十三條 控訴裁判所ニ刑事局ヲ置キ輕罪裁判所ノ始審ノ裁判ニ對スル控訴ヲ裁判ス但  
其裁判ハ判事三名以上ニテ之ヲ爲ス可シ

本條ハ敢テ註釋ヲ要セス

第六十四條 刑事局判事ノ職務ハ裁判所長ヨリ其裁判所判事數名ニ順次滿一年間之ヲ命ス  
又滿一年間更ニ其職務ヲ繼續セシムルコトヲ得

本條ハ第五十五條ノ主義ト同一ナレバ敢テ之レガ復解ヲ施サズ

第六十五條 刑事局判事差支アル時ハ裁判所長ヨリ民事局判事ヲシテ其職務ヲ行ハシム  
裁判所長ニ何時ニテモ裁判長ト爲ルコトヲ得

本條ハ民刑ヲ合一ニスルノ法ニシテ前條屢々解説シタル所ナレハ又敢テ贅解ヲ施サズ

第六十六條 刑事局檢察官ノ職務ハ其裁判所檢事又ハ其指名シタル檢事之ヲ行フ  
本條ハ敢テ註釋ヲ要セス

第六十七條 檢事長ハ其裁判所ノ管轄地内ニ於テ輕罪裁判所檢事ニ屬スル司法警察及ヒ起  
訴ノ職務ヲ行ヒ又ハ其所屬ノ檢事ヲシテ之ヲ行ハシムルコトヲ得

又起訴及ヒ其他ノ職務ニ付キ其管轄地内ノ檢察官ニ告達スルコトアル可シ

檢事長ハ其管轄地内ノ檢察官及ヒ司法警察官ヲ監督ス

本條ニハ檢事長ハ其管轄地内ノ檢察官及ヒ司法警察官ヲ監督ストアリテ輕罪裁判所ノ檢  
事ニハ其管轄地内ノ司法警察官ヲ監督スルノ明文ナシ故ニ輕罪裁判所ノ檢事之ヲ指揮ス  
ル迄ニシテ監督スルノ權ナキモノトス

第六十八條 檢事長ハ三月毎ニ豫審及ヒ未決既決ノ事件表ヲ作り司法卿ニ差出ス可  
シ又輕罪裁判所檢事ヨリ差出シタル事件表ヲ同時ニ司法卿ニ差出シ且意見アル時ハ之ヲ附  
記ス可シ

事件表ニハ裁判所長認印シ且意見アル時ニテ附記ス可シ

本條ハ第六十二條ノ一層上等ナル手續ヲ示シタルモノナリ

第六十九條 刑事局書記ノ職務ハ其裁判所書記之ヲ行フ

治○第六十三條ヨリ○第六十九條マテ

本條ハ敢テ註釋ヲ要セス

六六

◎第五章 重罪裁判所(凡七條)

本章ハ敢テ註釋ヲ要セス

第七十條 重罪裁判所ハ其管轄地内ニ於テ犯シタル重罪ヲ裁判ス

本條ハ第四十九條及ヒ第五十四條ノ主義ト同一ナレハ敢テ贅釋ヲ要セス

第七十一條 重罪裁判所ハ二月毎ニ之ヲ開ク

若シ事件夥多ナル時ハ控訴裁判所長及ヒ檢事長ヨリ司法卿ニ具申シ其許可ヲ得テ臨時開廳スルコトヲ得

罪ノ輕小ナルモノハ益々其輕小ナルコト隨テ之ヲ犯ス者多クシテ其罪ノ重大ナルモノハ愈々其重大ナルコト從テ之ヲ犯ス者少ナキハ自然ノ勢ニシテ各地ニ異例ナキ所ナリ而シテ其罪ヲ犯スノ屢々然タルモノハ隨テ其裁判所モ亦日々之ヲ開廳セサル可ラサルモ其罪ヲ犯スノ偶々ナルモノハ從テ其裁判所モ亦日々之ヲ開廳スルノ必要ナク偶々之ヲ開廳シテ事足レリトス今夫レ重罪ハ敢テ解釋ヲ要セス其文字ノ如ク即チ重キ罪ナルヲ以テ其罪ヲ犯

ス者甚ク稀レナリ故ニ其重罪裁判所ハ三月毎ニ之ヲ開キ一年四回ノ開廳ヲ以テ通則トス然レモ若シ事件夥多ナル時ハ此限ニアラス乃チ臨時開廳スルコトヲ得ルモノトス

第七十二條 重罪裁判所ハ控訴裁判所又ハ始審裁判所ニ於テ之ヲ開ク

第五十四條ヲ以テ其「始審裁判所ハ輕罪裁判所トシ其管轄地内ニ於テ犯シタル輕罪ヲ裁判ス」ト規定ス然ラハ則チ之ヲ推シテ「控訴裁判所ハ重罪裁判所トシ其管轄地内ニ於テ犯シタル重罪ヲ裁判ス」ト規定セサル可ラサルノ順序ナリ故ニ其控訴裁判所々在ノ府縣々々於テハ重罪裁判所ハ其控訴裁判所ニ之ヲ開クト雖モ其控訴裁判所々在ノ府縣タルヤ僅々七ヶ所ニ過キサレハ若シ控訴裁判所ニ非ラサレハ以テ重罪裁判所ヲ開ク可ラストセハ之レカ爲メ被告人ヲシテ遠隔ノ地ニ護送シ又訴訟關係人ヲ遠ク地方ヨリ召喚スルカ如キ種々ノ不便アリ以テ其費用ヲ増加スルノ恐レアリ故ニ其控訴裁判所アラサル府縣ニ於テハ始審裁判所ニ之ヲ開クモノトス

九六

第七十三條 重罪裁判所ハ左ノ職員ヲ以テ裁判ヲ爲ス可シ

一 裁判長一名但控訴裁判所長ヨリ其裁判所判事中心ニ之ヲ命ス

治○第七十條ヨリ○第七十三條マテ

○七 二 陪席判事四名但控訴裁判所ニ於テ開ク時ハ裁判所長ヨリ其裁判所判事中ニテ之ヲ命  
始審裁判所ニ於テ開ク時ハ其裁判所長及ヒ先任ノ判事ヲ以テ之ニ充ツ

△參看 明治十四年九月廿日第四十六號布告

治罪法第七十三條第二項ノ陪席判事四名ト有之候ヘトモ當分ノ内二名ト相ヒ定メ候事  
本條ハ敢テ註釋ヲ要セス

第七十四條 重罪裁判所檢察官ノ職務ハ控訴裁判所檢察長又ハ其指名シタル檢事之ヲ行フ  
始審裁判所ニ於テ開ク時ハ檢事長ヨリ始審裁判所檢事ヲシテ其職務ヲ行ハシムルヲ得  
本條モ亦敢テ註釋ヲ要セス

第七十五條 重罪裁判所書記ノ職務ハ開廳ス可キ裁判所ノ書記之ヲ行フ

重罪裁判所ノ書記ノ職務ハ若シ控訴裁判所ニ於テ開クキハ即チ其控訴裁判所ノ書記之ヲ  
行ヒ若シ始審裁判所ニ於テ開クキハ則チ其始審裁判所ノ書記之ヲ行フモノトス

第七十六條 控訴裁判所檢事長ハ閉廳ノ後既決事件表ヲ作り司法卿ニ差出ス可シ  
事件表ニハ控訴裁判所長認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

第五十二條第六十二條及ヒ第六十八條ノ場合ニ於テハ何レモ皆チ既決未決ノ事件表ヲ作  
ル可キヲ記載セリ然ルニ今本條ニ於テハ唯タ「既決事件表ヲ作り云々」トノミ記シテ未決  
事件表ヲ作ル可キヲ記サ、ルハ抑モ故アリ何ソヤ重罪裁判所ハ未決ノ儘ニテ閉廳スル  
ナキヲ以テナリ

○第六章 大審院(凡六條)

本章ハ大審院ノ構成及ヒ權限ヲ規定シタルモノニシテ其職務ハ第五編ニ記載セリ

第七十七條 大審院ニ刑事局ヲ置キ左ノ條件ヲ裁判ス

一 上告

二 再審ノ訴

三 裁判管轄ヲ定ムルノ訴

四 公安又ハ嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴

一七

本條詳細ハ第五編大審院ノ職務ニ至テ之ヲ知ルヲ得可キヲ以テ予輩ハ敢テ茲ニ之レカ註  
釋ヲ贅セス

治○第七十四條ヨリ○第七十七條マテ



第七十八條 刑事局ニ於テハ判事五名以上ニ非サレハ裁判ヲ爲ス可カラズ

三七

刑事局トハ云フマテモナク大審院ノ刑事局ヲ云フナリ

第七十九條 刑事局判事ノ職務ハ司法卿ノ奏請ニ因リ其院判事ニ之ヲ命ス

判事差支アル時ハ民事局判事授任ノ順序ニ從ヒ其職務ヲ行フ

△參看 明治十四年十月六日第五十五號布告

治罪法第七十六條末文陪席判事第七十九條第二項補充判事ノ儀當分其裁判所長又ハ院長ノ臨時指定スル所ニ任シ候條此旨布告候事

本條ハ敢テ註釋ヲ要セス

第八十條 刑事局檢察官ノ職務ハ其院檢察長又ハ其指名シタル檢事之ヲ行フ

本條モ亦敢テ註釋ヲ要セス

第八十一條 刑事局書記ノ職務ハ其院書記之ヲ行フ

本條モ亦同シク敢テ註釋ヲ要セス

第八十二條 檢察長ハ三月毎ニ豫審及公判ノ未決既決ノ事件表ヲ作り司法卿ニ差出ス可シ

事件表ニハ院長認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

本條モ亦同シク敢テ註釋ヲ要セス

○第七章 高等法院(凡九條)

被告人ノ身分高位顯官ニ係ハルキハ通常裁判所ニ於テハ或ハ其威ニ恐レテ終ニ裁判ノ公平ヲ失スルニ至ルコトキキ保シ難キモノアル可シ又國事犯ノ如キ其黨與夥多ナルモノヲ裁判スルニ於テハ通常法衙ノ或ハ其任ニ堪ヘサルノ恐レナキ能ハス故ニ高等法院ナルモノヲ設ケテ此等ノ犯罪ヲ裁判スルモノトス

第八十三條 高等法院ニ於テハ刑法第二編第一章第二章ニ記載シタル重罪ヲ裁判ス又皇族ノ犯シタル重罪及禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ヲ裁判ス

又勅任官ノ犯シタル重罪ヲ裁判ス

前二項ニ記載シタル者ノ正犯及ヒ從犯ハ身分ノ如何ヲ問ハズ其院ニ於テ之ヲ裁判ス

三七

第一項ハ犯罪ノ性質ニ因テ其裁判ヲ高等法院ニ委セラレタルモノコシテ第二項及ヒ第三項ハ被告人ノ身分ニ因テ其裁判ヲ高等法院ニ任セラレタルモノナリ

治○第七十八條ヨリ○第八十三條マテ

刑法第三編第一章ニ記載シタル罪ハ即チ皇室ニ對スル罪ニシテ第二章ニ記載シタル罪トハ即チ國事ニ關スル罪ニテ内乱ニ關スル罪及ヒ外患ニ關スル罪是レナリ此等ノ罪ヲ犯シタル者ハ若シ重罪ニ係ルハ其身分ノ如何ヲ問ハス都テ高等法院ニ於テ之ヲ裁判スルモトス然レモ本條ノ明文重罪ヲ裁判ストアルヲ以テ若シ其犯セシ罪ノ輕罪ニ係ルハ其通常裁判所ニ於テ之ヲ裁判スルモトス

又皇族ノ犯シタル重罪及ヒ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ヲ裁判スルモノトス去レト若シ罰金ノミノ刑ニ該ル可キ罪ヲ犯セシ場合ニ於テハ第二百四十九條ヲ以テ代人ヲ差出スヲ得ルヲ以テ通常ノ裁判所ニ於テ之ヲ裁判ス

又勅任官ノ犯シタル重罪ハ高等法院ニ於テ之ヲ裁判スルモノトス然レモ本條ノ明文重罪トアルヲ以テ若シ輕罪ニ係ルハ其禁錮ト罰金トノ別ナク通常裁判所ニ於テ之ヲ管轄スルモノトス

重罪又ハ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ヲ犯シタル皇族及ヒ重罪ヲ犯シタル勅任官ノ共犯人ハ其正犯タルト從犯タルトニ論ナク又其身分ノ如何ヲ問ハス都テ其高等法院ニ於テ併セテ

之ヲ裁判スルモノトス是レ一個ノ罪ニ付キ其訴訟ヲ兩斷シテ別ニ管轄スルヲ得サルニ因テ然ルナリ即チ第四十四條第三項ニ高等法院ノ管轄ニ付キ法律ニ於テ特ニ定メタル場合トハ是レナリ

第八十四條 高等法院ハ司法卿ノ奏請ニ因リ上裁ヲ以テ之ヲ開ク其裁判ス可キ場所モ亦上裁ヲ以テ之ヲ定ム

蓋シ高等法院ヲ開ク可キ場所ヲ定メサル所以ノモノハ被告事件ノ模様ニ因リ便宜ノ土地ヲ撰マサル可ラサルガ爲メナル可シト信スルナリ

第八十五條 高等法院ハ左ノ職員ヲ以テ裁判ヲ爲ス可シ

一 裁判長一名陪席裁判官六名但元老院議官大審院判事ニヨリ毎年豫メ上裁ヲ以テ之レヲ命ス

二 豫備裁判官二名但前項ノ式ニ從ヒ之ヲ命ス

本條末項ニ陪席判事豫備判事ト記サスルヲ陪席判官豫備判官ト記シタル所以ノモノハ元老院議官中ヨリ撰任スルヲアルヲ以テナリ

治○第八十四條○第八十五條

第八十六條 豫審判事ノ職務ハ上裁ヲ以テ大審院刑事局判事一名又ハ數名ニ之ヲ命ス

六七

豫審判事ハ毎年豫メ之ヲ命セシ其起訴アルコト當テ臨時ニ之ヲ命スルモノトス

第八十七條 高等法院檢察官ノ職務ハ大審院檢事長又ハ司法卿ヨリ指名セラル檢事之レヲ

行フ

本條ハ敢テ註釋ヲ要セス

第八十八條 高等法院書記ノ職務ハ大審院書記之ヲ行フ

本條モ亦敢テ註釋ヲ要セス

第八十九條 高等法院ノ裁判ニ對シテハ上訴ヲ許サズ但左ノ條件ニ於テハ其院ニ上訴スル

コトヲ得

一 曠席裁判アリタル場合ニ於テハ故障

二 第四百二十六條ト同一ノ場合ニ於テ哀訴

三 第四百二十九條ト同一ノ場合ニ於テ再審ノ訴

高等法院ハ臨時之ヲ開クモノニシテ其裁判ノ判決終レハ則チ之ヲ閉廳スルモノナリ然ル

ニ本條ニ示ス所ノ三個ノ場合ニ於テハ其院ニ上訴スルコトヲ得トアリ故ニ其閉廳ノ後ニ係  
ハラハ之ヲ如何シテ上訴ス可キカ蓋シ其迷ヒナキ能ハスト雖此件ニ就テハ仙臺裁判所  
判事ノ請訓ニ於テ内訓アレハ之ヲ記サン曰ク「開院アリタル上ハ一年內ハ其事件ニ就キ  
上訴スルキハ原裁判官處分スルコト付第八十九條ニ依リ上訴スルキハ高等法院ノ名ヲ以テ  
差出スヘシ若シ一年ヲ過キ上訴スルキハ更ニ上奏シテ開院セサルヲ得サルコト付司法卿ニ  
書類ヲ差出スヘキ者トス」

第九十條 被告事件夥多ナル時又ハ再審ノ訴ヲ裁判ス可キ時ハ新ニ職員ヲ命スルコトアル可  
シ

刑法第二編第二章即チ國事ニ關スル罪ノ如キニ於テハ被告事件甚々大ナルヲ以テ數個ノ  
場所ニ高等法院ヲ開クコトアル可ク又被告事件夥多ナル時ハ一個ノ高等法院ニシテ數個ノ  
公廷ヲ開クコトアリ又再審ノ訴ヲ判決ス可キ場合ニ於テハ前キニ其事件ヲ裁判シタル法官  
ハ再ヒ之レニ干預スルコトヲ得サルハ法律ノ禁スル所ナルヲ以テ此等ノ場合ニ於テハ必ス  
新ニ職員ヲ命セサル可ラサルノ勢トナル可シ故ニ本條ヲ設ケタルナリ

七七

治○第八十六條ヨリ○第九十條マテ

第九十一條 高等法院ノ訴訟手續ハ通常ノ規則ニ從フ

八七

本條ハ敢テ註釋ヲ要セス

◎第三編 犯罪ノ捜査起訴及ヒ豫審(凡四章百七十條)

本編ハ敢テ註釋ヲ要セス

◎第一章 捜査(凡二節十五條)

捜査トハ司法警察ノ職務ニシテ平常犯罪アリヤ否ヤノ點ニ付キ之ヲ探偵穿索スルノ謂ヒニ非ラズ其既ニ發覺シタル犯罪ノ如何ヲ捜査スルモノニシテ即チ犯罪發覺以後ノ手續ヲ示スモノナリ

第九十二條 檢察官ハ後ニ記載シタル告訴發現行犯其他ノ原由ニ因リ犯罪アルコトヲ認知シ又ハ犯罪アリト思料シタル時ハ其証憑及ヒ犯人ヲ捜査シ第百七條以下ノ規則ニ從ヒ起訴ノ手續ヲ爲スコシ

其他ノ原由ニ因リ犯罪アルコトヲ認知ストハ傳聞風說等ニ因リ知り得タルノ類ヲ云フナリ

○第一節 告訴及ヒ告發(凡七條)

告訴トハ被害者躬自ラ之ヲ訴フルヲ云ヒ告發トハ利害ノ相關セサル他人ヨリ報告スルヲ云フ

第九十三條 何人ニ限ラズ重罪輕罪ニ因リ損害ヲ受ケタル者ハ犯罪ノ地若クハ被告人所在

ノ豫審判事檢事又ハ司法警察官ニ告訴スルコトヲ得

豫審判事告訴ヲ受ケタル時ハ第百十四條以下ノ規則ニ從ヒ其處分ヲ爲スコシ

檢事告訴ヲ受ケタル時ハ第百七條ノ規則ニ從ヒ其處分ヲ爲スコシ

司法警察官告訴ヲ受ケタル時ハ速ニ其書類ヲ檢事ニ送致スコシ

違警罪ニ付テハ犯罪ノ地ノ違警罪裁判所檢察官又ハ司法警察官ニ告訴スルコトヲ得其告訴ヲ

受ケタル司法警察官ハ之ヲ違警罪裁判所檢察官ニ移スコシ

重罪及ヒ輕罪ヲ犯シタル者ハ其犯罪人ノ如何ニ因リ或ハ其罪ヲ隱匿シ遂クルト信スルカ

若クハ俗ニ所謂盜賊武ケ々々數カ爲メ其犯罪ノ地ニ在ル者アリト雖モ又或ハ其罪ノ發覺

九七

セシコトヲ恐ル、カ爲メ他ノ地ニ移リ居ル者アリ去レハ其犯罪ノ地ニ非ラサレハ以テ之ヲ告訴スルコト能ハストモハ之レカ爲メ被害者大ニ其不便利ヲ受ケルコトヲ故ニ重罪輕罪

治○第九十一條○第九十二條○第九十三條

於テハ其犯罪ノ地タルト其被告人所在ノ地タルトニ論ナク孰レノ地ニテモ被害者ハ之ヲ告訴スルコトヲ得ルモノトス

然ルニ違警罪ハ其刑罰輕小ナルヲ以テ其罪發覺シテ其刑罰ヲ科セラルハモ拘留科料ニ過キカレハ被告人逃亡シテ他ノ管轄地ニ在ルコト甚ク稀ナリ故ニ違警罪ニ就テ告訴スルハ唯々其犯罪ノ地ノミニ限リ其他ニ於テハ告訴スルコトヲ得サルモノトス

重罪輕罪ノ場合ニ於テモ亦違警罪ノ場合ニ於テモ共ニ告訴スルコトヲ得ト記シテ告訴ス可シト記サレハ立法者ノ意ヲ用ヒタル所也何トナレハ若シ告訴ス可シト記スル時ハ其被害者ハ必ス之ヲ告訴セサルヲ得ス若シ之ヲ告訴セサルニ於テハ又其被害者多少ノ罪ナカ

ル可ラサルコトナラン是レ豈ニ立法者ノ精神ナランヤ故ニ告訴スルコトヲ得ト記シテ其之ヲ告訴スルト否トハ全ク被害者ノ自由ニ任セタリ是レ至極良法ニシテ立法者ノ意ヲ用ヒタルヲ想見スルコト足レリ

第九十四條 告訴人ハ成ル可ク其証憑及ヒ事實參考ト爲スコキヲ申立ツ可シ又告訴人ハ第一百條以下ノ規則ニ從ヒ民事原告人ト爲ルコトヲ得

本條第一項ノ明文中成ル可クト云フ道徳上ノ文字アルヲ以テ假令其証憑及ヒ事實參考ト爲ル可キヲ申立ツルコトナシト雖モ之レカ爲メ決シテ之ヲ告訴スルコトヲ得サルノ理ナク尙ホ之レカ告訴ヲ爲スコトヲ得ルモノトス然レモ其証憑及ヒ事實參考ト爲ル可キヲ申立ツルコトナキニ於テハ官ノ搜查甚ク困難ニシテ或ハ其効ヲ見サルコトアル可シ且ツ夫レ告訴人其証憑及ヒ事實參考ト爲ル可キヲ申立ツルニ於テ何ノ手續ヲ要スルコトカ之レアラ

ン其己レノ知ルノ事實ヲ申立ツルニ於テハ唯々己レノ口以テ之ヲ陳述スレハ則チ可ナルノミ故ニ被害者ハ假令其証憑及ヒ事實參考ト爲ル可キヲ申立ツルコトナキモ尙ホ且ツ之ヲ告訴スルコトヲ得可シト雖モ其既ニ知ルノ事實ヲ申立ツルハ敢テ手續ヲ要スル所ニ非ラズ且ツ又之ヲ告訴スル所以ノモノハ其犯罪人ヲシテ逮捕セシメントスルノ目的ナレハ成ル可ク其証憑及ヒ事實參考ト爲ル可キヲ申立ツ可キモノトス

第二項ニ於テ告訴人及ヒ民事原告人ト稱スルモ唯々其手續ノ前後ニ於テ其名稱ヲ異ニスル者ニシテ敢テ其人ヲ異ニスルニ非ラサルモノトス蓋シ犯罪ノ爲メ害ヲ被ムリタル者ヲ以テ被害者ト云フアリ而シテ其被害者其犯罪ヲ親告セタル者ハ其名ヲ變シテ之ヲ告訴人

治〇第九十四條

ト云フナリ又其告訴人及ヒ未タ其告訴ヲ爲サ、ル被害者カ其私訴ノ申立ヲ爲シタルモ其ハ其稱テ化シテ之ヲ民事原告人ト云フナリ

第九十五條 告訴ハ告訴人ノ署名捺印シタル書面ヲ以テ之ヲ爲ス可シ

又告訴ハ口述ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得其告訴ヲ受ケタル官吏ハ調書ヲ作り告訴人ニ之ヲ讀聞カセ共ニ署名捺印ス可シ若シ告訴人署名捺印スルコト能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ

告訴人ニハ告訴ヲ受ケタルノ証書ヲ渡ス可シ

本條ハ錯雜解シ難キカ如シト雖モ能ク之ヲ熟讀スルニ於テハ敢テ註釋ヲ要ス可キ所ニ非ラズ故ニ之ヲ註釋セハ熟讀家即チ勉強者ノ爲メ贅事ニ屬スルノ恐レアリ故ニ予輩ハ敢テ之レカ註釋ヲ施サス

第九十六條 官吏其職務ヲ行フニ因リ重罪輕罪アルコトヲ認知シ又ハ重罪輕罪アリト思料シタル時ハ速ニ其職務ヲ行フ地ノ檢事ニ告發ス可シ

告發ハ官吏ノ署名捺印シタル書面ヲ以テ之ヲ爲シ成ル可ク証憑及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ添フヘシ

違警罪ニ付テハ違警罪裁判所檢察官ニ告發ス可シ

本條ノ明文 官吏其職務ヲ行フニ因リ云々トアルヲ以テ假令官吏ト雖モ其職務外ニ在テ

ハ純然タル一個ノ常人ナレハ後條ニ從テ其所在ノ地若クハ犯罪ノ地ノ豫審判事檢事又ハ司法警察官ニ告發スルコトヲ得ルモノトシ敢テ之ヲ告發セサル可ラサルノ責任義務アルコト

非テサルナリ唯タ夫レ其職務ヲ行フニ因テ重罪輕罪アルコトヲ認知シ又ハ重罪輕罪アリト思料シタル時ハ速ニ其職務ヲ行フ地ノ檢事ニ告發ス可キノ責任義務アルモノトス然レモ

其責任義務ニ背キ發見シタル犯罪ヲ默止シタリトモ別ニ刑法中ニ其罪ノ法條アルナケレハ敢テ其刑罰ヲ受クルコトナシ去レト時ニ懲戒ノ處分ヲ受クルコトアル可キ否チ其長官ハ

宜シク之ヲ懲戒セサル可ラサルモノトス然ラサレハ告發ス可シト命令シタル本條ノ法意ニ背反スルノ恐レアル可シ

職務ヲ行フニ因リ犯罪アルコトヲ知ルトハ例ヘハ民事ノ裁判官審理ノ際偽造證書ノ罪ヲ發見シ又ハ税關官吏抜荷ヲ發見シ若クハ酒造檢査官吏免許外過額ノ酒造アルコトヲ發見シタ

ル場合等ノ類即チ是レナリ

治〇第九十五條〇第九十六條

常人ノ告發ニ付テハ豫審判事檢事又ハ司法警察官ノ内其何レナリトモ其告發人ノ意見ニ其内一ヲ撰ンテ之レニ告發スルヲ得レトモ官吏其職務ヲ行フニ因テ知り得タル犯罪ヲノニハ斯ク自由ニ告發スルヲ許サス必ス之ヲ檢事ニ告發スヘキモノト定ム是レ何ニ因テ然ルカ元來告發ナルモノハ檢事ニ向テ之ヲ爲スヲ以テ其本法ノ手續トスルナリ然ルニ常人ノ告發ニ付テハ豫審判事檢事又ハ司法警察官ノ内其何レナリトモ自由ニ之ヲ爲スヲ得セシムル所以ノモノハ是レ便利ノ爲メナリ且ツ夫レ常人ノ告發ヲ檢事ニ限ルト一定セハ人民其犯罪アルヲ知ルモ檢事所在地ノ遠隔ナルヲ恐レ敢テ之レカ告發ヲ爲サズ終ニ犯罪人ヲノ僥倖ヲ得セシメ以テ社會ノ危險ヲ永ク存セシムルノ不幸アルヲ免レサルモノトス故ニ常人ノ告發ハ獨リ檢事ト限ラヌ或ハ豫審判事若クハ司法警察官ニ向テモ亦告發ヲ爲スヲ得ルモノトス然レモ官吏其職務ヲ行フニ因テ知り得タル犯罪ノ告發ハ必ス其本法ノ手續ニ從ヒ之ヲ檢事ニ向テ爲サレ可テサルハ固ヨリ當然ノコトナリトス又官吏其職務ヲ行フニ因テ知り得タル犯罪ノ告發ハ必ス書面ヲ以テ爲サル可テサルモノト定メ敢テ其口述ヲ用フルヲ許サス是レ亦當然ノコト謂フ可シ

本條ノ官吏トハ巡查等外吏諸雇員ト雖モ官吏ニ準ス可キ者ハ總テ包含スルモノナリ  
 巡查又ハ警察雇員等其職務ヲ行フニ方リ重罪輕罪アルヲ認知シ又ハ思料シタルモ本  
 廳警部ニ報告セシメ其報告ヲ受ケタル警部ヨリ之ヲ檢事ニ告發スルモ妨ケナキモノトス  
 司法警察官ハ檢事ノ補佐官ナレハ自ラ非現行犯アルヲ認知シ又思料シタルモ第九十  
 二條ニ依リ捜査ヲ爲シタル上ニテ其事件ヲ檢事ニ送致ス可シ

第九十七條 何人ニ限ラヌ重罪輕罪アルヲ認知シ又ハ重罪輕罪アリト思料シタル時ハ第  
 九十四條第九十五條ノ規則ニ從ヒ其所在ノ地若シハ犯罪ノ地ノ豫審判事檢事又ハ司法警察  
 官ニ告發スルヲ得

告發ヲ受ケタル官吏ハ第九十二條ノ規則ニ從ヒ其處分ヲ爲ス可シ

本條ノ明文「何人ニ限ラヌ」トアルヲ以テ官吏ト雖モ其職務外ニ在テハ都テ本條ニ從テ告  
 發スルヲ得可ク又其本人ノ自由ニ之ヲ告發セサルモ敢テ之レカ責メナキモノトス而  
 シテ本條ニハ重罪輕罪ノ告發ノコトアリテ違警罪ノ告發ノコトナシ是レ違警罪ノ告發ハ本條ニ  
 ハ合當セサルモノト知ル可シ是レ滋賀縣警部ノ疑問ニ於テ回答アリシ所ナリ

治○第九十七條

第九十八條 告訴告發ハ代人ヨリ委任シテ之ヲ爲スコト得但第九十六條ノ場合ハ此限リニ在

六八  
ヲス

無能力者ノ告訴ハ法律ニ定メタル代人之ヲ爲スモ其効アリトス

無能力者ノ代人トハ未丁年者ノ父若クハ母又ハ親屬後見人或ハ結婚シタル婦ノ夫或ハ白痴瘋癲人ノ保管者或ハ治産ノ禁ヲ受ケル者ノ財産管理人等ヲ云フナリ而シテ無能力者ノ告訴トアリテ告發ヲ記サ、ルモノハ告發ハ何人ト雖モ之ヲ爲スコト得ルヤ既コ前條ノ許ス所ナレハ敢テ無能力者ノ名義ヲ以テ之ヲ爲スヲ要セサレハナリ然ラハ何ヲ以テ此等ノ者ニ迄告訴告發ヲ爲スノ權ヲ許スカ抑モ故アリ何ソヤ檢察官等犯罪アルコトヲ知ルノ根據ハ大概告訴告發ニ因ルヲ以テ務メテ其途ヲ擴張セサル可ラサルモノトス是レ無能力者ニモ亦告訴告發ノ權ヲ與ヘ自ラ之ヲ爲スハ固ヨリ其法律ニ定メタル代人之ヲ爲スモ其効アリト定メタル所以ナリ

告訴ハ部理代人ヲシテ之ヲ爲サシムヘシト雖モ又或ハ總理代人ヨリ之ヲ爲スコトアルヘシ然レモ告發ハ必ズ部理代人ヲシテ之ヲ爲サシムヘキモノコシテ決シテ總理代人ヨリ之ヲ

爲スコト許サ、ルモノトス是レ明治十四年十一月二十五日付ノ福井縣ノ伺ニ於テ同年十二月十三日ニ指令アリシ所ナリ

第九十九條 告訴告發ハ其願下ニ爲シ又ハ其申立ヲ變行スルコト得此場合ト雖モ第十六條ノ規則ニ從ヒ被告人ヨリ要償ノ訴ヲ受クルコトアル可シ

本條被告人ヨリ要償ノ訴ヲ受ク云々トアルハ第十七條ニ明文アル其官吏ノ外ハ假令官吏ト雖モ總テ要償ノ責メニ任ス可キモノトス

○第二節 現行犯罪(凡七條)

現行犯罪トハ第百條ニ示スカ如ク現ニ行ヒ又ハ現ニ行ヒ終リタル際ニ發覺シタル罪ヲ謂フ而シテ之レニ對スル非現行犯罪トハ曾テ犯罪ヲ爲シタル所其當時ニ在テ發覺セサリシモノ天ノ網終ニ遁ルヘカラス其後チ證據ノ爲メ其曾テ犯罪アリシコト發覺シタル者ヲ謂フナリ

七八

第百條 現行犯罪トハ現ニ行ヒ又ハ現ニ行ヒ終リタル際ニ發覺シタル罪ヲ謂フ

現行犯ハ犯人現場ニ在ル場合多シト雖モ必スシモ現場ニアル時ニ限ラズ既ニ犯罪ノ現場治○九十八條○第九十九條○第百條



去ルト雖直チニ追捕シ得可キ者ハ皆テ現行犯ト爲ス可シ是レ明治十三年十二月十日  
付仙臺裁判所判事ノ請訓ニ於テ翌明治十四年七月二十五日ニ内訓アリシ所ナリ

第一百一條 重罪輕罪ニ付キ左ノ場合ハ現行犯ニ准ス

- 一 犯人トシテ一人又ハ數人ニ追呼セラル、時
- 二 兇器贓物其他犯人ト思料スヘキ物件ヲ携帯シタル時
- 三 家宅内ニ於テ犯セタル罪ヲ檢証スル爲メ又ハ其犯人ト思料スヘキ者ヲ逮捕スル爲メ且  
主ヨリ官吏ニ其處分ヲ求メヌル時

△參看 明治十四年九月二十日第四十六號布告

治罪法第一百一條ニ准現行犯ノ場合列記有之候處其舉動犯人ト思料スヘキ者アルハ當分ノ  
内現行犯ニ准シ處分スルコトヲ得

本條ニ列記スル所ノモノハ眞ノ現行犯ニ非ラスト雖モ事件重要ニシテ且ツ其處分急速ヲ  
要スルモノナルヲ以テ之ヲ現行犯ニ准シ非常ノ處分ヲ爲スモノトス抑モ家宅搜索ハ第百  
二十三條ヲ以テ日出前日没後ハ之ヲ爲スコトヲ得スト規定シタルモ若シ家宅内ニ現行犯ヲ

ルヲ認知シタル時ハ假令日出前日没後ト雖モ直チニ侵入逮捕スルコトヲ得ルモノトス其他  
敢テ贅釋ヲ要セス

第一百二條 司法警察官及ヒ巡查其職務ヲ行フニ當リ重罪輕罪ノ現行犯アルコトヲ知リタル時  
ハ令狀又ハ命令ヲ待タズシテ被告人ヲ逮捕スヘシ

違警罪ノ現行犯アルコトヲ知リタル時ハ被告人ノ氏名住所ヲ問ヒ之ヲ違警罪裁判所檢察官ニ  
告發スヘシ其氏名住所分明ナラス又ハ逃亡ノ恐アル者ハ違警罪裁判所ニ引致スルコトヲ得

司法警察官及ヒ巡查タル者其管轄地内ニ於テハ假令制服ヲ着セサルモ其職務ヲ行フニ當  
テカ若クハ其職務ヲ行フ時ニ非ラスト雖モ其制服ヲ着シタル時ハ都テ本條ニ依リ之ヲ處  
分スルコトヲ得ルモノトス然レモ若シ其職務ヲ行フ時ニモ非ラサレハ又其制服ヲモ着セサ  
ル時ニ在テハ假令其管轄地内ト雖モ本條ニ依リ被告人ヲ逮捕シ或ハ引致スルコトヲ得ス唯  
タ常人ノ資格ヲ以テ之ヲ告發スルコトヲ得ルノミトス

又其管轄地外ト雖モ其制服ヲ着シテ其職務ヲ行フニ當テハ本條ニ依テ之ヲ處分スルコトヲ  
得ルモノトス然レモ若シ其制服ヲ着スルモ其職務ヲ行フ時ニ非ラサルガ又ハ其職務ヲ行

治○第一百一條○第一百二條

フノ時、雖其制服ヲ着セザル時ニ於テハ本條ニ依テ之ヲ處分スルコトヲ得サルモノトス  
 故ニ其制服モ着セザレハ又其職務ヲ行フノ時ニモ非ラサレハ無論本條ニ依テ之ヲ處分ス  
 ルコトヲ得ス唯常人ノ資格ヲ以テ之ヲ告發スルコトヲ得ルノミナリ  
 本條ニ就テハ少シク疑フ所ノモノアリ何ソヤ第二項ニ於テ違警罪ノ現行犯アルコトヲ知リ  
 タル時ハ被告人ノ氏名住所ヲ問ヒ之ヲ違警罪裁判所檢察官ニ告發ス可シ云々トアリテ又  
 其氏名住所分明ナラス又ハ逃亡ノ恐アル者ハ違警罪裁判所ニ引致スルコトヲ得トアレトモ其  
 被告人ニ於テ其氏名住所ヲ僞ルニ於テ司法警察官及ヒ巡查ハ何々以テ其僞リナルコトヲ知  
 ルヲ得可キヤ其申立ノ澁滞スルハ或ハ其僞リナルコトヲ知ルヘキモ其澁滞ナク申立ツルノ  
 僞リハ決シテ其僞リナルコトヲ知ルナクシテハ假令之ヲ告發スルモ他時何ヲ以テ其本人ヲ刑  
 令裁トナシ得ンヤ予輩ハ其違警罪現行犯者ヲシテ空シク其刑罰ヲ通カレシムルノコトナカラ  
 シ耶ヲ疑フナリ況ンヤ其他人ノ實名ヲ詐稱スルコト於テハ或ハ爲メニ無辜ノ良民ヲ刑スル  
 ノコトナキヲ保シ難シ故ニ予輩ハ違警罪ノ現行犯ニ於テハ好シヤ氏名住所ノ分明ナル者ニ  
 モ致セ都テ直チニ之ヲ違警罪裁判所ニ引致センコトヲ希望スルナリ

第二百三條 巡查被告人ヲ逮捕シタル時ハ速ニ之ヲ司法警察官ニ引致ス可シ  
 其被告人ヲ受取リタル司法警察官ハ逮捕及ヒ告發ニ付テノ調書ヲ作ルヘシ

本條ハ敢テ註釋ヲ要セス

第二百四條 司法警察官被告人ヲ逮捕シ又ハ之ヲ受取リタル時ハ假ニ被告人ノ訊問及ヒ檢証  
 處分ヲ爲ス可シ

本條ノ末ニ檢証處分ヲ爲スヘシトノ命令アレトモ若シ犯罪明確ニシテ敢テ檢証處分ヲ要セ  
 スト見込ムモノハ其檢証處分ヲ爲サハモ妨ケナキモノトス是レ明治十四年十二月二十  
 二日付ノ茨城縣ノ伺ニ於テ同年同月二十八日ニ指令アリシ所ナリ然レモ成ルヘク其檢  
 証處分ヲ爲スヲ以テ法律ノ精神トスルモノ、如シ

第二百五條 何人ニ限ラス重罪輕罪ノ現行犯アル場合ニ於テハ直ニ被告人ヲ逮捕スルコトヲ得  
 本條何人ニ限ラストアルモ亦自ラ制限アリ即チ職務外ノ官吏及ヒ常人ヲ指スナリ其職務  
 ニ在ルノ官吏ニ於テハ第二百二條ヲ以テ重罪輕罪ノ現行犯アルコトヲ知リタル時ハ令狀又ハ  
 命令ヲ待タズシテ被告人ヲ逮捕セサル可ラサルノ義務責任ヲ負ハセラレタレトモ今本條ノ  
 治〇第二百三條〇第二百四條〇第二百五條

人ハ重罪輕罪ノ現行犯アル場合ニ於テハ直チニ被告人ヲ逮捕スルヲ得ヘキノ權利ヲ與ヘラレタルモノニシテ其義務ヲ負ハセラレタルニ非ラサレハ其之ヲ逮捕スルト否トハ全ク本人ノ自由ニ在リ故ニ假令重罪輕罪ノ現行犯ヲ見スルノ不問ニ付スルモ敢テ之ヲ責ムルヲ能ハサルモノトス而シテ若シ之ヲ逮捕スルニ於テハ其明文中直チニトアルヲ以テ固ヨリ令狀又ハ命令ヲ待ツコ及ハサルモノトス若シ之ヲ待ツヘキモノトスルキハ其之ヲ逮捕スルノ權ヲ與ヘラレタルモ到底之ヲ逮捕スルヲ能ハサルナリ故ニ其之ヲ逮捕スルニ於テハ決シテ令狀又ハ命令ヲ待ツヲ要セサルヤ明文之レアルナシト雖モ亦判然タルノ法意ナリ

然ラハ何チ以テ斯ク常人ニマテ令狀又ハ命令ヲモナクシテ之ヲ逮捕スルノ權ヲ與ヘタルカ夫レ重罪輕罪ノ現行犯ハ社會ヲ害シタルヲ甚ダシク若シ之ヲ其儘マ見遁カスニ於テハ又他日社會ヲ害セシトコ八九ハ免レサル所ナリ去レハ社會ハ當ニ危險ヲ抱キ安キ心地ナカルヘシ故ニ社會ノ安心ヲ致サンカ爲メ重罪輕罪現行犯ノ逮捕權ヲ常人ニマテ與ヘ且ツ令狀又ハ命令ヲモ要セサルノ便ヲ與ヘタルナリ

第百六條 前條ノ場合ニ於テ被告人ヲ逮捕シタル者ハ之ヲ司法警察官ニ引致スルニシテ若シ引致スル事ヲ得サル時ハ自己ノ氏名職業住所及其逮捕ノ事由ヲ陳述シ假ニ之レヲ巡査ニ引致スルヲ得

被告人巡査ニ引渡シタル時ハ速ニ告訴又ハ告發ヲ爲スヘシ  
被告人又ハ巡査ハ逮捕ヲ爲シタル者ニ對シ共ニ官署ニ至ルヲ求ムルヲ得但逮捕ヲ爲シタル者ハ正當ノ事由アルニ非サレハ其求ヲ拒ムヲ得ス

重罪輕罪ノ現行犯アリタル場合ニ於テ其職務外ノ官吏及ヒ常人ハ敢テ之ヲ逮捕スヘキノ義務ナシト雖モ其之ヲ逮捕スルヲ許サレタル權ヲ以テ一旦被告人ヲ逮捕シ之ヲ司法警察官ニ引致スルヲ得スシテ之ヲ巡査ニ引渡シタル時ハ必ス速ニ告訴又ハ告發ヲ爲サ、ルヘラサルノ義務ヲ生スルナリ又其被告人ヲ逮捕シタル者故ナク巡査ノ同行ヲ肯セサル時ハ巡査ハ直チニ其逮捕者ヲ引致スルヲ得ルモノトス

○第二章 起訴(凡ニ節六條)

起訴トハ即チ其文字ノ如ク訴ヲ起スノ謂ニシテ其起訴ニ二種アリ曰ク社會ノ代人治○第百六條

タシテ公益ノ爲メ檢察官ノ行フモノ曰ク犯罪ニ因リ私益ノ爲メ直接ニ損害ヲ被ム  
リタル者自ラ之ヲ爲スモノ即チ是レナリ故ニ本章ヲ分チテ二節ト爲シ檢察官ノ起  
訴及ヒ民事原告人ノ起訴トセリ

○第一節 檢察官ノ起訴(凡三條)

本節ハ檢察官前章ニ定メタル捜査ヲ終リタル後ノ處分及ヒ公訴ヲ提起スルノ手  
續ヲ示シタルモノナリ

第七七條 檢事犯罪ノ捜査ヲ終リタル時ハ左ノ手續ヲ爲ス可シ

- 一 重罪ト思料シタル事件ニ付テハ豫審判事ニ豫審ヲ求ムヘシ
- 二 輕罪ト思料シタル事件ニ付テハ其輕重難易ニ從ヒ豫審ヲ求メ又ハ直チニ輕罪裁判所ニ  
其訴ヲ爲スヘシ
- 三 違警罪ト思料シタル事件ニ付テハ證據書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ違警罪裁判所檢察官ニ  
送致スヘシ
- 四 被告人ノ身分犯罪ノ種類又ハ場所ニ因リ其管轄ニ屬セサル者ト思料シタル事件ニ付テ

ハ之ヲ管轄裁判所檢察官ニ送致スヘシ  
被告事件罪ト爲ラス又ハ公訴受理ス可カラサル者ト思料シタル時ハ起訴ノ手續ヲ爲スヘカ  
ラス

△參看 明治十五年三月二十七日司法省丙第十一號達

今般太政官ヨリ別紙ノ通御達相成候條此旨相達候事

勅任官禁錮ノ刑ニ該ルヘキ罪ヲ犯シ及ヒ奏任官華族帶勳有位ノ者禁錮以上ノ刑ニ該ルヘキ  
罪ヲ犯シタル時ハ當該檢察官ヨリ司法卿ニ具狀シ司法卿其事由ヲ奏問シテ處分スヘシ

但現行犯罪ニ係ル者ハ處分シテ後ニ奏問スルコトヲ得此旨相達候事

本條ハ頗ル錯雜セリト雖モ能ク之ヲ熟讀スルコト於テハ敢テ註釋ヲ要セス

第八八條 前條ノ場合ニ於テ被告事件告訴ニ係ル時ハ檢事ヨリ其處分ヲ被害者ニ通知ス可  
シ

本條ハ敢テ註釋ヲ要セス

第九九條 檢事豫審ヲ求ムル時ハ証憑及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ送致シ且臨檢ス可キ  
治○第七七條○第八八條○第九九條

場所逮捕ス可キ人名及ヒ原被ノ証人ト爲ルヘキ者ヲ指示スヘシ

本條モ亦敢テ註釋ヲ要セス

○第二節 民事原告人ノ起訴(凡三條)

本節ハ敢テ註釋ヲ要セス

第一百十條 重罪輕罪ノ被害者公訴ニ附帶シテ私訴ヲ爲サントスル時ハ告訴ト共ニ申立テ又ハ告訴ヲ爲シタル後其旨ヲ豫審判事ニ申立ツ可シ

豫審判事直チニ被害者ヨリ民事原告人ト爲ルヘキノ申立テ受ケタル時ハ檢察官ノ起訴ナシト雖モ公訴私訴ヲ併セテ受理シタル者トス

豫審判事ハ何レノ場合ニ於テモ直チニ被害者ヨリ民事原告人ト爲ルヘキノ申立テ受ケタル時ハ其旨ヲ檢事ニ通知スヘシ

本條ハ私訴ト告訴トノ別ヲ示サハ則チ足レリ其所謂告訴トハ被害者ニ於テ其犯罪ニ因リ損害ヲ被リタルコトヲ告ケ訴フルニ止マリ敢テ損害ノ賠償贖物ノ返還ヲ要求セサルモツテ云フナリ然ルニ被害者ニ於テ其損害ヲ被リタルコトヲ告ケ訴フルト共ニ損害ノ賠償贖

物ノ返還ヲ要求セントスル時ハ私訴ニシテ即チ稱シテ民事原告人ト云フナリ

第一百一十條 被害者ハ公訴ノ本案ニ付キ始審終審ノ裁判言渡アルマテ何時コテモ私訴ヲ爲

ン若シハ其要ムル所ヲ變更スルコトヲ得

又私訴ノ願下ヲ爲シタル後更ニ其申立テ爲シ若クハ其要ムル所ヲ變更スルコトヲ得

世ノ論者ハ勸モスレハ以テ犯罪人ヲ寬典ノ處分ニ及ヒ之ヲ保護スルヲ以テ自由ノ爲メ或

ハ民權ノ爲ナリト云ヒモ予輩ハ世人ト其意見ヲ異ニシ被害者ニ厚キ保護ヲ與ヒ却テ其犯

罪人ニハ餘リ寬典ノ措置ニ及ハサルヲ以テ其自由ノ爲メ或ハ民權ノ爲メナリト信スルナ

リ何トナレハ被害者ハ固ト良民ナリ然ルニ犯罪人即チ暴民ノ爲メニ害ヲ被ムリ且ツ之レ

ニ加フルニ法律ノ保護ヲ加ヒラレサレハ則チ害ヲ被ムリタル上ニ又害ヲ被ムルニ至ル可

ケレハナリ且ツ夫レ犯罪人ヲ處スルニ寬典ノ處分ヲ以テセハ則チ其犯罪人ヲ保護セタル

分量丈ケハ被害者ノ保護ヲ欠カサルヲ得ス實ニ被害者ノ保護ヲ欠キタルノ結果ナリ然ル

ニ今本條被害者ノ權利ヲ保護スル斯クマテニ厚キハ實ニ予輩ノ大ニ贊成ヲ表スル所ナリ

第一百十二條 被害者ハ代人ニ委任シテ私訴ヲ爲シ又ハ其願下若クハ棄權ヲ爲スコトヲ得

治○第一百十條○第一百一十條○第一百十二條

被害者無能力ナル時、法律ニ定メタル代人之ヲ爲スヘシ

本條ハ敢テ註釋ヲ要セス

第三章 豫審(凡十節百二十一條)

豫審トハ即チ其文字ノ如ク本判ニ先チテ豫メ審ムルモノニシテ俗ニ所謂下調ト云フモノナリ

第百十三條 現行ノ重罪輕罪ヲ除クノ外豫審判事ハ前章ニ定メタル規則ニ從ヒ檢事又ハ民事原告人ノ請求アルニ非サレバ豫審ニ取掛ルコトヲ得ス此規則ニ背キタル時ハ其請求ヨリ以前ニ係ル手續ノ効ナカル可シ

裁判官ハ告ナクシテ理ス可クセラルハ治罪法ノ一大原則ナリ故ニ本條斯ハ規定シタルナリ  
第百十四條 豫審判事ハ重罪輕罪ニ付キ直チニ告訴又ハ告發ヲ受ケタル時ハ召喚狀ヲ以テ被告人ヲ呼出シ之ヲ訊問スルコトヲ得若シ引續キ取調ヲ爲ス可キ者ト思料シタル時ハ其事件ヲ檢事ニ送致ス可シ

本條ハ敢テ註釋ヲ要セス

第百十五條 豫審判事ハ告訴告發ノ事件急速ヲ要スル時ハ直チニ被告人ニ對シ勾引狀ヲ發シ又ハ訊問シタル後勾留狀ヲ發スルコトヲ得此場合ニ於テハ速ニ其旨ヲ檢事ニ通知シ且証憑及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ送致ス可シ

若シ其通知ヲ爲シタルヨリ一日内ニ檢事起訴ヲ爲スノ妨礙ト爲ルコトナカル可シ

本條ハ少シク錯雜セリト雖モ能ク熟讀スルニ於テハ敢テ註釋ヲ要セス

第百十六條 被告人所在ノ地ノ豫審判事直チニ告訴告發ヲ受ケ又ハ檢事ヨリ其送致ヲ受ケ被告事件急速ヲ要スル時ハ通常ノ規則ニ從ヒ被告人ノ訊問又ハ檢証處分ヲ爲シタル後証憑及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ犯罪ノ地ノ豫審判事ニ送致ス可シ

若シ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ勾留狀ヲ以テ被告人ヲ送致スルコトヲ得

本條モ亦同シク少シク錯雜セリト雖モ能ク熟讀スルニ於テハ敢テ註釋ヲ要セス

第百十七條 檢事ハ豫審中何時ニテモ豫審判事ニ請求シテ訴訟書類ヲ檢閱スルコトヲ得但二十四時内ニ還付ス可シ

又必要アリトスル處分ニ付キ臨時其請求ヲ爲スコトヲ得

治○第百十三條ヨリ○第百十七條マテ

本條若シ檢事ノ訴訟書類ヲ檢閱スルノ時間ヲ制限セザレハ假令數月若ハ數年之ヲ檢閱スルノ時間ニ費サル、モ法律ハ之ヲ責ムルコトヲ得ス故ニ本條但書ヲ以テ其時間ヲ制限シタルナリ

〇第一節 令狀(凡二十五條)

令狀ニ四種アリ曰ク召喚狀曰ク勾引狀曰ク収監狀即チ是レナリ而シテ召喚狀ハ隨意ニ出頭セシムルモノニシテ勾引狀ハ公力ヲ用ヒテ之ヲ引致スルモノナリ勾留狀及ヒ収監狀ハ全ク被告人ノ自由ヲ停止スルモノナリ

第百十八條 豫審判事ハ檢事又ハ民事原告人ノ起訴ニ因リ重罪輕罪ノ事件ヲ受理シタル時ハ被告人ニ對シ先ツ召喚狀ヲ發ス可シ但召喚狀ノ送達ト被告人出廷トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫アル可シ

召喚狀ニ因リ出廷シタル被告人ハ即時ニ之ヲ訊問ス可シ又遲クトモ出廷ノ日ヲ過クルコトヲ得ス  
二十四時ヲ起算スルハ判事令狀ヲ發シタル時ヨリスルコト非ラヌシテ本人ニ令狀ヲ下附シ

若クハ本人ノ住所ニ令狀ヲ送達シタル時ヨリ起算スルモノナリ故ニ令狀ヲ認ムルノ際能ク心算シ此令狀ヲ書終ルハ何時頃ニシテ之ヲ被告人ニ送達スル迄ハ凡ソ何時間ヲ費ス然レハ其レヨリ二十四時ヲ經過スルノ日時ハ何日ノ何時頃ナリト腹計シタル上ニテ「右云々ノ事件ニ付訊問ノ筋有之何月何日時當裁判所ニ出頭可致者也」ト記スルニ注意ス可キモノトス

第百十九條 豫審判事ハ召喚狀ヲ受ク可キ被告人其管轄地内ニ住セサルキハ訊問ス可キ條件ヲ明示シテ被告人所在ノ地ノ豫審判事ニ其處分ヲ囑託スルコトヲ得

本條ハ敢テ註釋ヲ要セス  
第百二十條 豫審判事ハ召喚狀ヲ受ケタル被告人其日時ニ出廷セサルキハ勾引狀ヲ發スルコトヲ得

召喚狀ヲ受ケタル被告人其日時ニ出廷セサルキハ勾引狀ヲ發ス可キコト固ヨリ當然ナリト雖モ若シ豫審判事ヨリ先キニ發シタル召喚狀ノ當初之ヲ認ムルコト當リ凡ソ何日ノ何時ニ送達ス可シト豫定シタルモノ案ニ相違シテ數時間ヲ經過シタルノ後チ之ヲ送達シタルニ

治〇第百十八條〇百第十九條〇第百二十條

由リ被告人ハ其送達ノ時二十四時ヲ經過シテ後チ出廷セント期シタルニ豫審判事ハ其令  
狀ニ命シタルキニ出廷セサルヲ以テ一時間ヲ經過シタルノ後チ更ニ勾引狀ヲ發シタルノ  
場合ニ於テハ之ヲ如何ニ解ス可キカ予輩ハ官吏ノ錯誤ヲ以テ濫リニ勾引スルコトヲ得サル  
者ト解スルナリ何トナレハ其時ハ尙ホ第十八條ニ規定シタル二十四時間内ニ在レハナリ

第二百一十一條 豫審判事ハ左ノ場合ニ於テ直チニ勾引狀ヲ發スルコトヲ得

- 一 被告人定リタル住所アラサルキ
- 二 被告人罪證ヲ湮滅シ又ハ逃亡スルノ恐アルキ
- 三 被告人未遂罪又ハ脅迫罪ヲ犯シ仍ホ其目的ヲ遂ケントスルノ恐アルキ

本條ハ敢テ註釋ヲ要セス  
第二百二十二條 勾引狀執行ノ命ヲ受ケタル者ハ其令狀ヲ發シタル豫審判事ニ被告人ヲ引致

ス可シ

勾引狀ヲ以テ引致シタル被告人ハ四十八時内ニ之ヲ訊問スヘシ若シ其時間ヲ經過スルキハ  
勾引狀ヲ發スルニ非サレハ當然之ヲ釋放スヘシ

勾引狀執行ノ命ヲ受ケタル者ハ巡查ナリ其他敢テ註釋ヲ要セス

第二百二十三條 勾引狀ヲ發シタル前被告人既ニ豫審判事ノ管轄地外ニ在ルキハ被告人ヨリ  
其所在ノ地ノ豫審判事ノ取調ヲ求ムルコトヲ得其求ヲ受ケタル豫審判事ハ假ニ被告人ヲ勾留  
シ速ニ勾引狀ヲ發シタル豫審判事ニ其旨ヲ通知スヘシ

本條ハ敢テ註釋ヲ要セス

第二百二十四條 前條ノ場合ニ於テ勾引狀ヲ發シタル豫審判事ハ被告人ヲ勾留シタル豫審判  
事ニ訊問ノ條件ヲ明示シテ其處分ヲ囑託シ又ハ前ニ發シタル勾引狀ヲ以テ被告人ヲ送致ス  
ヘキコトヲ請求スヘシ

其囑託ヲ受ケタル豫審判事ハ被告人ヲ訊問シタル後其旨ヲ勾引狀ヲ發シタル豫審判事ニ通  
知シ其意見ヲ聽キ被告人ヲ放免シ又ハ前ニ發シタル勾引狀ヲ以テ管轄豫審判事ニ送致スヘ  
キノ言渡ヲ爲スヘシ

本條モ亦敢テ註釋ヲ要セス

第二百二十五條 豫審判事ハ召喚狀又ハ勾引狀ヲ受ケタル被告人疾病其他正當ノ事由アリテ

治○第二百廿一條ヨリ○第二百廿五條マテ



四〇一

令狀ニ應ズル能ハサルコトヲ証明シタルハ被告人ノ所在ニ就テ之ヲ訊問スルコトヲ得若シ被告  
告人其管轄地外ニ在ル時ハ其所在ノ地ノ豫審判事ニ訊問ノ事ヲ囑託ス可シ

本條ハ頗ル寛大ノ法ナリト雖モ亦實際己ムヲ得サルモノアレハナリ

第二百二十六條 勾留狀ハ被告人逃亡シ又ハ第二百二十三條ノ場合ヲ除クノ外被告人ヲ訊問シ  
タル後禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料スルニ非サレハ之ヲ發スルコトヲ得ス

本條ハ敢テ註釋ヲ要セス

第二百二十七條 豫審判事ハ勾引狀ヲ執行シタルヨリ十日ヲ過クル時ハ之ヲ收監狀ニ換ヘ若  
クハ第二百十九條ノ規則ニ從ヒ被告人ヲ責付ス可シ

檢事ハ被告人ヲ責付スルコトナク更ニ十日間之ヲ勾留ス可キコトヲ豫審判事ニ求ムルヲ得  
本條モ亦敢テ註釋ヲ要セス

第二百二十八條 收監狀ハ既ニ取掛リタル豫審ノ手續ヲ檢事ニ通知シ且其意見ヲ聽キタル後  
ニ非サレハ之ヲ發スルコトヲ得ス

本條モ亦同シク註釋ヲ要セス

第二百二十九條 收監狀ニハ左ノ條件ヲ記載ス可シ

一 被告事件ノ概略及ヒ加重減輕ノ模様アル時ハ其概略

二 其罪ヲ罰ス可キ法律ノ正條

三 檢察官ノ意見ヲ聽キタルコト

本條モ亦同ク註釋ヲ要セス

第二百三十條 總テ令狀ニハ被告事件及ヒ被告人ノ氏名職業住所ヲ記載ス可シ但召喚狀ヲ除  
クノ外其氏名分明ナラサル時ハ容貌體格等ヲ明示ス可シ

又令狀ニハ之ヲ發スルノ年月日時ヲ記載シ豫審判事及書記署名捺印スヘシ

勾引狀勾留狀ハ巡查ヲシテ之ヲ執行セシム

勾引狀勾留狀及ヒ收監狀ノ三者ハ若シ其氏名公明ナラサル時ハ其容貌體格等ヲ明示シ以

テ之ヲ發スルコトヲ得ルモ召喚狀ハ其氏名分明ナラサルニ於テハ之ヲ發スルコトヲ得サルモ

トス

第三百三十一條 召喚狀ハ第二百二十三條ノ規則ニ從ヒ書記局所屬ノ使丁ヲシテ被告人又ハ其住

治〇第三百廿六條ヨリ〇第三百三十一條マテ

五〇一

所ニ之ヲ送達セシム

六〇一

召喚狀ハ公力ヲ用フ可キモノニ非ラサルヲ以テ書記局所屬ノ使丁ヲシテ之ヲ送達セシメ  
敢テ巡査ヲシテ之ヲ執行セシメサルモノトス

第三百二十二條 勾引狀勾留狀収監狀ハ日本全國ニ於テ之ヲ執行ス但時宜ニ因リ正本數通ヲ  
作り巡査數人ニ分付スルコトアルヘシ

前項ノ令狀ヲ執行スルコトハ被告人ニ正本ヲ示シ其贖本ヲ下付スヘシ此場合ニ於テハ第二十  
三條第二項第四項ノ規則ニ從フ

勾引狀勾留狀及ヒ依監狀ノ三者ハ假令其豫審判事ノ管轄地内ニ非ラスト雖モ日本ノ  
地内ニ於テハ何レノ地ニテモ之ヲ執行スルコト得ルモノニシテ且ツ又時宜ニ因リ正本數  
通ヲ作り巡査數人ニ分付スルコトアルモノトシタルハ是レ犯罪人ヲシテ法網ヲ脱セシムル  
ノ弊ナカラシメカ爲メナリ若シ夫レ豫審判事ノ管轄内ニアラサレハ以テ此等ノ令狀ヲ發ス  
ルコト能ハス又巡査一人ニアラサレハ以テ之ヲ付スルコト能ハストセハ之レカ爲メ犯罪人ハ  
容易ニ其刑ヲ遁ガルコトヲ得ヘシ故ニ本條ヲ設ケテ此等ノ弊ヲ防ケリ

令狀執行ノ命ヲ受ケタル巡査制服ヲ着ケ白晝被告人ノ處在ニ到ラントスレハ被告人ハ已  
レノ逮捕サルヲ覺ヒ早クモ身ヲ隠シ終ニ令狀執行スルコト能ハサル事アルヘシ依テ斯カ  
ル場合ニ於テハ令狀執行ノ命ヲ受ケタル巡査ハ時機ニ因リ制服ヲ脱シ私服ヲ着シ執行ス  
ルモ妨ケナキモノトス是レ明治十五年二月二日付ヲ以テ石川縣ノ伺ニ於テ同年同月十五  
日ニ指令アリシ所ナリ

第三百二十三條 令狀執行ノ命ヲ受ケタル巡査ハ被告人其家宅若クハ他人ノ家宅ニ潛匿シタリ  
ト思料シタル時ハ其地ノ戸長又其差支アルキハ隣佑二名以上ノ立會ヲ求メ之ヲ搜索スヘシ  
巡査ハ被告人ヲ發見シタルト否ト拘ハラズ搜索調書ヲ作り立會人ト共ニ署名捺印ス可シ  
家宅搜索ハ日出前日没後之ヲ爲スコト得ス

△參看 明治十四年九月二十日第四十六號布告

治罪法第三百二十三條第三項ニ家宅搜索ノ制限有之候得共芝居人寄席飲食店湯屋遊船宿待合  
茶屋ノ類ハ日出前日没後ト雖モ其營業ヲ爲ス時間又旅籠屋賃坐敷ハ日出前日没後ニ拘ハラ  
ズ搜索致シ苦シカラス

治〇第百卅二條〇第百卅三條

七〇一

家宅ハ人ノ城郭ニシテ得テ侵ス可ラサルモノナレハ巡査ヲシテ家宅搜索ヲ爲サシムルハ  
頗ル越權ニ涉ルカ如シト雖モ若シ之ヲ許サレハ其執行ノ結果ヲ得ルイ甚々難カル可ク  
之レカ爲メ犯罪人ヲシテ容易ニ逃亡スルコトヲ得セシメ以テ社會ハ永ク其危險ヲ抱カサル  
ヲ得ス是レ豈ニ法律ノ期スル所ナランヤ故ニ家宅ヲ搜索シテ社會ノ實利トナラハ勢ヒ已  
ムヲ得スシテ之ヲ爲スモ亦社會即チ法律ノ權利ナリ然レモ家宅ハ固ト人ノ城郭ノコトナレ  
ハ鄭重ニ鄭重ヲ加ヒ其地ノ戶長若クハ隣佑二名以上ノ立會ヲ要シ且ツ日出前日没後ハ之  
ヲ爲スコトヲ禁セリ

第百三十四條 豫審判事ハ被告人他ノ管轄地内ニ潜匿シタルコトヲ知リ又ハ潜匿シタリト思  
料シタル場合ニ於テ被告事件急速ヲ要スルキハ巡査ニ令狀ヲ帶行セシムルコトヲ得

巡査ハ被告人所在ノ地ノ豫審判事檢事又ハ司法警察官ニ令狀ヲ示シテ即時ニ執行ヲ求ムヘ  
シ

本條ノ明文「被告事件急速ヲ要スル時ハ巡査ニ令狀ヲ帶行セシムルコトヲ得」トアルヲ以テ  
若シ其急速ヲ要セサル場合ニ於テハ巡査ヲシテ他ノ管轄内ニ令狀ヲ帶行セシムルヲ許サ

ハルモノ、如シ然ルニ第百三十二條ニ於テ令狀ハ日本全國ニ於テ執行シ得キモノト指  
定シタル原則ニ悖ルモノ、如シ故ニ本條ニ就テハ種々ノ伺指令等モアレモ未ダ予輩ノ了  
解スルコト能ハサル所ナレハ予輩ハ充分ニ之ヲ註解スルコトヲ得サルナリ

第百三十五條 豫審判事ハ被告人所在ノ地ヲ覺知スルコト能ハサルキハ各控訴裁判所檢事長  
ニ被告人ノ人相書ヲ送致シ捜査及ヒ逮捕ヲ爲ス可キコトヲ請求スルヲ得

請求ヲ受ケタル檢事長ハ其管轄地内ノ檢事ヲシテ捜査及ヒ逮捕ノ處分ヲ爲サシムヘシ  
△參看 明治十五年二月二十三日司法省丁第十四號達

治罪法第百三十五條ニ從ヒ豫審判事ヨリ各控訴裁判所檢事長ニ被告人ノ人相書ヲ送致若ク  
ハ其檢事長ヨリ管轄地内ノ捜査及ヒ逮捕ノ處分ヲ命スル時ハ本年本省丙第六號達第一號書  
式ニ照依シテ人相書ヲ作り其命ヲ受ケタル檢事ハ第二號書式ニ照依シテ逮捕狀ヲ作ルヘシ  
此旨相達候事

△明治十五年二月十四司法省丙第六號達  
始審裁判所檢事ヨリ既決囚ノ逃走シタル者ニ對シ逮捕狀ヲ發スル手續ハ左之通心得可シ此  
治第百卅四條○第百卅五條

旨相達候事

第一條 逮捕狀ニハ典獄ノ報告書ニ依リ第二號書式ニ準シ逃走シタル囚徒ノ本籍身分氏名人相書ヲ詳記スヘシ但管轄地ノ内外ニ拘ハラス急遽ノ際巡査ヲシテ令狀ヲ帶行セシムル時ハ人相ヲ記載セサルモ妨ケナシ

第二條 管轄地内ハ令狀ハ警察署又ハ警察分署ニ送致シテ逮捕ノ處分ヲ爲サシムヘシ

第三條 管轄地外ノ第一號書式ニ準シ人相書ヲ作り之ヲ始審裁判所檢事ニ送致シテ逮捕ノ處分ヲ囑託スルコト得

囑託ヲ受ケタル檢事ハ該人相書ニ依リ自己ノ氏名ヲ以テ更ニ逮捕狀ヲ作り之ヲ管轄地内ノ警察署又ハ警察分署ニ配付シテ逮捕狀ヲ作り之ヲ管轄地内ノ警察署又ハ警察分署ニ配付シテ逮捕ノ處分ヲ爲サシムヘシ

第四條 司法警察官ニ於テ逮捕シタル囚徒ヲ受取タル時ハ之ヲ管轄檢事ニ送致シ檢事ハ其旨ヲ囑託ヲ爲シタル檢事ニ照會シ別段ノ事由アルニ非ラサレハ逮捕ノ地ニ於テ刑ノ執行ヲ爲スヘシ

(書式略ス)

本條即チ治罪法第三百二十五條ノ意義ハ參看達ヲ以テ之ヲ知ルコト得可シ但シ檢事長ヨリ捜査及ヒ逮捕ノ指揮ヲ受ケタル場合ニ於テ捜査上其名ヲ取押ヘ果シテ人相書ニ符合シタル者ト認メタルハ別ニ令狀ヲ要セス其人相書ヲ以テ令狀同一ノ効力ヲ有シタルモノト視做シ直チニ逮捕スルコト得ルモノトス是レ明治十五年一月二十七日付ノ京都輕罪裁判所檢事ノ請訓ニ於テ同年二月十五日ニ内訓アリシ所ナリ

第三百二十六條 陸海軍在營ノ軍人軍属ニ對シ令狀ヲ發シタル時ハ所屬長官ニ令狀ヲ示ス可シ長官ハ己ムコトヲ得サル差支アルコト非サレハ本人ヲシテ速ニ令狀ニ應ゼシム可シ其行軍ノ際亦同シ

本條ニ於テ令狀執行人及ヒ其所屬長官共ニ義務アリ即チ令狀執行人ハ其所屬長官ニ令狀ヲ示シ豫メ其差支ノ有無ヲ照會シ之レカ承認ヲ得タル後ヲ始メテ之ヲ執行セサル可ラサルノ義務アリ又長官ハ己ムコトヲ得サル差支アルコト非ラサレハ本人ヲシテ速ニ令狀ニ應ゼシメサル可ラサルノ義務アリ

第三百二十七條 拘留狀又ハ収監狀ヲ受ケタル被告人ハ速ニ其令狀ニ記載シタル監倉ニ引致

治○第百卅六條○第百卅七條

ス可シ若シ其監倉ニ引致スルコト能ハサル時ハ假ニ最近ノ監倉ニ引致スルコト得  
何レノ場合ニ於テモ監倉長ハ令狀ヲ檢閲シテ被告人ヲ受取り其証書ヲ渡ス可シ

被告人ヲ令狀ニ記載シタル監倉ニ引致スルコト得ルトアリ此場合ニ於テハ律ニ明文ナシ  
ト雖モ裁判所警察署等ニ設ケタル留置場ニ勾引スルモ苦シカラサルモノトス是レ茨城縣  
ノ伺ニ於テ指令アリシ所ナリ

第三百二十八條 令狀執行ノ命ヲ受ケタル巡查ハ之ヲ執行シタルコト又執行スルコト能ハサル時  
ハ其事由ヲ令狀ノ正本ニ記載スヘシ

巡查ハ令狀執行ニ關スル書類ヲ書記局ニ差出シ書記ハ其受取証書ヲ渡スヘシ

本條ハ令狀執行ノ命ヲ受ケタル巡查ノ責任ヲ終ルノ方法ヲ示シタルモノニシテ敢テ註釋  
ヲ要セス

第三百二十九條 勾留狀又ハ收監狀ヲ受ク可キ被告人既ニ監倉若クハ獄舎ニ在ル時ハ書記ヨ  
リ之ヲ本人ニ送達シ其旨ヲ正本及ヒ謄本ニ記載スヘシ

被告人自由社會ニ在ル時ハ勢ニ由リ公力ヲ要スルノ場合アルヲ以テ巡查ヲシテ之ヲ執行

セシムルモ既ニ監倉若クハ獄舎ニ在ル時ハ俗ニ所謂袋ノ鼠コテ敢テ公力者ニ令狀ヲ交付  
スルノ必要ナシ故ニ此場合ニ於テハ書記ヨリ直チニ之ヲ本人ニ送達シ其旨ヲ正本及ヒ謄  
本ニ記載スルヲ以テ足レリトス

第三百四十條 密室監禁ノ場合ヲ除ク外被告人ハ監獄則ニ從ヒ官吏ノ立會ニ依リ其親屬故  
舊又ハ代言人ニ接見スルコト得

書翰書籍其他ノ書類ハ豫審判事ノ檢閲ヲ經タル後ニ非サレハ被告人ト外人ト之ヲ授受スル  
コトヲ許サズ但豫審判事ハ其書類ヲ留置クコト得

△參看 監獄則

第三十九條 接見室ハ監倉ノ首部ニ設ケ其壁面ニ方三尺ノ口ヲ開キ之ニ縱横ノ格子ヲ嵌メ  
格子ヨリ三尺許ヲ距リ柵檻ヲ設ケ在監人ハ格子内ニ立タシメ外人ハ格子外ノ柵檻ニ倚ラシ  
ムヘシ但懲役人ノ接見室ハ此例ヲ用ヒス

第八十七條 在監人ニ接見セント請フ者アルハ典獄先ツ之ニ面接ノ其氏名族籍營業等ヲ  
訊ヒ其緣由ヲ詳悉シヒムヲ得サルノ事狀アリテ形跡ノ疑フヘキコトナキハ之ヲ許シ看守長

治○第百卅八條ヨリ○第百四十條マテ

看守並莅テ面會セシム但密室ニ在ル者ハ接見ヲ許サス

四一 面會ノ時間ハ三十分時ヲ過ルヲ得ス若シ面會ヲ請ヒシ旨趣ニ違フ談話ヲナシタルハ直ニ之ヲ停止ス

第八十九條 未決者及ヒ懲役人ニ其親族故舊ヨリ書籍用紙衣服臥具又ハ飲食物（炊烹ヲ要セサルモノニシテ一人一食ノ量ニ限ル）ヲ贈ラント請フキハ之ヲ許ス但酒又ハ煙草其他攝生ニ害アルモノハ此限ニ在ラス

本條即チ治罪法第四百十條ノ手續ハ參看監獄則ノ三ヶ條ヲ以テ之ヲ知ルヲ得可シ故ニ予輩ハ敢テ贅釋ヲ施サス

第四百十一條 豫審判事ハ被告事件禁錮以上ノ刑ニ該ルヘキ者ニ非スト思料シタル時ハ豫審中何時ニテモ勾留狀又ハ収監狀ヲ取消スヘシ但収監狀ヲ取消スキハ豫メ檢察官ノ意見ヲ聽ク可シ

勾留狀及ヒ収監狀ハ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料スルニ非ラサレハ以テ之ヲ發スルヲ得サルモノトスルハ既ニ過條ノ規定スル所ナリ故ニ先キニ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ

者ト思料シタルコ付キ此等ノ令狀ヲ發シタルモ後チ又豫審中被告事件禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ニ非ラスト思料シタル時ハ豫審判事ハ其豫審中何時ニテモ勾留狀又ハ収監狀ヲ取消ス可キモノトス但収監狀ハ固ト既ニ取掛リタル豫審ノ手續ヲ檢事ニ通知シ且其意見ヲ聽キタル後ニ之ヲ發シタルモノナレハ之ヲ取消ス時モ亦豫メ檢察官ノ意見ヲ聽ク可キモノトス

第四百十二條 監倉ニハ刑法治罪法ヲ備置キ被告人ノ請求ニ從ヒ之ヲ貸與スヘシ

被告人ト雖モ其權利ノアル所ハ充分ニ之ヲ伸暢セシム可シ其法式要件及ヒ權利ノアルヲ知ラサルノ故チ以テ其冤ヲ含ミ枉チ蒙リシト感セシムルハ固ト法律ノ欲セサル所ナリ故ニ監倉ニハ刑法治罪法ヲ備置キ被告人ノ請求ニ從ヒ之ヲ貸與ス可キモノトス既ニ之ヲ貸與スルトシ被告人之ヲ見レハ又一方ニハ敢テ不理ノ上訴ヲ爲サ、ルノ利益アル可シ何トナレハ不理ノ上訴ヲ爲スハ固ト法律ヲ辨識セサルコ因レハナリ

○第二節 密室監禁（凡三條）

密室監禁ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル場合ニ於テ執行スルモノニシテ監獄治○第四百十一條○第四百十二條

則第三十八條ヲ以テ「密室ハ監倉ニ設ケ他人ト交通スルコトヲ得サレシムヘシ」ト  
規定セラレタリ今本節ハ該件ニ係ル總テノ手續ヲ示シタルモノナリ

第六十一  
第四百十三條 豫審判事ハ豫審中事實發見ノ爲メ必要ナリト思料シタルキハ檢事ノ請求ニ  
ヨリ又ハ職權ヲ以テ勾留狀若クハ收監狀ヲ受ケタル被告人ヲ密室ニ監禁スルノ言渡ヲナス  
コトヲ得

被告人ヲシテ共犯人及ヒ他ノ罪四ト雜居セシメ若クハ其親屬故舊代言人等ニ接見セシム  
ル時ハ犯罪ノ證據ヲ消滅シ或ハ其罪惡ヲ掩蔽セン爲メ故テ偽證ノ申立ヲ豫備シ或ハ其  
親屬故舊動モスレハ被告人ヲシテ裁判所ノ搜索スル所ノモノヲ隱匿セシムルコトヲ竊ニ教  
唆スルノ恐れアルヲ免レス故ニ豫審判事ハ豫審中事實發見ノ爲メ必要ナリト思料シタル  
時ハ檢事ノ請求ニ因リ又ハ自己ノ職權ヲ以テ勾留狀若クハ收監狀ヲ受ケタル被告人ヲ密  
室ニ監禁スルノ言渡ヲ爲スコトヲ得ルモノトス

第四百十四條 密室監禁ノ言渡ヲ受ケタル被告人ハ一名毎ニ之ヲ別室ニ置キ豫審判事ノ允  
許ヲ得ルニ非サレハ他人ト接見シ又ハ書類貨幣其他ノ物品ヲ受授スルコトヲ許サス

食物飲料藥餌其他監倉ヨリ給ス可キ物品ト雖モ監倉長ノ特ニ指名シタル者ヲシテ之ヲ給與  
セシム

本條ハ敢テ註釋ヲ要セス

第四百十五條 密室監禁ハ十日ヲ超過ス可カラス但十日毎ニ其言渡ヲ更改スルコトヲ得  
言渡ヲ更改スルキハ其事由ヲ裁判所長ニ報告スヘシ

豫審判事ハ十日間ニ少クトモ二度被告人ヲ訊問シ通常ノ規則ニ從ヒ調書ヲ作ルヘシ  
密室監禁ハ人身ノ自由ヲ束縛スルモノニシテ固ト已ムヲ得スシテ之ヲ用フル者ナレハ本  
條ヲ設ケテ其日ヲ制限シ又ハ之ヲ裁判所長ニ報告セシメ或ハ其怠慢ヲ防ク爲メ十日間ニ  
少クトモ二度被告人ヲ訊問シ通常ノ規則ニ從ヒ調書ヲ作ル可キモノト定ム

○第三節 證據(凡三條)

本條ハ敢テ註釋ヲ要セス

七十一  
第四百十六條 法律ニ於テハ被告事件ノ模様ニ因リ有罪ナルノ推測ヲ定ムルコトナシ  
被告人ノ白狀官吏ノ檢証調書證據物件証人ノ陳述鑑定人ノ申立其他諸般ノ徵憑ハ裁判官ノ  
治○第四百十三條ヨリ○第四百十六條マテ

判定ニ任ス

民事ニ於テハ法律上ノ推測ナルモノアリテ裁判官カ或ル事實ニ付キ其心證ヲ定ムルノ具ト爲ス可キモノ少ナカラスト雖モ刑事ニ於テハ犯罪ノ證據タル必ス直接ノモノニシテ且ツ豫審ニ由テ得タル所ノモノニ限ル故ニ唯タ或ハ事件ノ模様ヲ以テ有罪ナルノ推測ヲ定ムルコトナシ是レ民事ト刑事トハ其性質ヲ異ニスルコト因テ然ルナリ

第四百十七條 豫審判事ニ檢察官民事原告人被告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル證據徵憑ヲ集取ス可シ

佛以里伯斯氏曰ク夫レ證據ト證據トハ其能ク相類似スルヲ以テ世間之ヲ混用スル者多シト雖モ惟フニ此兩者ハ恰モ原因ノ結果ニ於ケルカ如シ即チ證據トハ證據人述フル所ノ口供若クハ文書中記スル所ノ事ニ就キ法ノ認定スル信任ナリ而シテ証トハ此ノ如ク如キ證據ヲ探討スル爲メ以テ其橋梁トスル所ニ過キサル者ニ蓋シ兩者一ナラサルヲ知ルコト足ル可シト是レ民事上ニ就テ論判シタルモノナリト雖モ刑事上ニ於テモ亦此別アルヲ知ル可シ今本條ニ證據徵憑トアルハ此別ニシテ其所謂徵憑ト云ヘルモノ即チ佛以里伯斯氏ノ所

謂証ト云フモノニ當ルナリ

第四百十八條 豫審判事臨檢家宅搜索物件差押又ハ被告人証人ノ訊問ヲ爲スニハ書記ノ立會ヲ必用トス書記ハ調書ヲ作り豫審判事ト共ニ署名捺印スヘシ

裁判所外ニ於テ急遽ノ際書記ノ立會ヲ得ルコト能ハサル時ハ立會人二名アルヲ要ス但監倉ニ就テ被告人ヲ訊問スル時ハ其監倉ノ官吏一名ヲシテ立會ハシムヘシ

前項ノ場合ニ於テハ豫審判事自ラ調書ヲ作り之ヲ讀聞カセ立會人ト共ニ署名捺印スヘシ書記又ハ立會人ナクシテ爲メタル處分ハ其効ナカルヘシ

本條ハ頗ル錯雜セリト雖モ其意義ヲ解スルハ唯タ熟讀ニアリテ敢テ註釋ニアラサルナリ故ニ予輩之ヲ贅セヌ

○第四節 被告人ノ訊問及ヒ對質(凡九條)

本節ハ敢テ註釋ヲ要セヌ

第四百十九條 豫審判事ハ先ツ被告人ヲ訊問スヘシ但檢証ヲ爲シ又ハ証人ヲ訊問スルニ付キ急速ヲ要スル時ハ此限ニ在ラス

治○第四百十七條○第四百十八條○第四百十九條



豫審判事ハ檢証處分ヲ圖キ先ツ被告人ヲ訊問セサル可ラスト定ムルモノハ若シ檢証處分  
 先キコシテ被告人ノ訊問ヲ後ニセハ或ハ爲メニ被告人ハ其間ノ猶豫ヲ以テ自己ノ罪跡  
 ヲ免レンカ爲メ詐欺若クハ過實ノ告訴ヲ爲シ以テ禍ヲ人ニ嫁セント欲スルノ恐ルヘキ惡  
 心ヲ出スナキヲ保シ難シ好シヤ此ノ如キノ甚クシキ惡心ヲ生スルナキモ先キノ惡事  
 ヲ隱蔽シ法官ヲ眩惑スルノナキヲ保シ難カル可シ又一方ニハ或ハ其嫌疑ノ原由錯誤等  
 出ルナキニ非ラス然ラハ先ツ被告人ヲ訊問スルコト於テハ其嫌疑ノ由テ來ル所ノ無根  
 ナルヲ辨駁シ事實ノ相違ナルヲ證明スルナリ又或ハ眞ノ犯罪人ナランコトハ彼ノ法網  
 ヲ遁レントスルノ惡心ヲ生スルノ暇ナキハ勿論之レカ爲メ其供述ハ嫌疑愈々正當ニシテ  
 確証ヲ得若クハ被告人直チニ其所爲ノ幾分ヲ白狀シテ大ニ事實ノ如何ヲ知ルコト容易ナラ  
 シムルノ利益アリ

然レモ其事件急速ヲ要スルモノナランニハ其檢証ヲ先キコセサレハ或ハ證據ヲ煙滅シ罪  
 蹟ヲ隱蔽スル等ノ恐レアルノ場合ナキニ非ラス例ヘハ積雲泥濘ノ中ニ踪痕ヲ印スルカ如  
 キ速ニ之ヲ檢証セサレハ忽チ踏破蹂躪若クハ降雨凍解ニ因リ原痕ヲ消滅スルノ恐レアリ

又慘烈ナル創傷ノ爲メ時コ死ニ向ヤトスル者アルカ如キハ則チ速ニ其供述ヲ聽カサレハ  
 終ニ其事實ヲ得ルヲ能ハサルニ至ルナラン故ニ此ノ如キ時ニ於テハ則チ前段ノ規則ヲ  
 墨守ス可キニ非ラス即チ一轉シテ檢証處分ヲ先ニシテ而シテ後チ被告人ヲ訊問ス可キ  
 モノトス是レ本條但書ノアル所以ナリ

第百五十條 豫審判事ハ被告人チノ其罪ヲ白狀セシムル爲メ恐嚇又ハ詐言ヲ用フ可カラズ  
 我邦治罪ノ改良本條ヲ以テ其最モ著シキヲ見ルナリ何ソヤ彼ノ最モ忌ム可キ拷問ハ固ニ  
 リ恐嚇又ハ詐言ヲ用ヒ被告人ノ精神ニ拷訊ヲ施スモ尙ホ且ツ之ヲ禁セリ抑モ恐嚇又ハ詐  
 言ヲ用フルニ於テハ爲メニ有罪者ヲシテ早ク白狀セシムルノ利アル可シト雖モ或ハ之レ  
 カ爲メ無辜ノ良民チ有罪ニ陷ラシムルノナキヲ保シ難シ否ナ隨分ノレアル可ヤ所ナリ  
 夫レ法律ハ寧ロ百人ノ有罪者ヲシテ無罪放免ノ僥倖ヲ得セシムルモ決シテ一人ノ無罪者  
 チシテ有罪被刑ニ陷ラシムルノナカラシム可シ實ヲ得ルコトハ姑ク實ヲ以テセヨ決シテ實  
 チ得ルニ虚ヲ以テスルナカレ然ルニ若シ恐嚇又ハ詐言ヲ用フルニ非ラサレハ以テ其實  
 チ得難シトスル者ハ未タ其職務ニ堪ヘサル所ノ者ナリ若シ夫レ其職務ニ堪ヘル所ノ者ナ  
 治〇第百五十條

テシニハ豈ニ其レ恐嚇又ハ詐言ヲ用テ其ヲ要セシヤ尋常ノ口舌以テ充分ニ之ヲ白狀セシムルコトヲ得ン真ノ惡漢ナレハ何ッ其レ法官ノ恐嚇又ハ詐言ヲ意トセシヤ其之ヲ意トセサルハ古來ノ實歴ニ徴シテ知ル所ナリ然ルニ良民ハ常ニ法廷ニ出テタルコトナキヲ以テ偶マ錯誤ニテ法廷ニ出ツルコトアラハ其心情果シテ如何實ニヒシク然タルモノアラシ此時ニ當テヤ法官ノ音聲少シク高キモ尙ホ且ツ胸ニ答ヘ思ハズ知ラス其オキ罪ヲモ白狀スルニ至ルハ古來少ナシトセス是レ本條ヲ設ケタル所以ニシテ實ニ金玉ノ法條ナリト謂フヘシ

第五百十一條 書記ハ訊問及ヒ陳述ヲ錄取シ被告人ニ之ヲ讀聞カスヘシ

豫審判事ハ被告人ニ其陳述ノ相違ナキヤ否ヲ問ヒ署名捺印セシムヘシ若シ署名捺印スルコト能ハサル時ハ其旨ヲ附記スヘシ

書記ハ本條ノ式ヲ履行シタルコトヲ記載シ豫審判事ト共ニ署名捺印ス可シ

△參看 明治十年十二月司法省丙第十六號達

治罪法中犯人証人等押印ノ條々實印無之者ニ限り從來慣例ニ依リ捺印爲致候儀ト心得可シ此旨相違候事

本條 敢テ註釋ヲ要セズ

第五百十二條 被告人其陳述ニ付キ變更増減スヘキコトヲ申立タル時ハ更ニ訊問ヲ爲シ前條ノ規則ニ從ヒ其訊問及ヒ陳述ヲ錄取シ之ヲ讀聞カセ署名捺印スヘシ

本條モ亦敢テ註釋ヲ要セズ

第五百十三條 被告人ハ陳述書ノ謄本ヲ求ムルコトヲ得

被告人ハ前後ノ陳述ノ齟齬スルヲ防シ爲メ陳述書ノ謄本ヲ請求スルコトヲ得ルモノトス而シテ被告人辯護ノ權ハ之ヲ妨礙ス可ラサルモノナルヲ以テ其請求アリタルキハ必ス之ヲ下付セサル可ラサルモノトス

第五百十四條 豫審判事ハ被告人ノ共犯ナルコト人違ナキヲ其他事實ヲ發見ス可キ一切ノ模様ヲ証スル爲メ必要ナリトスル時ハ被告人ト他ノ被告人証人又ハ其他ノ者ト對質セシムルコトヲ得

通常豫審ハ秘密ヲ主義トスレバ其事實ヲ發見スルニ必要ナリトスルキハ或ハ互相ヲシテ陳述對論セシムルコトヲ得ルモノトス

治○第五百十一條ヨリ○第五百十四條マテ

四二一

第四百五十五條 書記ハ對質人ノ陳述及ヒ對質ニヨリ生スル一切ノ事件ヲ錄取シ對質人ニ其對質ニ關スル部分ヲ讀聞カス可シ

第四百五十一條第四百五十二條ノ規則ハ對質ニ付テモ亦之ヲ適用ス

對質ニ關スル一切ノ問答ハ第四百五十一條ノ規則ニ從ヒ書記之ヲ錄取整頓ス可キモノトス而シテ其對質人ニハ各其關係アル部分ノミヲ讀聞カセ其關係ナキ部分ニ及ハス蓋シ豫審處分ハ其關係外ノ人ニ就テハ秘密ヲ要スレハナリ

第四百五十六條 被告人又ハ對質人聾ナル時ハ書面ヲ以テ問ヒ啞ナル時ハ書面ヲ以テ答ヘシ

若シ聾者啞者文字ヲ知ラサル時ハ通事ヲ命ス可シ

被告人又ハ對質人國語ニ通セサル時亦同シ

被告人又ハ對質人聾ナル時ハ書面ヲ以テ問ヒ啞ナル時ハ書面ヲ以テ答ヘシト書シテ其問アルモノハ答ナク其答アルモノハ問ナキハ共ニ文ノ略ニ從フタルモノナリ故ニ兩者一字ヲ脱スルモ共ニ其問答ノ意ナリト知ル可シ是レ其聾啞ナルモ文字ヲ知ル者ニ對シテ云ヒタルモノナレハ若シ其文字ヲ知ラサルニ於テハ乃チ通事ヲ命セサルヲ得ス而シテ其通

事ハ記號手様口眞似等ヲ以テ其意ヲ通スルモノトス其他敢テ註釋ヲ要セス

第四百五十七條 通事ハ正實ニ通譯ス可キノ宣誓ヲ爲テ可シ書記ハ通事ニ調書ヲ讀聞カセ之

ニ署名捺印セシム可シ

第四百九十二條第四百九十三條第二百條ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

通事正實ニ之ヲ通譯セサルニ於テハ法官何ヲ以テ其正當ナル判決ヲ下スヲ得ン或ハ有罪者ヲシテ無罪放免ノ僥倖ヲ得セシムルコトアル可ク又或ハ無罪者ヲシテ有罪被刑ノ不幸ニ陥ラシムルコトアル可シ故ニ通事ハ必ス正實ニ通譯ス可キノ宣誓ヲ爲スヘキモノト定ム

○第五節 檢証及ヒ物件差押(凡ノ十二條)

本節ハ敢テ註釋ヲ要セス

第四百五十八條 豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ重罪輕罪ノ犯所ニ臨ミ檢証

ヲ爲ス可シ

五二一

又檢事ノ請求アリタル時ハ如何ナル場合ト雖モ臨檢ス可シ

△參看 明治十四年十二月司法省丙第十五號達

治○第四百五十五條ヨリ○第四百五十八條マテ

治罪法實施ノ上ハ豫審判事檢証及ヒ物件差押ノ事件ニ付キ急速ヲ要スル場合ニ巡查ヲ同行

シ又ハ所在ノ巡查ヲ使用スル儀モ可有之候條豫テ可達置此旨相達候事

犯罪ノ痕跡多クハ犯所ニ現存スルモノナリ故ニ犯所ニ臨テ檢証處分ヲ爲スハ事實ヲ發見

スルニ付キ甚ク必要トスル所ナリ是ヲ以テ豫審判事ハ事實發見ノ爲ノ必要ナリトスル時

ハ自己ノ職權ヲ以テ重罪輕罪ノ犯所ニ臨ニ檢証ヲ爲ス可キモノトス

第二項元來豫審判事ハ不羈獨立ノ職權ヲ有シ敢テ檢事ノ管下ニ屬スルモノコ非ラサレハ

必ラスシモ其請求ニ應セサル可ラサルノ義務ナシ然レモ檢証處分ニ至テハ罪証ヲ資ルニ

最モ必要欠ク可ラサルノ場合アルヲ以テ若シ檢事ノ請求アリタルキハ如何ナル場合ト雖

モ必ス臨檢セサル可ラサルノ義務ヲ負ハセラレタリ是レ例外ニ屬スル所ナリ

第百五十九條 豫審判事ハ犯罪ノ性質方法日時場所及ヒ被告人ノ人違ナキヲ證明ス可キ

摸樣ニ付キ調書ヲ作ル可シ

又被告人ノ利益ト爲ル可キ摸樣ヲモ記載ス可シ

本條ハ敢テ註釋ヲ要セス

第百六十條 豫審判事ハ臨檢ノ場所ニ於テ發見シタル物件其出所及ヒ摸樣ニ因リ被告人ノ人違ナキヲ又ハ犯罪ノ摸樣ヲ知ルニ足ル可シト思料シタル時ハ之ヲ差押ヘテ認印ヲナシ目錄ヲ作ル可シ但其物件ヲ監護シ又ハ遞送スルハ書記之ヲ擔任ス可シ

佛以里伯斯氏曰ク蓋シ人ノ行爲ナルモノハ極メテ不規不定ニ出テ豫メ普通ノ定見ヲ以テ

之ヲ見斷ス可キコ非ラサレハ苟モ事ヲ裁スルコ方テハ其事發生ノ時若クハ之レニ關係ス

ル人物並ニ其本心如何或ハ其他凡百ノ細情ヲ思料シ徒ラニ純然タル定規等ニ拘泥シテ之

ヲ信否セサル可シト是レ信ニ然リ若シ夫レ純然タル定規ニノミ拘泥シ普通ノ定見ヲ以テ

之ヲ見斷スルヲ常トセハ或ハ爲メニ情供証據誤判録ニ記載セルカ如キ太甚シキ誤判ヲ爲

スコナキヲ必セズ予輩ハ彼ノ書ニ記載セル誤判ヲ爲シタル年ヨリ數十百年ヲ經過シ且ツ

其地ヲ離ル、コ數千里ナルモ之ヲ見ル毎ニ未ダ嘗テ書ヲ廢シテ歎セスンハアヲサルナリ

故ニ法官タル者ハ其書ヲ見ルヲ必要トスルナリ聞ク司法省ニ於テハ其書ヲ翻譯出版シテ

普ク之ヲ各裁判所ニ配付シタリト實ニ注意ノ行届クコト感スルナリ又佛以里伯斯氏曰ク

假造ノ事實ハ必ス皮相ノ合宜ヲ備フル者ナリト是レ法官ノ最モ注意セサル可ラサル所ナ

治○第百五十九條○第百六十條

リ何シヤ已レ犯罪ヲ爲シ之ヲ人ニ嫁セントスル時ハ必ス皮相ノ合宜ヲ備フルヲ以テ常ト  
 スルナリ然ルニ無辜者ハ想ヒ掛ケナキ証據ノ眼前ニ横リ來リ遽ニ以テ其冤ヲ雪クノ實策  
 ナキヲ以テ終ニ詐僞欺騙ヲ以テ其冤ヲ雪カントス此時ニ當テ法官其詐僞欺騙ナルヲ覺  
 知スレハ愈々以テ其犯罪人ハ某ニ限ルト確心シテ之レカ判決ヲ下スヨリ終ニ彼ノ誤判録  
 ニ記載スルカ如キ太甚シキ誤判ヲ爲スチ免レサルナリ英國ノ法官路爾達曼斯佛以爾達氏  
 ノ實驗上ニ於テ知ルノ言ニ曰ク固ト辜ナキ者ト雖モ其疑ヲ解ク能ハサルニ於テハ詐僞欺  
 騙ヲ用フルモ仍ホ其冤ヲ雪カント欲スルコトアリト又佛以里伯斯氏曰ク良善ナル事ヲ保庇  
 スル爲メニ不正ノ方策ヲ運ラシ若クハ詐僞ノ口實ヲ假ル者甚ナシトス可ヲスト是レ皆  
 ナ本條ノ場合ニ於テ法官ノ最モ注意ス可キ所ナリ  
 予輩ハ刑法第七十六條ノ下ニ於テ「本屬長官ノ命令ニ從ヒ其職務ヲ以テ爲シタル者ハ其  
 罪ヲ論セス」トアルハ至極善良ノ法ニ予輩モ亦斯クアランコト希望スルモノナレモ其  
 本屬長官ノ誤判ハ不論罪ノ節ニ明文ナク又他ニ之ヲ罰スルノ法條ナシ然ラハ法律ハ之ヲ  
 默々不問ニ付スル者 見ヘタレモ予輩ハ其誤判ヲ決シタル法官ヲ其責ニ任セシメンコト

ヲ望メリ季拔氏曰ク官吏カ執行スル事ニ失錯アレハ其官吏トシテ其責ニ任セシムルヲ以テ  
 自由ノ爲メニ緊要ナリトスルハ論ヲ俟タズ責メノ歸ス可キ所ナキ事ハ決シテ舉行スルコト  
 ナカラシムルモ亦均シク緊要ナリトスト是レ宜シク然ラサル可ラサルモノナリ然レモ其  
 誤判ノ責メチ一々法官ニ歸スルキハ法官常ニ逡巡躊躇ノ其職務ヲ行フコト能ハサルニ至ル  
 チ免レヌ故ニ通常ノ誤判ハ敢テ其責ヲ問ハサルモ死刑ヲ決行シタル誤判ハ宜シク之ヲ  
 其死刑ヨリ何等テ減シタルノ刑ヲ科スルト云フ法條アルチ必要トスルナリ今本條ノ情供  
 証據ニ於テハ古來各國ニ於テ屢々誤判アリ以テ無辜ノ良民ヲ死刑ニ處シタル所ナレハ予  
 輩ノ筆ハ本條ノ下ニ至リ其魂魄ニ迫マラレ終ニ此旨ヲ茲ニ記スルニ至レリ嗚呼無辜ノ良  
 民ノ誤判ニ因テ死刑ニ處セラレタル魂魄ニ君等之ヲ見テ立チ去レヨカシ

第百六十一條 豫審判事ハ臨檢家宅搜索物件差押ニ付キ其日ニ處分ヲ終ラサル時ハ場所ノ  
 周圍ヲ閉鎖シ又ハ看守者ヲ置クコトヲ得

本條ハ敢テ註釋ヲ要セス

第百六十二條 豫審判事ハ被告人ノ住所又ハ事實ヲ證明ス可キ物件ヲ藏匿スルノ疑アル者

治○第百六十一條○第百六十二條

ノ住所ニ臨檢スルヲ得

○三一

被告人又ハ物件ヲ藏匿スル者其住所ニ在ラサル時ハ同居ノ親屬若シ其在ラサル時ハ戸長ノ立會アルヲ要ス

第三百三十三條第三項ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

本條モ亦敢テ註釋ヲ要セス

第三百三十三條 被告人ハ臨檢家宅搜索ノ處分ニ立會ヒ又ハ代人ヲシテ立會ハシムルヲ得若シ被告人拘留ヲ受ケタル時ハ自ラ立會フヲ得ス但豫審判事本人ノ立會ヲ必要ナリトスル時ハ此限ニ在ラス

民事原告人及ヒ其代人ハ前ニ記載シタル處分ニ立會フヲ得但豫審判事ハ其立會ノ爲メ豫審ヲ遅延ス可カラズ

本條モ亦同シク註釋ヲ要セス

第三百六十四條 家宅搜索ノ場合ニ於テ豫審判事ハ第三百六十條ノ規則ニ從ヒ物件ヲ差押ヘシ物件ヲ差押ヘタル時ハ其目錄ノ謄本ヲ立會人ニ渡ス可シ

本條モ亦同シク註釋ヲ要セス

第三百六十五條 豫審判事ハ被告人物件差押ノ處分ニ立會ヒタルト否トヲ問ハズ其物件ヲ被告人ニ示シ辯解ヲ爲サシム可シ

其訊問及ヒ陳述ハ之ヲ調書ニ記載スヘシ事實ヲ證明スルニ必要ナリトシテ差押ヘタル物件ヲ直接ニ被告人ニ示シ此レハ汝ノ物ナリヤ如何ヤテ之ヲ得タリヤ其物件犯罪ノ場所ニ指シタルハ如何或ハ犯所ニ散佚シタル折裂ノ衣片ハ被告人ニ屬スル物ノ如キハ如何又其刀劍血ニ染ミタルハ何等ノ所爲ニ供シタルカ等ヲ訊問シ之レカ辯解ヲ爲サシムル時ハ或ハ被告人ノ心情ヲ感動シテ遁辭詐言ヲ爲スヲ能ハス終ニ事實上多少ノ白狀ヲ爲スヲアルヲハ古來ノ實驗ニ於テ屢々証スル所ナリ是レ本條ヲ設ケタル所以ナリ

第三百六十六條 豫審判事ハ臨檢ノ場所ニ於テ証人ノ陳述ヲ聽ク事ヲ必要ナリトスル時ハ書記ノ立會ニ依リ各別ニ之ヲ訊問ス可シ

一三一

第三百七十條以下ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

本條中各別ニ之ヲ訊問ス可シト定メタルハ大ニ立法者ノ意ヲ用ヒタル所ナリ何ソヤ人治○第三百六十三條ヨリ○第三百六十六條マテ

ハ十ノ八九雷同ノ性質アルモノナレハ若シ一統並ヘテ之ヲ訊問スルニ於テハ一人言語ヲ發シテ云々ナリト云ヒハ少シク事實ノ相違シタル所アリト思惟スル者アルモ何レモ皆ナ左様ニ相違之レナク候ト異心同音ニ之ヲ申立ツルハ社會ノ常ニシテ敢テ珍ラシカラサル事實ナリ彼ノ婚禮葬式ニ際シ長家一統揃テ行クコトアル時ハ先キノ一人言語ヲ發シテ其禮ヲ述フレハ餘ノ人ハ皆ナ唯タ口ヲ動カシタルノミニシテ更ニ音聲ヲ出スコナク頭ヲ垂レタル儘マ歸ルヲ常トス故ニ立法者ハ其雷同ノ弊ヲ防カンガ爲メ証人ノ陳述ハ各別ニ之ヲ訊問スヘキモノト定ム

第六十七條 豫審判事ハ前數條ニ記載シタル處分中何人ニ限ラス允許ヲ得ヌ其場所ニ出入スルコトヲ禁スルヲ得

若シ其禁ヲ犯ス者アル時ハ之ヲ逐斥シ又ハ處分ヲ終ルマテ之ヲ留置スルヲ得  
被告人ノ家宅搜索檢証處分ノ場合ニ於テ餘人ヲシテ自由ニ其場所ニ出入スルヲ得セシメハ爲メニ證據ヲ湮滅スルコトアリ何ソヤ固ト其家宅ニ居リシ者ヲ自由ニ出スニ於テハ證據物ヲ持テ出スノ恐レアリ又他ヨリ來ル者ヲシテ自由ニ入ルヲ得セシメハ被告人ノ親

屬故舊等陰ニ衆人ノ中ニ雜リ來リ其犯罪ノ證據ヲ湮滅シ取調處分ヲ妨碍スル等ノ恐レアリ故ニ何人ニ限ラス允許ヲ得ルニ非ラサレハ以テ其場所ニ出入スルヲ禁ス若シ其禁ヲ犯ス者アル時ハ之ヲ逐斥シ又ハ其處分ヲ終ルマテ之ヲ留置スルコトアルヘシ然レモ其留置ハ一時權宜ノ處分ナレハ決シテ之ヲ刑罰ト混同ス可ラサルナリ

第六十八條 豫審判事ハ其管轄地内ト雖モ時宜ニ因リ臨檢家宅搜索ノ事ヲ其地ノ治安判事ニ囑託スルヲ得

△參看 明治十四年九月二十日第四十六號布告

治罪法第七十二條ニ於テ治安判事ニ囑託スルコトヲ許シタル處分ハ當分ノ内其地ノ司法警察官ニ囑託スルヲ得

本條ハ便宜ノ爲メニ設ケタルモノナリ

第六十九條 豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ驛遞電信鐵道ノ官署諸會社ニ其事由ヲ通知シ被告人又ハ豫審ニ關係アル者ヨリ發シ若クハ是等ノ者ニ對シ發シタル書類電報又ハ物件ヲ受取開披スルヲ得但受取証書ヲ渡スヘシ

治○第六十七條ヨリ○第六十九條マテ

ハ十ノ八九雷同ノ性質アルモノナレハ若シ一統並ヘテ之ヲ訊問スルコ於テハ一人言語ヲ發シテ云々ナリト云ヒハ少シク事實ノ相違シタル所アリト思惟スル者アルモ何レモ皆ナ左様ニ相違之レナク候ト異心同音ニ之ヲ申立ツルハ社會ノ常ニシテ敢テ珍ラシカラサル事實ナリ彼ノ婚禮葬式ニ際シ長家一統揃テ行クコアル時ハ先キノ一人言語ヲ發シテ其禮ヲ述フレハ餘ノ人ハ皆ナ唯タ口ヲ動カシタルノミニシテ更ニ音聲ヲ出スコナク頭ヲ垂レタル儘マ歸ルヲ常トス故ニ立法者ハ其雷同ノ弊ヲ防カンガ爲メ証人ノ陳述ハ各別ニ之ヲ訊問スヘキモノト定ム

第六十七條 豫審判事ハ前數條ニ記載シタル處分中何人ニ限ラス允許ヲ得スノ其場所ニ出入スルコヲ禁スルヲ得

若シ其禁ヲ犯ス者アル時ハ之ヲ逐斥シ又ハ處分ヲ終ルマテ之ヲ留置スルコヲ得

被告人ノ家宅搜索檢証處分ノ場合ニ於テ餘人ヲシテ自由ニ其場所ニ出入スルコヲ得セシメハ爲メニ證據ヲ湮滅スルコアリ何ソヤ固ト其家宅ニ居リシ者ヲ自由ニ出スニ於テハ證據ヲ持テ出スノ恐レアリ又他ヨリ來ル者ヲシテ自由ニ入ルコヲ得セシメハ被告人ノ親

屬故舊等陰ニ衆人ノ中ニ雜リ來リ其犯罪ノ證據ヲ湮滅シ取調處分ヲ妨碍スル等ノ恐レアリ故ニ何人ニ限ラス允許ヲ得ルコ非ラサレハ以テ其場所ニ出入スルコヲ禁ス若シ其禁ヲ犯ス者アル時ハ之ヲ逐斥シ又ハ其處分ヲ終ルマテ之ヲ留置スルコアルヘシ然レモ其留置ハ一時權宜ノ處分ナレハ決シテ之ヲ刑罰ト混同ス可ラサルナリ

第六十八條 豫審判事ハ其管轄地内ト雖モ時宜ニ因リ臨檢家宅搜索ノ事ヲ其地ノ治安判事ニ囑託スルコヲ得

△參看 明治十四年九月二十日第四十六號布告

治罪法第七十二條ニ於テ治安判事ニ囑託スルコヲ許シタル處分ハ當分ノ内其地ノ司法警察官ニ囑託スルコヲ得

本條ハ便宜ノ爲メニ設ケタルモノナリ

第六十九條 豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ驛遞電信鐵道ノ官署諸會社ニ其事由ヲ通知シ被告人又ハ豫審ニ關係アル者ヨリ發シ若シハ是等ノ者ニ對シ發シタル書類電報又ハ物件ヲ受取開披スルコヲ得但受取証書ヲ渡スヘシ  
治○第六十七條ヨリ○第六十九條マテ



前項ノ書類物件不用ニ属シタル時ハ其官署又ハ會社ニ還付スヘシ

書翰ノ秘密ハ人身自由家宅不侵ノ原則ト同ク之ヲ侵ス可ラサルモノナレモ治罪ノ爲メ

已ムコトヲ得サル處分ニ付テハ其書類電報又ハ物件ヲ受取開披スルコトヲ得ルモノトス若シ

夫レ何テモ漢テモ書翰以下ノ秘密ハ之ヲ侵ス可ラストセハ之レカ爲メ犯罪人ハ容易ニ其

罪ヲ遁カル、ノ方法ヲ回ラスコトヲ得ヘシ去レハ一人ノ自由ヲ重ニスルニ過キテ却テ社會

ノ自由ヲ輕ロンスルノ結果ニ陷ルヘシ是レ本條ヲ設ケタル所以ナリ

○第六節 証人訊問 凡二十一條

本條ハ敢テ註釋ヲ要セス

第七十條 豫審判事ハ檢事民事原告人又ハ被告人ヨリ証人トシテ指名シタル者ヲ呼出ス

ヘシ

原告証人ノ員數夥多ナル時ハ指名ノ順序ニ從ヒ又ハ最モ事實ヲ知ルヘシト思料シタル者輕

罪事件ニ付テハ各五名重罪事件ニ付テハ各十名ヲ限リ先ツ之ヲ呼出スヘシ但事實發見ノ爲

ニ必要ナリトスル時ハ此限ニ在ラズ

又原被ノ指名セサル者ト雖モ豫審判事ノ職權ヲ以テ証人トシテ之ヲ呼出スコトヲ得

△參看 明治十四年九月廿日第四十號布告

豫審又ハ公判ニ付証人ヲ呼出サント請フ者アルキハ裁判所ニ於テ其旅費日當等ノ金額ヲ算定シテ之レヲ豫納セシムヘシ

若シ被告人旅費日當ヲ豫納スルノ資力ナキトキハ治罪法第七十條ノ制限ニ從ヒ裁判所ニ於テ其費用ヲ立替置ヘシ

証人ノ陳述ハ法官ノ由テ心証ヲ資リ又事實ヲ推測スルノ材料ト爲ルヘキモノトス而シテ

其所謂証人ト特ニ犯罪ヲ目撃シタル者ノミニ限ラス又犯罪前後ノ模様及ヒ被告人平常ノ

人ト爲リ其行爲ヲ熟知スル者ハ總テ証人トシテ呼出サル、コトアルヘシ

第七十一條 証人ハ豫審判事ノ名ヲ以テ之ヲ呼出スヘシ但其呼出狀ハ第二百二十三條ノ規則ニ從ヒ之ヲ送達スヘシ

若シ証人管轄地外ニアル時ハ其所在ノ地ノ輕罪裁判所書記ニ送達ノ事ヲ囑託スヘシ

証人ノ呼出ハ豫審判事自ラ指名シタルト又原告若クハ被告ノ指名シタルトニ論ナク都テ

治○第七十條○第七十一條

豫審判事ノ名ヲ以テ之ヲ爲シ其呼出狀ハ第二十三條ノ規則ニ從ヒ書記其所屬ノ使丁ヲシテ之ヲ送達セシムルモノトス

第七十二條 豫審判事ハ証人裁判所々在ノ地ニ住セサル時ハ其住所ノ地ノ治安判事ニ訊問ノ事ヲ囑託スルヲ得

若シ証人管轄地外ニアル時ハ其所在ノ地ノ豫審判事又ハ治安判事ニ訊問ノ事ヲ囑託スルヲ得

本條ノ場合ニ於テ呼出狀ハ囑託ヲ受ケタル判事ノ名ヲ以テ其裁判所ノ書記局ヨリ之ヲ送達スヘシ

△參看 明治十四年九月廿日第四十六號布告

治罪法第六十八條第七十二條ニ於テ治安判事ニ囑託スルヲ許シタル處分ハ當分ノ内其地ノ司法警察官ニモ囑託スルヲ得

本條ハ事項繁雜スト雖モ能ク之ヲ熟讀スルニ於テハ敢テ註釋ヲ待テ始メテ知ル所ニ非ス第七十三條 呼出狀ニハ証人ノ氏名住所及ヒ職業ヲ記載スヘシ

又出頭ノ日時場所及ヒ呼出ニ應セサル時ハ罰金ヲ言渡シ且勾引スルトアル可キ旨ヲ記載スヘシ

呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫アルヘシ

本條第二項ニ於テ「又出頭ノ日時場所及ヒ呼出ニ應セサル時ハ罰金ヲ言渡シ且勾引スルトアルヘキ旨ヲ記載スヘシ」トアルハ良民ニ對シ甚タ無禮ナル取扱方ナルカ如シト雖モ

是レ決シテ其出廷ヲ脅迫スルニ非ラス否ナ其結果ヲ問フ時ハ或ハ脅迫ノ所爲ニ近シト雖モ其法律ヲ知ラサルカ爲メ自ラ刑罰ニ陷ルヲナカランカ爲メテ慮リ以テ此事ヲ記載スルト定メタルナリ然ラハ本條ハ其面ヲ鬼ニシテ其心ヲ菩薩ニスルモノト謂フ可シ

第七十四條 証人疾病公務其他正當ノ事故ニ因リ呼出ニ應スル能ハサルヲ証明シタルハ豫審判事其所在ニ就テ之ヲ訊問ス可シ

世ノ註釋家皆ナ本條ヲ以テ其証人ノ口証ヲ取ルヲ必要ナリト思料スル時ニ限ルモノトシ

若シ証人ノ陳述ヲ必要ナラスト思料スル時ハ此臨訊ノ處分ヲ爲スニ及ハスト註スレヒ予

輩ハ斯ク解スル能ハサルナリ否ナ實際上ハ或ハ斯クアル可シト雖モ本條ノ明文ニ據テ之

治○第七十二條○第七十三條○第七十四條

ヲ考フルハ豫審判事ハ必ス其所在ニ就テ之ヲ訊問ス可キノ義務アルモノトス何トナレ  
 ハ法文ノ結尾之ヲ訊問スルコトヲ得ト記セシメテ之ヲ訊問ス可シト命令シタレハナリ若シ  
 夫レ之ヲ云々ス可シト命令シタル明文アルコトモ拘ハラズ之ヲ云々セサルコトアルコト於テ  
 ハ他ノ條々ニ於テ之ヲ云々ス可シト命令シタルモノヲ如何セン其他ノ條々モ亦同シク云  
 ヲセサルモ可ナランカ然レハ法律ハ終ニ有名無實ニ歸シ一片ノ廢紙トナルノ恐レアリ故  
 ニ之ヲ云々ス可シト命令シタル者ハ別項若クハ但書ヲ以テ變例ヲ示サ、ル以上ハ必ス之  
 ヲ云々セサル可ラサルモノトス然ラハ他ノ條々ニ於テハ必ス之ヲ云々ス可シテ本條ニ  
 於テハ或ハ之ヲ臨訊シ或ハ之ヲ臨訊セサルヲ許スアラハ終ニ法律ハ不公平ニ陷ルノ恐レ  
 アリ予輩ハ其心ニ於テハ其証人ノ口証ヲ取ルヲ必要ナリト思料スル場合ニ於テハ之ヲ臨  
 訊スヘキモ其証人ノ陳述ヲ必要ナラスト思料スル時ハ敢テ之ヲ臨訊スルノ勞ヲ取ラズ  
 可ラントハ思惟スレモ如何セン本條ノ明文斯クアル以上ハ必ス臨訊セサルヘラサルモ  
 ノトス故ニ予輩ハ本條ニ別項若クハ但書ヲ加ヘテ「其証人ノ陳述ヲ必要ナラスト思料シ  
 タル時ハ其所在ニ就テ之ヲ訊問スルニ及ハス」トノ旨ヲ加ヘラレシコトヲ希望スレモ其斯

シナラサル以上ハ必ス本條ノ明文ニ據テ豫審判事ヲシテ其所在ニ就テ訊問スルコトヲ怠ラ  
 シメサランコトヲ希望スルナリ

第百七十五條 証人ト爲ルヘキ者陸海軍在營ノ軍人軍屬ナル時ハ其所屬長官ヲ經由シ呼出  
 狀ヲ送達ス其長官ハ即時ニ出廷セシムヘキコトヲ認可シ又ハ職務上已ムコトヲ得サル差支アル  
 時ハ其事由ヲ付シテ出廷延期ヲ豫審判事ニ請求スヘシ

本條ノ結文「出廷ノ延期ヲ豫審判事ニ請求スヘシ」トアルヲ以テ其請求ヲ容ル、ト否トハ  
 全ク豫審判事ノ權内ニ在ル者トス然レモ其出廷ノ延期ヲ請求シタル時ハ大概ハ之レニ應  
 スルヲ可トスレモ其豫審判事ノ意見ニ因リ或ハ其延期ノ請求ヲ容レサルモ亦之ヲ如何ト  
 スヘカラサルモノトス然ルヲ世ノ註釋家ハ皆ナ其延期ノ請求アルニ於テハ必ス之ヲ容レ  
 サルヘラサルカ如ク註スレモ是レ相手カ陸海軍ナルヲ以テ其陸海軍ノ文字ニ思考力ヲ奪  
 ハレ以テ法律ノ意義ヲ忘レタルモノト謂ハサルテ得サルナリ嗚呼卑屈ナル哉

九三一  
 第百七十六條 豫審判事ハ前二條ニ定メタル差支ノ場合ヲ除クノ外証人呼出ニ應セサル時  
 ハ檢事ノ意見ヲ聽キ二圓以上十圓以下ノ罰金ヲ言渡スヘシ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控

治○第百七十五條○第百七十六條

訴ヲ許サズ

○四一

豫審判事ハ其証人ニ對シ罰金ノ言渡書ト共ニ再度ノ呼出狀ヲ送達シ又ハ直チニ勾引狀ヲ發スルコト得但其費用ハ証人ヲシテ之ヲ擔當セシム

若シ証人再度ノ呼出ニ應セサル時ハ二倍ノ罰金ヲ言渡シ且勾引狀ヲ發スルコトアルヘシ

証人タルヲ肯スルト否トハ之ヲ天法ニ質スルハ全ク其人ノ自由權内ニ在リテ存スルモノナレノ假令之ヲ肯セサルモ社會ハ決シテ之ヲ罰スルノ權ナキモノトス然レモ其人ノ出ツルニ於テハ犯罪ヲ證明スルカ若クハ其冤枉ナルコトヲ證明スヘキモノナルニ其証人タルヲ肯セサルハ不人情ノ甚ダシキモノニシテ大ニ實利主義ニ反スルノ恐レアルヲ以テ不本意ナカラ之ヲ罰スルモノトス

若シ証人再度ノ呼出ニ應セサル時ハ二倍ノ罰金ヲ言渡ストハ初度ノ呼出ニ應セサル時ニ際シテ言渡サレタル金高ノ二倍ヲ科スルト云フノ意ニ非ラス即チ初度ノ罰金二圓以上十圓以下トアル二倍即チ四圓以上二十圓以下ト云フノ義ナリ故ニ檢事ノ意見ニテ或ハ初度ノ罰金値ニ二圓ナルモ再度ノ罰金二十圓ヲ科スルコトアリ又或ハ右ニ一轉シテ初度ノ罰金

十圓ナルモ再度ノ罰金僅ニ四圓ヲ科スルニ止ルコトアリ乞フ讀者其二倍ノ如何ヲ察セヨ本條其再度ノ呼出ニ應セサルノ時ヲ規定シテ三度以上ノ呼出ニ應セサル時ニ及ハス然ラハ其三度以上ノ呼出ニ應セサル者ハ之ヲ如何ニ處分スルモノナルカ其明文ナキヲ以テ之ヲ確知スルコト能ハスト雖モ本條ノ文面ヨリ之ヲ推察スレハ三度以上ノ呼出ニ應セサル時モ亦再度ノ呼出ニ應セサル時ト同シク四圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ言渡スモノト解スルナリ

第百七十七條 豫審判事ハ証人初度又ハ再度ノ呼出狀ヲ受ケサルコト其呼出狀第百七十三條

ノ規則ニ背キタルコト又ハ豫知シ難キ正當ノ事故アリテ出廷スル能ハサリシコトヲ證明シタル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ其罰金ノ言渡ヲ取消スヘシ

本條ハ固ヨリ當ニナカル可ラサルモノトス

第百七十八條 証人呼出狀ニ因リ出廷シタル時ハ其呼出狀ヲ書記ニ差出ス可シ若シ之ヲ遺失シタル時ハ其人違ナキコトヲ證明スヘシ

本條ハ敢テ註釋ヲ要セズ

治○第百七十七條○第百七十八條

第二百七十九條 豫審判事ハ証人トシテ呼出シタル者ニ對シ其氏名年齢職業住所及ヒ第百八

十一條ニ記載シタル者ナリヤ否ヲ問フヘシ

本條ハ証人ノ人違又ハ詐偽ナキヲ確カメル爲メ設ケタルモノナリ

第百八十條 豫審判事ハ証人ヲシテ愛憎畏懼ノ心ナク正實ニ陳述ヲ爲スヘキ事ヲ宣誓セシ

ム可シ

豫審判事ハ証人ニ宣誓書ヲ讀聞カセ之ニ署名捺印セシム若シ署名捺印スルコト能ハサル時ハ

其旨ヲ附記スヘシ

宣誓書ハ訴訟書類ニ添置クヘシ

△參看 明治十五年三月廿三日司法省丙第十號達

治罪法第二百八十五條ニ從ヒ調書ヲ作リタル司法警察官ヲ証人トスルキハ書記局ヨリ報知

書ヲ以テ出廷セシメ宣誓セシムルニ及ハス書記ノ次席ニ着テ陳述セシム可シ此旨相達候事

證人タル者ハ時ニ或ハ愛憎畏懼ノ心ヲ生スルコトアルモノナリ而シテ證人ノ陳述ハ大ニ裁

判ヲ左右スルノ力アルモノナリ故ニ本條ヲ設ケテ其受憎畏懼ノ心ナク正直ニ陳述ヲ爲ス

コトヲ宣誓セシム可キモノトス

第百八十一條 左ニ記載シタル者ハ証人ト爲ルコトヲ許サス但事實參考ノ爲メ其陳述ヲ聽ク

コトヲ得

一 民事原告人

二 民事原告人及ヒ被告人ノ親屬

三 民事原告人及ヒ被告人ノ後見人又ハ是等ノ者ノ後見ヲ受クル者

四 民事原告人及ヒ被告人ノ雇人

本條第一ヨリ第四マテニ列記スル所ノ者ハ何レモ皆ナ情ニ於テ偏スル所ノモノアリ故ニ

此等ノ者ヲシテ證人タラシムルモ其實證ヲ得ルコト甚ク難シトス故ニ此等ノ者ハ事實參考

ノ爲メ其陳述ヲ聽ク可キノミニシテ敢テ其証人タルコトヲ許サス

第百八十二條 左ニ記載シタル者亦前條ニ同シ

一 十六歳未滿ノ幼者

二 知覺精神ノ不充分ナル者

治○第百七十九條ヨリ○第百八十二條マテ

二 瘖啞者

三 公權ヲ剝奪セラレ又ハ公權ヲ停止セラレタル者

四 重罪事件ニ付キ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ受ケ又ハ重禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪事件ニ付キ公判ニ付セラレタル者

五 現ニ陳述ヲ爲ス可キ事件ニ付キ會テ訴テ受ケ其証憑充分ナラサルニ因リ免訴ノ言渡ヲ受ケタル者

前條及ヒ本條第六ニ記載シタル者ハ其身上ニ關スル事件ノミニ就テ証人タルヲ得スト雖他ノ事件ニ就テハ固ヨリ証人タルヲ得可キ者ナリ然レモ本條第一ヨリ第五マテノ者ハ獨リ其事件ニ就テノミナラス他ノ事件ニ就テモ都テ一般ニ証人トナルヲ得サル者トシ自ラ其間ニ區別ノ存スルモノアルナリ

第八十三條 証人宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓シテ陳述ヲ肯セサル時ハ豫審判事檢事ノ意見ヲ聽キ刑法第八十條ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サズ醫師藥商穩婆又ハ代言人辯護人代書人公証人若クハ神官僧侶其身分職業ニ關スル秘密ノ事

件ニ付キ委託ヲ受ケタル者ハ前項ノ例ニ在ラス

前二條ニ記載シタル者ニ非ラサル者ニシテ一旦証人トシテ出廷シタル上ニテ宣誓ヲ肯セサル者ハ必ズ正實ノ陳述ヲ爲スヲ欲セサル者ナリ又假令之レカ宣誓ヲ爲スト雖モ其陳述ヲ肯セサル時ハ田廬人ト一般最初ヨリ出廷ヲ肯セサルト敢テ異ナルヲナシ故ニ此等ノ者アル時ハ豫審判事ハ檢事ノ意見ヲ聽キ刑法第八十條ニ定メタル公務ヲ行フヲ拒ム罪ニ從ヒ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ言渡スヘキモノトス然レモ其身分職業ニ關スル秘密ノ事件ニ付キ委託ヲ受ケタル者ハ前項ノ例ニ在ラス即チ假令宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓シテ陳述ヲ肯セサルモ敢テ罰金ヲ言渡サ、ルモノトス

第八十四條 証人ハ他ノ証人及ヒ被告人ト各別ニ之ヲ訊問スヘシ但事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ他ノ証人又ハ被告人ト對質セシムルヲ得

若シ証人ヲシテ他ノ証人又ハ被告人ト相對シテ陳述セシムル時ハ或ハ忌憚シテ其言ヲ盡サ、ルコトアルヘク又或ハ相附加スルコトアルノ恐レアリ故ニ各別ニ之ヲ訊問ス可キモノトス然レモ各証人ノ供狀互ニ相齟齬スルカ如キ又ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ノ如

治○第八十三條○第八十四條

キハ對質法ヲ用フルモノトス是レ韓信ノ背水ノ備ノ如ク常例ニ背テ却テ其利益アルニ因テ設ケタルノ變例ナリ

第百八十五條 豫審判事ハ証人ノ陳述ヲ確實ナラシムル爲メ必要ナリトスル時ハ重罪輕罪ノ犯所又ハ其他ノ場所ニ同行スルヲ得

若シ証人同行スルヲ肯セサル時ハ第百七十六條ノ規則ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ

本條ハ讀者ニ於テ第百七十六條ヲ參看スレハ則チ可ナリ敢テ予置ノ註釋ヲ要セス

第百八十六條 第百五十六條第百五十七條ノ規則ハ証人ニ付テモ亦之ヲ適用ス

本條モ亦讀者ニ於テ第百五十六條及ヒ第百五十七條ヲ參看スレハ即チ足レリ

第百八十七條 皇族又ハ勅任官証人ナル時ハ豫審判事書記ト共ニ其所在ニ隨テ陳述ヲ聽ク

ヘシ

本條ニ記載シタル人ニ對シテハ其宣誓ヲ爲サシムルヲ得サルモノト解スルナリ

第百八十八條 書記ハ証人ノ陳述ニ付各別ニ調書ヲ作ルヘシ

其調書ニハ証人宣誓ヲ爲シタルヲ又ハ爲ササルノ事由ヲ記載ス可シ

証人宣誓ヲ爲シタルヲ又ハ爲ササル事由ヲ記載スルハ檢察官其意見ヲ陳述スル爲メ又ハ

上訴ヲ受ケタル裁判所ニ於テ驗審スル爲メ甚々必要ナルニ因リ其調書ニハ必ス此等ノ事

ヲ記載ス可キモノトス

第百八十九條 豫審判事ハ証人ニ其陳述ノ相違ナキヤ否ヲ知ラシムル爲メ書記ヲシテ調書ヲ讀聞カセシム可シ

証人ハ其陳述ヲ變更増減セシヲ請求スルヲ得書記ハ其請求アリタルヲ及ヒ變更増減ノ條件ヲ調書ニ記載シ豫審判事及ヒ証人ト共ニ署名捺印ス可シ若シ証人署名捺印スルヲ能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ

本條ハ第二項ノ場合ニ於テハ豫審判事書記及ヒ証人ハ署名捺印ス可キモノトスレハ第一

項ノ場合ニ於テハ署名捺印スルニ及ハサルモノト署名捺印ノ文字ハ第二項ニ關シテ

第一項ノ場合ニ於テモ亦署名捺印スルヲ例トスルヤ否ヤ

第百九十條 証人ハ即時ニ出廷ニ付テノ旅費日當ヲ要ムルヲ得

若シ日稼ヲ以テ生業トスル者ナル時ハ旅費日當ノ外日稼高二等シキ賃金ヲ要ムルコトヲ得

治○第百八十五條ヨリ○第百八十九條マテ

本條ノ場合ニ於テハ豫審判事其金額定メ之ヲ言渡ス可シ証人ハ裁判確定ヲ待タズ即時ニ  
出廷ニ付テノ旅費日當ヲ要ムルヲ得故ニ証人之ヲ要メサルニ於テハ敢テ其旅費日當ヲ  
渡サハルモノトス第二項モ亦然リ而シテ其金額ハ一時假ニ書記局ヨリ之ヲ代償スト雖モ  
結局敗訴者ヲシテ之ヲ辨償セシムルモノトス

○第七節 鑑定(凡十條)

本節ハ敢テ註釋ヲ要セス

第九十一條 豫審判事ハ犯罪ノ性質方法及ヒ結果ヲ分明ナラシムル爲メ鑑定人ヲ必要ナ  
リトスル時ハ學藝職業ニ因リ鑑定スルヲ得可キ者一名又ハ數名ヲノ鑑定ヲ爲サシム可シ  
本條ハ敢テ註釋ヲ要セス

第九十二條 鑑定人ハ書記局ヨリ呼出狀ヲ以テ之ヲ呼出スヘシ其呼出狀ニハ犯罪事件ニ  
付キ鑑定ヲ命スルヲ及ヒ呼出ニ應セサル時ハ罰金ヲ言渡ス可キヲ記載スヘシ  
鑑定人呼出ニ應セサル時ハ第九十六條ノ規則ニ從ヒ處分スヘシ但シ勾引狀ヲ發スルヲ得  
得

第九十七條ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

彼ノ証人呼出ニ應セサル時ハ豫審判事ハ罰金ノ言渡書ヲ送達シ又ハ直チニ勾引狀ヲ發ス  
ルヲ得可キモ此鑑定人ノ呼出ニ應セサル時ハ唯タ罰金ノ言渡書ヲ送達スルニ止マリテ  
勾引狀ヲ發スルヲ得サル者トス是レ何ニ由テ其差違アルカ抑モ故アリ何ソヤ証人ハ犯  
罪事件ヲ目撃シ若クハ其前後ノ模様ヲ知ル者ニ限ルヲ以テ最初指名シタル証人其呼出ニ  
應セサル時ハ他人ヲ以テ之レニ代ハラシムルヲ得サルモ鑑定人ハ然ラス苟モ之ヲ鑑定  
スルヲ得ル者ナレハ何人ヲ問ハス之ヲ鑑定セシムルヲ得可シ故ニ最初指名シタル鑑  
定人裁判所ノ呼出ニ應セスト雖モ又更ニ他ノ鑑定人ヲ呼出スヲ得ルニ因テ其差違アル  
ナリ

第九十三條 鑑定人ハ正實ニ鑑定ス可キノ宣誓ヲ爲ス可シ其宣誓ハ第八十條ノ式ニ從

書記ハ鑑定人ノ宣誓シタルヲ鑑定命令書ノ紙尾ニ記載シ之ニ宣誓書ヲ添置ク可シ  
本條ノ意義ハ第八十條ノ意義ト同一ナレハ敢テ復タ茲ニ贅釋ヲ施スヲ要セス

治○第九十條ヨリ○第九十三條マテ



第九十四條 鑑定人宣誓ヲ肯セズ又ハ宣誓シテ鑑定ヲ肯セサル時ハ豫審判事檢事ノ意見ヲ聽キ刑法第七十九條ニ從ヒ罰金ヲ言渡シ可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サズ  
本條ハ第八十三條第一項ノ法意ト同一ノ主義ニシテ刑法第七十九條ニ從ヒ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ言渡ス可キモノトス

第九十五條 第八十一條第八十二條ニ記載シタル者ニハ鑑定ヲ命スルヲ得ス但急遽ノ際正當ノ鑑定人ト爲ル可キ者ナキ時ハ事實參考ノ爲メ鑑定ヲ命スルヲ得

証人ハ第八十一條及ヒ第八十二條ニ記載スル所ノ者ト雖モ事實參考ノ爲メハ平常之ヲ聽クコトアレハ鑑定人ハ第八十一條及ヒ第八十二條ニ記載スル所ノ者ナル時ハ急遽ノ際正當ノ鑑定人ト爲ル可キ者ナキ時ニ非ラサレハ假令事實參考ノ爲メト雖モ之レカ鑑定ヲ命スルヲ得サルモノトス

第九十六條 豫審判事ハ成ル可ク鑑定ニ立會フ可シ

本條ハ其結文立會フ可シト命令スルモ中間ニ成ル可クト云ヘル道德上ノ文字アリテ結文ト連續スルヲ以テ其鑑定ニ立會フト否トハ全ク豫審判事ノ自由ニシテ假令之レニ立會フ

トナキモ法律ハ之ヲ責ムルヲ能ハサレモノトス然レモ法律ノ精神ハ成ル可クハ其鑑定ニ立會ハシトテ希望スルコトアレハ豫審判事ハ他ノ事務繁多ニシテ已マテ得サルコト非ラサルコトハ成ル可ク鑑定ニ立會ハサル可ラサルモノトス

第九十七條 豫審判事ハ鑑定人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ鑑定人ヲ増加シ又ハ別人ヲシテ鑑定セシムルヲ得

本條ハ敢テ註釋ヲ要セス唯タ讀者ノ熟考ニ在ルノミ

第九十八條 鑑定人ハ鑑定書ヲ作り其手續結果及ヒ鑑定ヲ爲シタル時間ヲ詳記ス可シ若シ結果ヲ得サル時ハ其推測スル所ヲ記載ス可シ

鑑定人意見ヲ異ニスル時ハ各自鑑定書ヲ作り又ハ各自ノ意見ヲ一個ノ鑑定書ニ記載ス可シ本條モ亦敢テ註釋ヲ要セス

第九十九條 鑑定人ハ鑑定書ニ年月日ヲ記載シ署名捺印及ヒ契印ス可シ

又鑑定書ニハ豫審判事之ヲ受取リタル年月日ヲ記載シ書記ト共ニ捺印ス可シ  
鑑定書ハ鑑定命令書ニ添置シ可シ

治〇第九十四條ヨリ〇第九十九條マテ

外國人鑒定ヲ爲シタル時ハ其鑒定書ニ裁判所ヨリ命ゼタル通事ノ作リタル譯本ヲ添置可シ  
本條モ亦同シク註釋ヲ要セス

第二百條 鑒定人及ヒ通事ニハ旅費給料其他相當ノ費用ヲ給與ス可シ

彼ノ証人ハ第百九十條ヲ以テ「旅費日當ヲ要ムルヲ得」ト記載セリ故ニ其証人ノ要求ナ  
キニ於テハ官敢テ之ニ旅費日當ヲ給與セスト雖此ノ鑒定人及ヒ通事ハ本條ヲ以テ「旅  
費給料其他相當ノ費用ヲ給與ス可シ」ト記載シタレハ其要求ヲ待タスシテ官必ス之ヲ給  
與スルモノトス之レ何ニ由テ其然ルノ差違アルカ予輩未ダ其精神ヲ得サレハ讀者ニ充分  
ナル満足ヲ與フル能ハサルナリ

○第八節 現行犯ノ豫審(凡九條)

犯罪ニ現行犯ト非現行犯トノ別アレハ其犯セシ罪ニ輕重アラサルヨリハ決シテ  
其刑罰ヲ異ニスルモノニ非ラスシテ熟レハ同一ノ刑罰ヲ科スルモノナレハ之レ  
カ治罪ノ手續ニ於テモ亦同一處分ニシテ可ナルカ如シト雖治罪ノ手續ニ於テ  
ハ現行犯ト非現行犯トノ間ニハ大ナル差違アリ何ソヤ非現行犯ハ敢テ少許ノ時

間ヲ等フニ非ラサレハ現行犯ハ些少ノ時間モ尙ホ且ツ之ヲ等ヒ一分ヲ猶豫スル  
時ハ或ハ爲メニ犯人ノ逃走ノ憂ヒアリ又証憑ノ漂滅スルノ患ヒアリ故ニ同一處  
分ヲ爲スト能ハス是レ特ニ本節ヲ設ケテ變則ヲ定メタル所以ナリ

第二百一條 豫審判事ハ檢事ヨリ先ニ現行ノ重罪輕罪アルヲ知リタル場合ニ於テ其事件

急速ヲ要スル時ハ檢事ノ請求ヲ待タス直チニ其旨ヲ通知シ豫審ニ取掛ルヲ得

豫審判事ハ犯所ニ臨檢シ令狀ヲ發シ其他此章ニ定タル規則ニ從ヒ豫審ノ處分ヲ爲スト得  
現行犯ノ重罪輕罪ノ場合ニ於テハ司法警察官及ヒ巡查ハ豫審判事ノ令狀又ハ命令ヲ待タ  
スシテ犯人ヲ逮捕シ得ヘキカ如ク豫審判事ハ通常非現行犯ノ場合ニ於テハ檢事又ハ民事  
原告人ノ請求アルニ非ラサレハ豫審ニ取掛ルヲ得サレハ現行犯ニ付テハ例外法ヲ用ヒ  
檢事ノ請求ヲ待タス直チニ其旨ヲ通知シ豫審ニ取掛ルヲ得ル者トス是レ現行犯ハ其証  
跡明瞭ニシテ無辜者ヲ冤枉ニ陷ルノ恐レナク且ツ急速ニ處分セサレハ其罪証ヲ煙滅シ又  
ハ犯人逃走スルノ患ヒアルヲ以テナリ然レハ豫審判事ハ其豫審判事ハ其豫審ニ取掛ルノ  
前必ス其旨ヲ檢事ニ通知スルヲ要スルモノトス是レ法律ニ於テハ成ル可ク速ニ通常ノ

治○第二百條○第二百一條

法式手續ニ復セシテ希望スレハナリ

四五

第二百二條 前條ノ場合ニ於テハ檢事ノ起訴ナシト雖モ豫審判事檢証調書ヲ作ルヲ以テ公訴ヲ受理シタル其調書ニハ現行ノ重罪又ハ輕罪ナルコトヲ記載スヘシ

豫審判事ハ速ニ書類ヲ檢事ニ送致ス可シ但檢事ヨリ其豫審手續ヲ繼續ス可キ者ニ非サルノ意見アリト雖モ通常ノ規則ニ從ヒ之ヲ終結スヘシ

本條ハ敢テ註釋ヲ要セズ

第二百三條 檢事ハ豫審判事ヨリ先ニ現行ノ重罪輕罪アルコトヲ知リタルモハ豫審判事ヲ待

ツコトナク其旨ヲ通知シテ犯所ニ臨檢シ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スコトヲ得但罰金ノ言渡ヲ爲スコトヲ得ス

証人及ヒ鑒定人ノ陳述ハ宣誓ヲ用フルコトナク之ヲ聽ク可シ

第二百一條ヲ以テ豫審判事ハ檢事ヨリ先ニ現行ノ重罪輕罪アルコトヲ知リタル場合ニ於テ其事件急速ヲ要スル時ハ檢事ノ請求ヲ待タズ直ニ其旨ヲ通知シ豫審ニ取掛ルコトヲ得ルモノト定メラル既ニ然ラハ檢事モ亦豫審判事ヨリ先ニ現行ノ重罪輕罪アルコトヲ知リタル

時ハ豫審判事ヲ待ツコトナク其旨ヲ通知シテ犯所ニ臨檢シ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スコトヲ得ル固ヨリ當然ノコトナリ

第二百一條ニ於テハ中間「其事件急速ヲ要スル時ハ云々」トアルヲ以テ假令豫審判事ハ檢事ヨリ先ニ現行ノ重罪輕罪アルコトヲ知リタル場合ト雖モ若シ其事件急速ヲ要セサルモノ

ナル時ハ檢事ノ請求ヲ待タズ直ニ通知シ豫審ニ取掛ルコトヲ得ス必ス通常ノ手續ニ從ハサル可ラサルモノト然レモ今本條ニハ「其事件急速ヲ要スル時ハ云々」ト云ヘル文

字ナギヲ以テ檢事ハ豫審判事ヨリ先ニ現行ノ重罪輕罪アルコトヲ知リタル時ハ何レノ場合ニ於テモ必ス豫審判事ヲ待ツコトナク其旨ヲ通知シテ犯所ニ臨檢シ豫審判事ニ屬スル處分

ヲ爲スコトヲ得ルモノト去レト罰金ノ言渡ヲ爲スコトヲ得サルハ固ヨリ証人及ヒ鑒定人ノ陳述ニ宣誓ヲ用フルコトヲ許サ、ルナリ

五五一

第二百四條 前條ノ場合ニ於テ檢事ハ証憑書類ニ意見書ヲ添ヘ速ニ之ヲ豫審判事ニ送致ス可シ

前條ノ場合ニ於テハ檢事ハ豫審判事ノ職務ヲ一時假ニ執行シタルモノナレハ豫審手續ヲ治○第二百三條○第二百四條

尙ホ繼續ス可キモノト認メタルト否トニ拘ハラス共ニ自ラ之ヲ決スルヲ得ス必ス其証  
憑書類ニ意見書ヲ添ヘテ豫審判事ニ送致ス可キモノトス

第二百五條 第二百三條ニ於テ檢事ニ許シタル職務ハ司法警察官モ亦假ニ之ヲ行フヲ得  
但令狀ヲ發スルヲ得ス

司法警察官証憑書類ニ意見書ヲ添ヘ被告人ト共ニ速ニ之ヲ檢事ニ送致スヘシ  
△參看 明治十四年九月廿日第四十六號布告

治罪法第二百五條第一項但書ニ司法警察官ハ令狀ヲ發スルヲ得サル旨記載有之候得共當  
分ノ内現行犯ノ場合ニ限り令狀ヲ發シ苦シカラス

本條ハ特例中ノ又特例ナルモノナリ  
第二百六條 檢事被告人ヲ受取リタル時ハ二十四時内ニ之ヲ訊問シ調書ヲ作り勾留狀ヲ發  
スルト否トヲ問ハス一切ノ書類ニ請求書ヲ添ヘ豫審判事ニ送致ス可シ

若シ起訴ヲ爲ス可カラサル時ハ直チニ被告人ヲ放免ス可シ

檢事自ラ豫審ヲ爲シタル場合即チ第二百四條ニ規定スル所ノ場合ニ於テハ其豫審ヲ尙ホ

繼續ス可キモノト認メタルト否トニ拘ハラス共ニ被告人ヲ豫審判事ニ送致ス可キモノト  
スレモ今本條ノ場合ニ於テ司法警察官ヨリ被告人ヲ送致シタル時ハ二十四時内ニ之ヲ訊  
問シ果シテ起訴ヲ爲スヘキモノト認メタル時ハ一切書類ニ請求書ヲ添ヘ豫審判事ニ送致  
スヘキ者トスレモ若シ起訴ヲ爲スヘカラサル者ト認メタル時ハ其旨ヲ豫審判事ニ通知ス  
ルニ及ハス直チニ被告人ヲ放免スヘキモノトス

第二百七條 豫審判事ハ二十四時内ニ被告人ヲ訊問スヘシ此場合ニ於テハ檢事ノ發シタル  
勾留狀ヲ解キ又ハ之ヲ存スルヲ得

本條ハ敢テ註釋ヲ要セス

第二百八條 豫審判事ハ檢事又ハ司法警察官ノ爲シタル手續ニ付キ更ニ其取調ヲ爲スコト  
ヲ得但檢事又ハ司法警察官ノ作リタル調書ハ之レヲ訴訟書類ニ添置ク可シ

本條モ亦敢テ註釋ヲ要セス

第二百九條 檢事ハ輕罪ノ現行犯ニ係ル場合ニ於テ勾留狀ヲ發シタルト否トニ拘ハラス被  
告人ヲ訊問シタル後豫審ヲ求ムルニ及ハスト思料シタル時ハ直チニ輕罪裁判所ニ呼出ス  
治○第二百五條ヨリ○第二百九條マテ

ヲ得

本條モ亦同シク註釋ヲ要セス

八五一

○第九節 保釋(凡十條)

犯罪ノ嫌疑アリ以テ豫審ニ取掛リタル者ヲシテ保釋ヲ許スハ是レ何等ノ理由ニ因ルカ曰ク刑ノ言渡確定スルニ至ルマテハ一個無罪ノ人ト視做スヘキハ治罪法ノ一原則ナリ故ニ罪ノ有無未タ決セサル間ハ豫審判事ハ被告人ノ何時ニテモ呼出ニ應シ出廷スヘキノ証書ヲ差出サシメ保釋ヲ許スヲ得ルモノトス

第二百十條 豫審判事ハ豫審中勾留狀又ハ收監狀ヲ受ケタル被告人ノ請求ニ因リ檢事ノ意見ヲ聽キ何時ニテモ呼出ニ應シ出廷ス可キノ証書ヲ差出サシメ保釋ヲ許スヲ得  
被告人無能力ナル時ハ親屬又ハ代人ヨリ保釋ヲ求ムルヲ得

△參看 明治十六年十一月五日保釋責任中ノ被告人取締方心得ノ儀ニ付司法省ヨリ下第三十一號ヲ以テ各裁判所ヘ左ノ達アリ

保釋責任ヲ得タル被告人ハ左ノ取締條件ニ服從セシムヘキ儀ニ付保釋責任ヲ爲スノ際其旨

ヲ被告人ニ豫知セシムヘシ但其言渡書ノ紙尾ニ記載印刷スルモ妨ケナシ

第一條 治罪法第二十一條ニ從ヒ假住所ヲ定メ届置クヘキコトハ言ヲ待タズ其裁判所ノ管轄地外ニ旅行スルヲ得ス若シ已ムヲ得サル事由アルキハ其旨ヲ檢事ニ申立テ許可ヲ受クヘシ  
第二條 裁判所ノ管轄地内ト雖モ住所外ニ於テ一泊以上滞在スルキハ滞在ノ場所ヲ其家族又ハ同居人ニ通知シ置クヘシ

若シ同居人アラサルキハ其住所ノ地ノ戸長ニ届置クヘシ

第三條 代言人辯護人又ハ代人トシテ法廷ニ出頭シ其他議會集會等公然ノ場所ニ參會スルヲ得ス

第四條 治罪法第二百十一條ニ適當スル者及ヒ前數條ノ規則ニ背キタル者ハ治罪法第二百十六條第二項ニ從ヒ保釋ヲ取消スヘシ其責任ヲ受ケタル者モ亦同シ

九五一  
被告人及ヒ親屬又ハ代人ヨリ保釋ヲ請求スルキハ豫審判事ハ或ハ之ヲ許スヲアリト雖モ又或ハ之ヲ許サハルコトアリ抑モ之ヲ許スト否トハ全ク豫審判事ノ權内ニ在リテ存スルモノナリ

治○第二百十條○第二百十一條

第二百一十一條 前條ノ証書ハ書記局ニ差出スヘシ

○六一 保釋中被告人ヲ呼出スルハ出廷ヨリ二十四時前ニ其報知ヲ爲スヘシ

本條ハ敢テ註釋ヲ要セス

第二百一十二條 保釋ヲ許スニハ金圓ヲ以テ被告人ノ出廷ヲ保證セシムヘシ但豫審判事其金額ヲ定メ保釋ヲ許スノ言渡書ニ記載スヘシ

保釋ヲ許スニ於テハ被告人何時ニテモ呼出コ應シ出廷スヘキノ証書ヲ差出スヲ以テ足ンリトセス尙ホ又金圓ヲ差出サシメ以テ之レカ保證トセシムルナリ而シテ其金圓ヲ要スル所以ノモノハ被告人其金額ノ爲メ敢テ逃亡スルコトナカルヘク假令逃亡スルモ其金額ヲ没入シ以テ捜査ノ費用ニ供スルノ用アレハナリ保證金額ハ法律ニ於テ之ヲ一定セス蓋シ豫審判事被告事件ノ輕重ト被告人ノ貧富ニ應シ適宜ニ算定スルモノナリ

第二百一十三條 保證ヲ爲スニハ被告人又ハ其他ノ者ヨリ保證金若クハ貯金預所又ハ銀行ノ預証書ヲ書記局ニ差出スヘシ

又裁判所ノ管轄地内ニ住シ且充分ナル資力アル者ヨリ金額ニ充ツ可キ保證書ヲ差出スヲ得

本條ハ敢テ註釋ヲ要セス

第二百一十四條 保釋中被告人呼出テ受ケ正當ノ事由ナクシテ出廷セサル時ハ保證金ノ全部又ハ幾分ヲ没入スヘシ

保證金ナルモノハ何ノ爲メニ差出スモノナルカ即チ何時ニテモ呼出コ應シ出廷スヘントノ爲メナリ然ルニ呼出テ受ケ正當ノ事由ナクシテ出廷セサルニ於テハ保證金ノ全部又ハ幾分ヲ没入スヘキコト固ヨリ當然ノコトナリ

第二百一十五條 保證金ヲ没入スルコトハ檢事ノ意見ヲ聽キ豫審判事其言渡ヲ爲スヘシ若シ他人ノ保證ニ係ル時ハ民事ノ規則ニ從ヒ之ヲ徵収スヘシ

本條ハ敢テ註釋ヲ要セス

第二百一十六條 豫審判事保證金ヲ没入シタル時ハ保釋ノ言渡ヲ取消ス可シ又豫審中保釋ノ言渡ヲ取消スヲ必要ナリトスル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ其言渡ヲ取消ス可シ

本條ハ敢テ註釋ヲ要セス

治○第二百一十二條ヨリ○第二百一十六條マテ

第二百十七條 豫審判事保証金ヲ没入シタル後免訴ノ言渡違警罪裁判所ニ移スノ言渡又ハ罰金ニ該ルヘキ輕罪ニ付輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シタル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ前ニ没入シタル金額ヲ還付スヘシ

本條金額ノ還付ニ就テハ檢事ノ意見ヲ聽クヘキノ旨記載アルヲ以テ若シ檢事ニ於テ之ヲ還付ス可ラムト云フ時ハ之ヲ還付セサルモノト見ヘタリ

第二百十八條 豫審判事免訴ノ言渡違警罪裁判所ニ移スノ言渡又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ニ付輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シ若クハ保釋ノ言渡ヲ取消シタル時ハ保証金ヲ還付スヘシ  
免許ノ言渡違警罪裁判所ニ移スノ言渡又ハ罰金ニ該ルヘキ輕罪ニ付キ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シタル時ハ前ニ没入シタル金額スヲ尙ホ且ツ之ヲ還付スルヲ以テ其法トス况  
ンヤ没入セラレサル保証金ニ於テチヤ焉ソ其レ之ヲ還付セズシテ可ナランヤ彼ノ場合ニ於テハ檢事ノ意見ヲ聽クヲ要スレド此ノ場合ニ於テハ檢事ノ意見ヲ聽クヲ要セス直チニ還付スルノ處分ニ及フ可キモノトス其保釋ノ言渡ヲ取消シタルノ場合ニ於テモ亦之ヲ還付ス可キモノトス

第二百十九條 豫審判事ハ保釋ヲ請求アルト否トヲ問ハス檢事ノ意見ヲ聽キ被告人ヲ其親屬又ハ故舊ニ責付スルヲ得

△參看 明治十年九月廿日第四十七條布告

第一條 被告人ヲ責付スルコトハ親屬又ハ故舊ヨリ何時コトモ呼出ニ應ジ出廷セシムヘキノ證書ヲ裁判所書記局ニ差出サシムヘシ

第二條 責付中被告人ヲ呼出ス時ハ出廷ヨリ二十四時間前ニ其通知ヲ爲スヘシ

第三條 被告人呼出ヲ受ケ正當ノ事由ナクシテ出廷セサル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ責付ヲ取消スヘシ

責付トハ被告人ヲシテ其親屬又ハ故舊ニ交付シテ保管監督セシムルヲ云フ然レド其親屬故舊ノ承諾アルコト非ラサレバ之ヲ爲スヲ得サルモノトス

○第十節 豫審終結(凡十二條)

本條ハ敢テ註釋ヲ要セス

第二百二十條 豫審判事被告事件其管轄ニ非スシテ又ハ他ニ取調ヲ要スルコトナシト認料  
治○第二百十七條ヨリ○第二百二十條マテ

四六一

檢事訴訟書類ニ意見ヲ附シ三日内ニ之ヲ還附スヘシ

本條ハ敢テ註釋ヲ要セズ

第二百二十一條 檢事ハ豫審充分ナラスト思料シタル時ハ其條件ニ付キ更ニ取調ヲ請求スルヲ得若シ豫審判事其請求ヲ肯セサルハ檢事訴訟書類ニ意見ヲ附シ二十四時内ニ之ヲ還附スヘシ

本條モ亦敢テ註釋ヲ要セズ

第二百二十二條 豫審判事ハ檢事ノ意見如何ナルヲ問ハス後ニ記載シタル言渡ヲ以テ豫審ヲ終結スヘシ

豫審判事終結ノ言渡ヲ爲スニ付テハ必ス原告タル檢事ノ意見ヲ聽クヲ要スト雖モ必スシテ之レニ從フヘキノ義務ナシ故ニ假令檢事ニ於テ豫審未ダ充分ナラストシテ再調ヲ請求スト雖モ豫審判事ニ於テ既ニ其處分ヲ盡セリト思量スルハ檢事ノ意見如何ナルヲ問ハス後ニ五ヶ條ニ記載シタル言渡ヲ以テ豫審ヲ終結スヘキノトス

第二百二十三條 豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非サルヲ認メタル時ハ其旨ヲ言渡ス可シ  
拘留ヲ要スル者ト認メタル時ハ前ニ發シタル令狀ヲ存シ又ハ新ニ令狀ヲ發シ其事件ヲ檢事ニ交附ス可シ

本條ノ場合ニ於テ檢事ハ豫審判事ヨリ被告人ヲ交附セラレタル時ハ其被告人ヲ監守シテ連ニ其管轄ナリト思料スル所ノ裁判所ニ送致スルノ手續ヲ爲ス可キモノトス

第二百二十四條 豫審判事ハ左ノ場合ニ於テ免訴ノ言渡ヲ爲シ且被告人拘留ヲ受ケタル時ハ放免ノ言渡ヲ爲ス可シ

- 一 犯罪ノ証憑充分ナラサル時
- 二 被告事件罪ト爲ラサル時
- 三 公訴ノ期滿免除ト爲リタル時
- 四 確定裁判ヲ經タル時
- 五 大赦アリタル時
- 六 法律ニ於テ其罪ヲ全免スル時

五六二

治○第二百廿一條ヨリ○第二百廿四條マテ



本條ノ場合ニ於テ被害者ハ民事裁判所ニ非サレハ要償ノ訴ヲ爲スヲ得ス

本條ハ大ニ註釋ヲ要ス可キカ如シト雖モ其實一言ノ註釋ヲ用ヒスシテ既ニ明瞭ナリ

第二百二十五條 被告事件違警罪ナリト思料シタル時ハ違警罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シ且被告人勾留ヲ受ケタル時ハ釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ

違警罪ニ於テハ固ト豫審ヲ行フヘキモノニ非ラスト雖モ始メ檢事ニ於テ被告事件ヲ重罪又ハ輕罪ナリト思料シ豫審ヲ請求シタルヲ以テ豫審判事其取調ヲ爲シタルニ其事實違警罪ナルヲ發見シタルノ場合ニ付本條ノ設ケアルナリ

第二百二十六條 被告事件輕罪ナリト思料シタル時ハ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲スヘシ被告人勾留ヲ受ケタル場合ニ於テ罰金ノ刑ニ該ルヘキ者ト思料シタル時ハ釋放ノ言渡ヲ爲スヘシ

禁錮ノ刑ニ該ルヘキ者ト思料シタル時ハ保釋ヲ許シ又ハ責附ヲ爲スヲ得

若シ被告人未ダ勾留ヲ受ケサル時ハ令狀ヲ發スルヲ得

△參看 明治十五年四月十八日司法省內訓

被告事件禁錮以上ノ刑ニ該リ輕罪裁判所又ハ重罪裁判所ニ移スヘキ場合ニ於テ留置ヲ要スル者ト思料スル時ハ豫審終結前収監狀ヲ發スル儀ト心得可シ此旨及內訓候也

被告事件罰金ノ刑ニ該ル可キ輕罪ナル時ハ法律上其被告人ヲ勾留スルヲ許サズ故ニ前ニ之ヲ勾留シタル時ハ速ニ釋放ス可キモノトス其他敢テ註釋ヲ要セス

第二百二十七條 被告事件重罪ナリト思料シタル時ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ若シ保釋ヲ許シ又ハ責付ヲ爲シタル時ハ其言渡ヲ取消スヘシ

重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニハ控訴裁判所檢事長ノ指揮アルマテ豫審ヲ爲シタル裁判所ノ監倉ニ被告人ヲ留置スヘキヲ記載スヘシ

第一項ハ敢テ註釋ヲ要セス第二項抑モ重罪裁判所ナルモノハ第二編第五章ニ記載セルカ如ク常時開廷セス又其場所モ一定セサルヲ以テ假令其重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲スト雖モ被告人ヲ送致スル所未ダ定ラサルニ因リ檢事ハ第二百六十條ノ規則ニ從ヒ其言渡書ニ一切ノ書類ヲ添ヘテ之ヲ控訴裁判所檢事長ニ送致シ又檢事長ハ檢事ヲシテ其書類物件及ヒ被告人ヲ重罪裁判所ニ移スノ處分ヲ爲サシムヘシ故ニ檢事長ノ指揮アルマテハ豫審

治○第二百廿五條ヨリ○第二百廿七條マテ

言渡ヲ爲シタル裁判所ノ監督ニ被告入ヲ留置セサルヲ得ス而シテ此處分ハ通常ノ手續ト異ナルヲ以テ特ニ之ヲ言渡書ニ記載スヘキトテ命スルナリ

第二百二十八條 豫審終結ノ言渡ニハ事實及ヒ法律ニ依リ其理由ヲ附スヘシ

管轄ニ非サルノ言渡ヲ爲スニハ其理由ヲ明示シ若シ被告入ヲ留置スヘキ時ハ其理由ヲ明示スヘシ

免訴ノ言渡ヲ爲スニハ被告事件罪ト爲ラサルヲ公訴受理スヘカラサルヲ及ヒ其理由又犯罪

ノ証憑充分ナラサル時ハ其旨ヲ明示スヘシ

違警罪裁判所又ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲スニハ犯罪ノ性質模樣証憑ノ充分ナルヲ及

ヒ其罪ヲ罰ス可キ法律ノ正條ヲ明示スヘシ

本條ハ頗シ錯雜セリト雖モ能ク之ヲ熟讀スルニ於テハ敢テ註釋ヲ要セス

第二百二十九條 前條ノ言渡書ニハ第三百十條ノ規則ニ從ヒ被告入ノ氏名等ヲ明示スヘシ

本條ハ敢テ註釋ヲ要セス

第二百三十條 書記ハ速ニ豫審終結ノ言渡書ノ謄本ヲ檢事民事原告人及ヒ被告人ニ送達ス

但是等ノ著ル第二百四十六條以下ノ規則ニ從ヒ其言渡ニ對シ故障ヲ爲スヲ得

本條モ亦敢テ註釋ヲ要セス

第二百三十一條 被告入ヲ逮捕スルコト能ハサル場合ニ於テ重罪裁判所又ハ禁錮ノ刑ニ該ル

可キ輕罪ニ付キ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シタル時ハ其旨ヲ言渡書ニ記載ス可シ但被告

人ハ勾留ヲ受ルニ非サレハ其言渡ニ對シ上訴ヲ爲スヲ得ス

本條モ亦同シク註釋ヲ要セス

第二百三十二條 前條ノ場合ニ於テ檢事又ハ民事原告人ハ假ニ被告人ノ財産ヲ差押フ可キ

コト民事裁判所ニ請求スルヲ得

前條ノ言渡ヲ爲スト雖モ被告人ナシテ自由ニ財産ヲ使用セシムルハ或ハ逃亡ヲ容易ナ

ラシムルノ資ト爲シ或ハ其財産ヲ隱匿密賣シテ民事原告人ニ對スル返還賠償ヲ爲サ、ル

ノ恐れアリ故ニ檢事又ハ民事原告人ハ假ニ被告人ノ財産ヲ差押フ可キコト民事裁判所ニ

請求スルヲ得ルモノトス而シテ之ヲ民事裁判所ニ於テスルモノハ此等ノ處分固ヨリ刑

事裁判所ノ關掌スル所ニ非ラサレハナリ

治〇第二百廿八條ヨリ〇第二百卅二條マテ

第二百三十三條 豫審終結ノ言渡ヲ爲シタル時ハ豫審判事ヨリ速ニ其旨ヲ裁判長ニ報告ス

〇七

又十五日毎ニ未決ノ豫審事件ニ付テ簡略ナル報告書ヲ差出スヘシ

本條ハ豫審判事ノ怠慢ヲ防制シ徒ニ其事務ヲ遷延セシメカランガ爲メニ設ケタルモノ也

〇第四章 豫審上訴(凡二十八條)

本章ハ敢テ註釋ヲ要セス

第二百三十四條 左ノ場合ニ於テハ檢事又ハ被告人ヨリ豫審終結ニ至ルマテ何時ニテモ故障ヲ爲スコトヲ得

- 一 管轄違ノ申立ヲ棄却シタル時
- 二 法律ニ背キ令狀ヲ發シ又ハ之ヲ發セサル時
- 三 法律ニ背キ保釋責付ヲ爲シ又ハ之ヲ爲ササル時
- 四 越權ノ處分アル時

民事原告人ハ私訴ニ付キ第四ノ場合ニ於テ故障ヲ爲スコトヲ得

豫審ノ故障ニ二種アリ白ク豫審終結前何時ニテモ爲スコトヲ得可キモノ日ク豫審終結ノ言

渡ニ對スルモノ即チ是レヨリ冷本條ニ於テハ其第一種ノ故障ヲ爲スコトヲ得可キ場合ヲ定

第二百三十五條 故障ヲ爲サントスル者ハ其裁判所ノ書記局ニ趣意書ヲ差出ス可シ故障アリタル時ハ書記其趣意書ヲ謄本ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ三日内ニ答辯書ヲ差出スコトヲ得

故障ニ附テハ豫審處分ノ執行ヲ停止セス但保釋責付ヲ爲シタルコト付檢事ヨリ故障アリタル時ハ其執行ヲ停止ス

被告人ノ故障ニ付テハ豫審處分ノ執行ヲ停止セス是レ何等ノ理由ニ因テ然ルカ若シ夫レ

被告人ノ故障ニ付テハ豫審處分ノ執行ヲ停止スルコトセハ爲メニ狡猾ナル被告人ハ或ハ之

レヲ奇貨トシ豫審處分ヲ遷延セシメントスルノ目的ヨリ漫リニ故障ヲ申立テ以テ裁判ヲ

妨礙スルノ弊害アルニ至ルヘシ是ヲ以テ被告人ノ故障ニ附テハ豫審處分ヲ停止セサルコ

ト定ム然レハ檢事ノ故障ニ於テハ敢テ此ノ如キ患ナシ故ニ檢事ノ故障アリタル時ハ豫審處分ノ執行ヲ停止スルモノトス

一七一

治〇第二百卅三條ヨリ〇第二百卅五條マテ

第二百二十六條 故障ハ其裁判所ノ會議局ニ於テ判事三名以上ニテ趣意書簽辯書其他訴訟書類及ヒ檢事ノ意見書ニ依リ之ニ判決ス可シ

會議局ノ言渡ハ速ニ之ヲ執行ス但其言渡ニ對シテハ豫審終結ノ言渡アリタル後上告ヲ爲ス可シ得

本條ハ敢テ註釋ヲ要セス

第三百二十七條 左ノ場合ニ於テハ檢事被告人又ハ民事原告人ヨリ豫審終結ニ至ルマテ豫審判事ヲ忌避スルコトヲ得

- 一 豫審判事又ハ其配偶者ト被告人被害者又ハ是等ノ者ノ配偶者ト親屬ナル時
- 二 豫審判事被告人又ハ民事原告人ノ後見人ナル時
- 三 豫審判事又ハ其配偶者ニ於テ民事原告人被告人又ハ是等ノ者ノ親屬ヨリ賄賂ニ非スト雖モ贈物ヲ收受シ若クハ聽許シタル時

大義親ヲ滅スト古語ニ見ル所ナレモ義ノ爲メニ親ヲ滅スルハ獨リ聖人君子ニ對シテ望ム可キ所ニシテ決シテ常人ニ向テ望ム可ラサル所ナリ法官如何ニ公平ナリト雖モ一方ハ

親屬ニシテ一方ハ親屬ナラサル時ハ識ラス知ラス親情ニ引カレテ不公平ノ裁判ヲ爲スコトキテ保シ難シ否ナ其弊アル可キコト必ス人情ノ免レサル所ナリ故ニ若シ本條第一ヨリ第三マテニ列記スル所ノ場合ニ於テハ檢事被告人又ハ民事原告人ヨリ豫審終結ニ至ルマテ豫審判事ヲ忌避シ他ノ裁判官ノ之レニ代ハラフコトヲ請求スルコトヲ得ルモノトス之ヲ稱シテ忌避ノ權ト云フナリ

贈與ヲ收受シ又ハ聽許シタル時トハ其贈與タル毫モ訴訟人ヲ曲庇陷害スル等ノ意ニ出テサルモノヲ云フナリ若シ曲庇陷害等ノ意アルコト於テハ裁判官當ニ忌避ヲ受クルノミナラス尙ホ其職ヲ視ハレ且ツ刑法上ノ責問ヲ被ムルモノトス

第二百三十八條 忌避ノ申立ハ豫審判事ニ之ヲ爲ス可シ但其申立ヲ爲スニハ趣意書二通ヲ書記局ニ差出ス可シ

書記ハ趣意書ヲ豫審判事ニ送致シ豫審判事ハ其送致ヲ受ケタルヨリ二十四時内ニ其申立ヲ認可シ又ハ棄却スルコトヲ趣意書ノ紙尾ニ記載シ一通ヲ書記局ニ藏置シ一通ヲ本人ニ送達ス可シ

治○第二百卅六條○第二百卅七條○第二百卅八條

本條第二項ノ中間ニ「其申立ヲ認可シ又ハ棄却スルコト云々」トアリ然ラハ假令檢事被告  
人又ハ民事原告人ヨリ忌避ノ申立ヲ爲スト雖モ其豫審判事ノ意見ニ因リ或ハ其申立ヲ認  
可スルコトアル可キモ或ハ又之ヲ棄却スルコトアル可シ其認可スルト否トハ一ニ其豫審判事  
ノ權内ニ在テ存スルナリ然ラハ其忌避サレタル人ニ其忌避ノ許否ヲ決セシムルモノニシ  
テ法律ノ精神何レノ點ニ在ルカ予輩少シク疑ヒナキ能ハサレトモ次條ヲ以テ豫審判事忌避  
ノ申立ヲ棄却シタル時ハ其申立人ヨリ故障ヲ爲スコト得ルモノト定メラレタレハ亦敢テ  
憂フルコト足ラサルナリ

第二百三十九條 豫審判事忌避ノ申立ヲ棄却シタル時ハ其申立人ヨリ故障ヲ爲スコト得  
會議局ニ於テハ故障ノ趣意書及ヒ豫審判事ノ辨明書ニ依リ判決ヲ爲スヘシ

豫審判事ヲシテ忌避ノ申立ヲ認可シ又ハ棄却スルコトヲ得セシムルハ從テ亦本條ノ設ケナカ  
ル可ラス若シ前條ノ設ケアリテ本條ノ設ケナキニ於テハ其忌避セラル者ヲシテ其忌避  
ノ許否ヲ決シタルハ終リ不公平ニ陷ルル恐レシキ能ハス故ニ本條ヲ設ケテ其弊ヲ防キ  
以テ其標準ヲ取ルル可キ也

第二百四十條 豫審判事ハ忌避ノ申立アリタル時又ハ其申立ヲ棄却シタルニ付キ故障アリ  
タル時ト雖モ豫審ノ手續ヲ繼續セシムル但最終ノ言渡ヲ爲ストテ得ルコトアリ又ハ前  
又急速ヲ要セザル事情ニ付テハ豫審ノ手續ヲ停止スルコトヲ得ルコトアリ  
本條ハ敢テ註釋ヲ要セス

第二百四十一條 會議局ニ於テ忌避ニ付テハ故障ヲ棄却シタル時ハ上告ヲ爲スコト得但豫  
審最終ノ言渡アリタル後ニ非サレバ之ヲ爲ルコトヲ得ズ

第二百四十二條 豫審判事自ラ第二百三十七條ニ定メタル理由アリテ認メ又ハ回避スヘ  
キ者ト思料シタル時ハ會議局ニ回避ノ申立ヲ爲スヘシ  
回避ノ申立ハ會議局ニ於テ之ヲ判決ス可シ

法官ハ必ス公平ナラサル可ラサルモノナリ否ナ其公平ナルヲ以テ其職ニ在ルモノナリ既  
ニ然ラハ何ソ其レ他ノ忌避スルヲ待テ始メテ之ヲ認可センヤ必スヤ本條ニ從テ他ノ忌避  
ノ申立アルヲ待テ其忌避ヲ受ク可キ原因アルコトヲ認メ又ハ回避ス可キ者ト思料シタル

治○第二百卅九條ヨリ○第二百四十二條マテ

時申立テ進メテ會議局ニ回避ノ申立ヲ爲ス可キモノトス  
予輩ハ第二百三十八條ト本條ヲ參看シテ少シク疑フ所ノモノアリ何ツヤ本條第一項ノ結  
文ハ「會議局ガ回避ノ申立ヲ爲ス可シ」ト命令シタルモノナレバ豫審判事ニ於テ第二百三  
十七條ニ定メタル原因アルト認メタル時ハ必ス會議局ニ回避ノ申立ヲナサ、ル可ラサ  
ルモノトス然ルニ檢事原告人ヨリ第二百三十七條ノ場合アルヲ認メ以テ之レカ忌避ヲ申  
立ツルコト於テハ豫審判事ハ已レノ是レ迄氣ノ付カザリシコト誤テナリトシ速ニ其申立ヲ  
認可ス可キニ第二百三十八條ヲ以テ或ハ其申立ヲ棄却ス可キノ權ヲ與ヘラレタルハ是レ  
何等ノ理由ニ因ルカ若シ夫レ其申立ヲ棄却スルノ權アリトスレハ本條ヲ以テ「會議局ニ  
回避ノ申立ヲ爲スヘシ」ト命令シタル法文ニ背反スルノ恐レナキガ予輩ハ少シク疑ヒナ  
キニ認ムルナリ

第二百四十三條 會議局ニ於テ忌避又ハ回避ノ申立ヲ認可シタル時ハ裁判所長更ニ他ノ判  
事ヲ豫審判事ニ爲シテ之レ處分ト雖モ更ニ取調ヲ爲スヲ得  
豫審判事ノ爲シタル處分ト雖モ更ニ取調ヲ爲スヲ得

本條ハ敢テ註釋ヲ要セズ

第二百四十四條 書記ハ自ら回避シ又ハ檢事其他訴訟關係人ヨリ會議局ニ申立テ之ヲ忌避  
スルヲ得

忌避ノ原由ハ本條ニ明文ナシト雖モ第二百三十七條ノ例ニ從フヘキモノナリ而シテ之ヲ  
回避スルノ場合ニ於テハ第二百三十七條ニ定メタル原由アルヲ認メタルノ外又回避ス  
ヘキ者ト思料シタル時モ亦同シク自ら回避スヘキモノトス

第二百四十五條 檢察官ハ被告人又ハ民事原告人ヨリ之ヲ忌避スルヲ得ス若シ自ら回避  
スヘキ者ト思料シタル時ハ其旨ヲ會議局ニ申立ツルヲ得

檢事補自ラ回避スヘキ者ト思料シタル時ハ其旨ヲ檢事ニ申立ツヘシ檢事ハ其申立ヲ許否ス  
ヘシ

檢事補豫審ニ付キ檢察官ノ職務ヲ行ヒタル場合ニ於テ自ら回避ス可キ者ト思料シタル時  
ハ其旨ヲ檢事ニ申立ツルヲ以テ足レリトス敢テ會議局ノ判決ヲ要セサルナリ

檢事回避シタル時ハ檢事補之レニ代リ檢事補回避シタル時ハ他ノ檢事補之レニ代リ若シ

治〇第二百四十三條〇第二百四十四條〇第二百四十五條

○第二百四十三條 ○第二百四十四條 ○第二百四十五條  
他審檢事補ヲテ課ル時該檢事之シテ代リ其職務ヲ行フ可キ時又該補之シテ代リ

八七

第二百四十六條 檢事ハ總テ豫審終結ノ言渡ニ對シ故障ヲ爲ス可キ得

民事原告人ハ私訴ニ付該越權ノ處分アルニ因ル豫審終結ノ言渡ニ對シ故障ヲ爲ス可キ得

被告人ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ニ對シ故障ヲ爲ス可キ得

輕罪裁判所又ハ違警罪裁判所ニ移スノ言渡ニ對シテ豫審判事ノ管轄違越權又ハ其事件ヲ

移ス可キ裁判所ノ管轄違越非該越權ノ故障ヲ爲ス可キ得

本條以下ハ豫審終結ノ言渡ニ對スル故障ヲ定ムルモノトス

第二百四十七條 故障ノ期限ハ日ヲ以テ算ス但言渡書ノ送達アリタルヨリ之ヲ起算ス

故障ノ期限ハ檢事民事原告人及ヒ被告人何レモ一日ナリ

第二百四十八條 檢事民事原告人及ヒ被告人故障ヲ爲ス時申立書ヲ書記局ニ差出ス

書記ハ速ニ其旨ヲ對手人ニ通知スヘシ

故障申立人ハ三日内ニ趣意書ヲ書記局ニ差出ス可キ得

書記ハ速ニ趣意書ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ三日内ニ答辯書ヲ差出ス可キ得

本條ハ敢テ註釋ヲ要セス

第二百四十九條 故障アリタル時ハ對手人ヨリ其判決アルマテ何時コテモ附帶ノ故障ヲ爲

ス可キ得

附帶ノ故障アリタル時ハ書記ヨリ其趣意書ヲ對手人ニ送達スヘシ對手人ハ三日内ニ答辯書

ヲ差出ス可キ得

本條モ亦敢テ註釋ヲ要セス

第二百五十條 豫審終結ノ言渡ハ故障ノ期限内又故障アリタル時ハ其判決アルマテ執行ヲ

停止ス但被告人ヲ勾留シ又ハ保釋責付ヲ取消スノ言渡ハ其執行ヲ停止セス

本條モ亦同シク註釋ヲ要セス

第二百五十一條 書記ハ故障趣意書答辯書其他訴訟書類ヲ會議局ニ差出スヘシ

故障ノ申立ハ會議局ニ於テ判決スルノ規則ナレバ以テ本條ノ設ケアルナリ

第二百五十二條 會議局ニ於テハ第二百三十六條ノ規則ニ從ヒ故障ノ判決ヲ爲スヘシ

豫審判事ノ言渡ヲ認明シタル時ハ其旨ヲ言渡シ若シ其全部又ハ幾分ヲ取消シタル時ハ全部

治○第二百四十六條ヨリ○第二百五十二條マテ

九七

ニ付キ更ニ言渡ヲ爲ス可ク

又被告人ヲ保釋責付又ハ勾留スルノ言渡ヲ爲ス可ク得

〇八一

本條ハ敢テ註釋ヲ要セス

第二百五十三條 會議局ニ於テ必要ナリトスル時ハ判事一名ヲシテ更ニ豫審ヲ爲シ又ハ其指示スル所ノ條件ニ付キ更ニ取調ヲ爲シ其報告書ヲ差出サシムヘシ

本條モ亦敢テ註釋ヲ要セス

第二百五十四條 會議局ニ於テ故障ノ取調中管轄違越權又ハ公訴受理ス可カラサルコトヲ發見シタル時ハ職權ヲ以テ豫審判事ノ言渡ヲ取消ス可ク得

本條モ亦同ク註釋ヲ要セス

第二百五十五條 會議局ニ於テ故障ノ取調中共犯ノ起訴ヲ受ケサル者アルコト附帶ノ犯罪ニ付キ豫審ヲ受ケサル者アルコトヲ發見シタル時ハ檢事ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ判事一名ヲシテ豫審ヲ爲シ其報告書ヲ差出サシムヘシ  
檢事ハ意見書ヲ差出ス可シ

會議局ニ於テハ報告書其他訴訟書類ニ依リ故障ト共ニ之ヲ判決スヘシ

本條ハ稍々錯雜セリト雖モ能ク之ヲ熟讀スルコト於テハ敢テ註釋ヲ要セス

第二百五十六條 故障ノ判決アリタル時ハ速ニ其言渡書ノ謄本ヲ檢事民事原告人及ヒ被告人ニ送達スヘシ

本條ハ敢テ註釋ヲ要セス

第二百五十七條 檢事其他訴訟關係人ハ會議局ノ言渡ニ對シ上告ヲ爲ス可ク得

上告ヲ爲ス可ク得キ原由其期限及ヒ其手續等ハ第四百十條以下ニ詳カナリ

第二百五十八條 被告人ニ送達スヘキ言渡書ニハ其言渡ニ對シ上訴スルヲ得ヘキコト及ヒ其期限ヲ記載スヘシ其記載ナキ時ハ規則ニ從ヒ更ニ言渡書ノ送達アルマテ被告人上訴ノ權ヲ失フコトナカルヘシ

本條ハ被告人ヲ保護スル爲メニ設ケタルモノナリ

第二百五十九條 第二百一十一條ヨリ第二百十三條マテノ規則ハ豫審上訴ニ付テモ亦之ヲ適用ス

一八一

治〇第二百五十三條ヨリ〇第二百五十九條マテ



本條ニ就テハ讀者ニ於テ第三百十一條ヨリ第三百十三條マテヲ參看スレハ則チ足レリ

二八一 第二百六十條 重罪裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時ハ檢事其言渡ニ一切ノ書類ヲ添ヘ速ニ之ヲ控訴裁判所檢事長ニ送致ス可シ

檢事長ハ一切ノ書類證據物件及ヒ被告人ヲ重罪裁判所ニ移スノ處分ヲ檢事ニ命ス可シ  
重罪裁判所以外ノ裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時ハ檢事速ニ其執行ヲ爲ス可シ

本條ハ敢テ註釋ヲ要セス

第二百六十一條 豫審ニ於テ被告人免訴ノ言渡ヲ受ケ其言渡確定シタル時ハ罪名ノ變更アルモ同一ノ事件ニ付キ更ニ訴ヲ受ルヲナカル可シ但新ナル証憑アル時ハ此限ニ在ラス

新ナル証憑アル時ハ檢事ヨリ之ヲ會議局ニ差出シ會議局ニ於テハ其起訴ヲ許ス可キヤ否ヲ判決ス可シ

英國ノ憲法ニ曰ク同人一罪ノ爲メニ二回ノ審判ヲ受ク可ラスト又李拔氏曰ク同人一罪ノ爲メニ再度ノ審判ヲ被ラサルヲ要ス是レ人身ノ安全ヲ保ツカ爲メニ緊要ナリ若シ一罪ノ爲メニ幾回モ拘留審判スルヲ得ハ政府ハ之ヲ以テ如何ナル人ヲモ脅迫シ滅亡スルヲ得

ヘント是レ今本條ニ於テ同一ノ事件ニ付キ更ニ訴ヲ受ケルヲナカルヘキヲ定ムル所以ナリ然レモ豫審ハ固ト證據ノ有無輕重ヲ裁判スルニ過ギサルモノナレハ後日新ナル証憑アルヲ發見シタル時ハ更ニ公訴ヲ起スヲ得可キモノトス

◎第四編 公判(凡四章百四十八條)

公判トハ豫審應ヨリ事件ノ送付ヲ受ケ或ハ豫審ナクシテ直チニ起訴アリタル時又ハ上等ナル裁判所ノ判決ニ因リ事件ヲ移サレタル時本案ノ裁判ヲ爲スヲ云フモノニシテ豫審ニ對スルノ名ナリ而シテ豫審ハ密行ニ取調ヲ爲セモ公判ハ裁判所ニ於テ衆人ノ傍聽ヲ許シ以テ公ケニ判決スルナリ故ニ公判ノ稱アリ

◎第一章 通則(凡五十八條)

通則トハ三個ノ裁判所即チ重罪裁判所輕罪裁判所及ヒ違警罪裁判所ニ通シテ用フヘキ規則ヲ云フ故ニ通則トハ云ヘルナリ

第二百六十二條 訴訟事件ハ書記局ノ簿冊ニ登記シタル順序ニ從ヒ之ヲ公判ニ付スヘシ

裁判所長ハ未決勾留ノ日數ヲ減縮スル爲メ職權ヲ以テ其順序ヲ變更スルヲ得

治○第二百六十條○第二百六十一條○第二百六十二條

又重要ナル事由ノ爲メ檢察官其他訴訟關係人ノ請求アリタル時モ亦順序ヲ變更スルコトヲ得  
本條ハ固ヨリ當然ノコトニシテ敢テ註釋ヲ要セス

第二百六十三條 重罪輕罪違警罪ノ訊問辯論及ヒ裁判言渡ハ之ヲ公行ス否ヲサル時ハ其言  
渡ノ效ナカレヘシ

△參看 明治十五年三月廿九日司法省丁第二十號達  
裁判傍聽ノ儀ハ官民ヲ擇ハズ渾テ傍聽席ニ相廻シ可申此旨相違候事

但外國人ニシテ公然ノ照會ヲ經タル者ハ此限リニ在ラス  
本條ハ敢テ註釋ヲ施スヘキ所ナシ否ナ本條ノ公平善美ナルヲ稱賛スヘキナレモ其法極善

至美ニシテ殆ノ筆ヲ下ス能ハサルナリ嘻々我邦治罪ノ改良本條ヲ以テ最モ著ト爲ス  
第二百六十四條 被告事件公安ヲ害シ又ハ猥褻ニ涉リ風俗ヲ害スルノ恐アル時ハ裁判所ニ

於テ檢察官ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訊問及ヒ辯論ノ傍聽ヲ禁スルコトヲ得其裁判言渡  
ヲ爲スコ當テハ傍聽ヲ許スヘシ

前條ニ記載シタル如ク訊問辯論ハ之ヲ公行ス可キノ原則ナレモ又時トシテハ或ハ公行ス  
可ラサルモノアリ即チ其事件公安ヲ害スルノ恐アルモノ例ヘハ國事犯ノ如キ又ハ貨幣

偽造ナル罪ノ如キハ其訊問辯論ヲ聽カシムル時ハ之ヲ世間ニ傳播シテ一般ノ人心ヲ動搖  
スルノ恐レアリ又毒殺ノ如キハ其毒物ノ性質方法等ヲ知ラシムルノ恐レアリ又ハ猥褻

淫ノ罪ノ如キハ原被ノ辯論證人ノ陳述其他犯罪ヲ證明スルニ當リ衆人ノ聞クニ恐ヒサル  
猥褻ノ事ニ涉リ風俗ヲ害スルノ恐レアリ故ニ此等ノ事件ニ於テハ裁判所ニ於テ檢察官ノ

請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訊問及ヒ辯論ノ傍聽ヲ禁スルコトヲ得然レモ訊問及ヒ辯論既  
ニ終リ其裁判ヲ言渡スニ至テハ敢テ右等ノ恐レアルコトナシ故ニ其裁判言渡ヲ爲スコ當テ

ハ傍聽ヲ許ス可キモノトス  
第二百六十五條 被告人ハ公廷ニ於テ身體ノ拘束ヲ受クルコトナシ但守卒ヲ置クコトアル可シ

禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人疾病アルニ非ラスニテ出廷ヲ肯セサル時ハ之ヲ引致スルコ  
ト得若シ出廷シテ辯論スルコトヲ肯セサル時ハ對審トシテ裁判言渡ヲ爲ス可シ

被告人獄舎ニ在テハ繩索鐵鎖等ヲ施シテ身體拘束ヲ受クルト雖モ公廷ニ出テ訊問辯論ヲ  
爲スコ至テハ之ヲ解脫シテ決シテ身體ノ拘束ヲ受クルコトナキモノトス是レ身體ヲ拘束ス

治○第二百六十三條○第二百六十四條○第二百六十五條

○第二百六十七條

ルキハ之レカ爲メ其精神ノ自由ヲ缺キ終ニ充分ノ陳述ヲ爲ス可能ハサルノ恐レアルヲ以テナリ但守卒ヲ置クニテアルモノハ被告人逃亡或ハ暴行等ヲ爲スノ恐レアルコト因ルナリ  
第二項罰金以下ノ刑ニ該ルヘキ被告人ハ隨意ニ公廷ヲ退テ裁判ヲ受ケルコトヲ得ルモノナ  
レハ敢テ本人ノ出廷スルヲ要セズト雖モ禁錮以上ノ刑ニ該ルヘキ被告人ニ在テハ必ス出  
廷シテ裁判ヲ受ケサル可ラサルモノトスルヲ以テ之ヲ設ケタルナリ  
第二百六十六條 被告人ハ辯論ノ爲メ辯護人ヲ用フルコトヲ得  
辯護人ハ裁判所々屬ノ代言人中ヨリ之ヲ選任スヘシ但裁判所ノ允許ヲ得タル時ハ代言人ニ  
非サル者ト雖モ辯護人ト爲スコトヲ得  
被告人タル者耳ニ法官ノ高聲ヲ聽キ目ニ公廷ノ嚴肅ナルヲ視心ニ刑ヲ被ムルコトヲ知リ耶  
チ慮ルニ當テヤ如何ナル剛毅ナル者ト雖モ或ハ其充分ナル辯論ヲ盡ス可能ハサルハ被告  
人ノ地位必ス免レサル所ナリ故ニ新法ニ於テハ辯護人ヲ用ラルコトヲ許シ以テ被告人ノ聲  
屈冤枉ニ沉ムル弊ヲガランコトヲ欲シタリ

第二百六十七條 被告人公廷ニ於テ暴行又ハ喧噪ヲ爲シ辯論ヲ妨礙スル時ハ裁判長ハ再  
度告戒ヲ爲シ仍ホ之ニ從ハサルハ檢察官ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ被告人ヲ退廷セシ  
メ若クハ勾留スルコトヲ得  
前項ノ場合ニ於テハ對審トシテ引續キ辯論及ヒ裁判言渡ヲ爲スコトヲ得  
若シ辯論二日ニ渉ルキハ更ニ被告人ヲ出廷セシム可シ  
本條ハ敢テ註釋ヲ要セス

第二百六十八條 被告人精神錯乱又ハ疾病ニ因リ出廷スルコト能ハサルハ其痊癒ニ至ルマテ  
辯論ヲ停止ス  
辯論ニ取掛リタル後被告人精神錯乱シタルキハ其痊癒ノ後新ニ辯論ヲ爲スヘシ其他ノ疾病  
ニ罹ルハ其痊癒ノ後前ニ停止シタルヨリ以後ノ手續ヲ爲スヘシ但五日間辯論ヲ停止シ又ハ  
檢察官其他訴訟關係人ノ請求アリタルキハ新ニ辯論ヲ爲ス可シ  
若シ被告事件及ヒ法律ノ適用ニ付キ既ニ辯論ヲ終リタル時ハ其痊癒ノ後更ニ取調ヲ爲スコ  
トシ裁判言渡ヲ爲スヘシ

本條ニハ罪ノ性質ニ就テ明文ナキヲ以テ重罪輕罪及ヒ違警罪ノ別ナク何レモ皆ナ通シテ  
治○第二百六十六條○第二百六十七條○第二百六十八條

六八一

ルハ之レカ爲メ其精神ノ自由ヲ缺キ終ニ充分ノ陳述ヲ爲ス可能ハサルノ恐レアルヲ以テナリ但守卒ヲ置クモ其罪ルモノハ被告人逃亡或ハ暴行等ヲ爲スノ恐レアルニ因ルナリ  
第二項罰金以下ノ刑ニ該ルヘキ被告人ハ隨意ニ公廷ヲ退テ裁判ヲ受ケルコトヲ得ルモノナリ  
以テ敢テ本人ノ出廷スルヲ要セズト雖モ禁錮以上ノ刑ニ該ルヘキ被告人ニ在テハ必ス出廷シテ裁判ヲ受ケサル可ナサルモノトスルヲ以テ之ヲ設ケタルナリ

第二百六十六條 被告人ハ辯論ノ爲メ辯護人ヲ用フルコトヲ得

辯護人ハ裁判所々屬ノ代官人中ヨリ之ヲ撰任スヘシ但裁判所ニ允許ヲ得タル時ハ代官人ニ非サル者ト雖モ辯護人ト爲スコトヲ得  
被告人タル者耳ニ法官ノ高聲ヲ聽キ目ニ公廷ノ嚴肅ナルヲ視心ニ刑ヲ被ムルコトヲアラン耶

チ慮ルニ當テヤ如何ナル剛毅ナル者ト雖モ或ハ其充分ナル辯論ヲ盡ス可能ハサルハ被告人ノ地位必ス免レサル所ナリ故ニ新法ニ於テハ辯護人ヲ用ラルコトヲ許シ以テ被告人ノ權利冤枉ニ沉ムル弊ナガラシクシテ欲シタリ

第二百六十七條 被告人公廷ニ於テ暴行又ハ喧噪ヲ爲シ辯論ヲ妨礙スル時裁判長ハ再

度告戒ヲ爲シ仍ホ之ニ從ハサルハ檢察官ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ被告人ヲ退廷セシメ若クハ勾留スルコトヲ得  
前項ノ場合ニ於テハ對審トシテ引續キ辯論及ヒ裁判言渡ヲ爲スコトヲ得

若シ辯論二日ニ渉ルハ更ニ被告人ヲ出廷セシム可シ  
本條ハ敢テ註釋ヲ要セス

第二百六十八條 被告人精神錯乱又ハ疾病ニ因リ出廷スルコト能ハサルハ痊癒ニ至ルマテ辯論ヲ停止ス

辯論ニ取掛リタル後被告人精神錯乱シタルハ其痊癒ノ後新ニ辯論ヲ爲スヘシ其他ノ疾病ニ罹ルハ痊癒ノ後前ニ停止シタルヨリ以後ノ手續ヲ爲スヘシ但五日間辯論ヲ停止シ又ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求アリタルハ新ニ辯論ヲ爲ス可シ

七八

若シ被告事件及ヒ法律ノ適用ニ付キ既ニ辯論ヲ終リタル時ハ其痊癒ノ後更ニ取調ヲ爲スコトナク裁判言渡ヲ爲スヘシ  
本條ニハ罪ノ性質ニ就テ明文ナキヲ以テ重罪輕罪及ヒ違警罪ノ別ナク何レモ皆テ通シテ

治○第二百六十六條○第二百六十七條○第二百六十八條